熊本県文化財調査報告　第35集

立神ドトク遺跡

――八代郡宮原町大字立神所在――

1979

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第35集

立神ドトク遺跡

たてがみ
―― 八代郡宮原町大字立神所在 ――

1979

熊本県教育委員会

序　文

熊本県教育委員会では、九州縦貫自動車道建設に伴い、日本道路公団の委託により、昭和50年度から昭和54年度にかけて松橋～八代間の埋蔵文化財発掘調査を実施中であります。

本報告書は、昭和51年度に実施した「立神ドトク遺跡」(八代郡宮原町）に関するものであります。

八代郡宮原町立神地区には、古墳をはじめとした数多くの埋蔵文化財が所在することが知られておりましたが、今回の調査によって、新たに先土器時代の石器が発見され、八代の黎明は古く約一万年も前にさかのぼることが明らかになりました。

本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに学術、研究上の一助になれば幸いです。

発掘調査の実施にあたっては、日本道路公団当局の御理解と御協力をはじめとして、調査指導の先生のほか、地元の方々の御協力を賜りました。ここに心からお礼を申し上げます。

昭和54年３月31日

熊本県教育長

井　本　則　隆

例　　言

1．この報告書は、昭和51年度に、日本道路公団の九州縦貫自動車道建設に伴なう事前調査として実施した八代郡宮原町立神ドトク遺跡（当初は立神寺院址と称した）の発掘調査に関する報告である。

2．発掘調査は、熊本県教育委員会が主体となり実施したもので、調査および本稿の執筆には主に江本直があたった。

3．発掘調査にあたっては、国学院大学文学部乙益重隆教授をはじめ別府大学文学部賀川光夫教授、同大学橘昌信助教授の来訪を受け現地での指導助言を受けました。橘昌信助教授には、遺物の整理や報告書の作成に関して終始御指導を受け玉稿をいただきました。地質および岩石に関しては熊本大学教養部高橋俊正助教授、同理学部長谷義隆助手の御教授、御指導を受け玉稿をいただきました。以上の先生方に深く謝意を表する次第です。

4．調査地での測量および遺構遺物の実測、写真撮影は、江本が行い遺物の整理は、熊本県文化財収蔵庫で行った。なお、遺物の実測には倉原友子・古森政次・豊崎晃一氏の協力があり、写真撮影は、文化課臨時職員白石巌が当たった。

目　次

本文目次

序　　文…… 1
例　　言…… 2
第Ⅰ章　序　　説…… 8
　1　調査に至るまで…… 8
　2　調査の経過…… 9
第Ⅱ章　遺跡の位置および環境…… 12
　1　遺跡の位置および立地…… 12
　2　周辺の歴史的環境…… 12
第Ⅲ章　遺跡の調査…… 16
　1　調査地について…… 16
　2　グリッドの設定…… 16
　3　立神遺跡付近の地質学的所見…… 18
　4　層　　位…… 20
第Ⅳ章　各地区の出土状況…… 25
　1　A地区の出土状況…… 25
　2　B地区の出土状況…… 26
　3　C地区の出土状況…… 32
　4　D地区の出土状況…… 32
第Ⅴ章　出土遺物について…… 39
　1　石器の種類…… 39
　2　石器の石材…… 40
　3　ナイフ形石器…… 40
　4　細石核…… 41
　5　細石刃…… 41
　6　尖頭器…… 41
　7　掻器・削器…… 41
　8　錐　　器…… 48
　9　彫　　器…… 48
　10　二次加工のある剥片…… 48
　11　使用痕のある剥片…… 67

12　剝片・砕片……67
13　石　　鏃……68
14　石　　核……68
15　磨　　石……68
16　土　　器……68
17　その他の遺物……68
第Ⅵ章　考　　察……71
1　先土器時代、縄文時代遺物の分離……71
2　先土器時代の遺物……73
3　押型文土器に伴う石器について……75
第Ⅶ章　ま　と　め……78

表　目　次

表1　各地区別石器出土数一覧表……39
表2　石材別割合表……40
表3　出土遺物一覧表（001～023）……59
表4　出土遺物一覧表（024～046）……60
表5　出土遺物一覧表（047～069）……61
表6　出土遺物一覧表（070～092）……62
表7　出土遺物一覧表（093～115）……63
表8　出土遺物一覧表（116～138）……64
表9　出土遺物一覧表（139～161）……65
表10　出土遺物一覧表（162～183）……66
表11　各地区別土器出土数一覧表……70
表12　器種別出土一覧表……72

挿　図　目　次

第1図　遺跡位置と周辺の遺跡……11
第2図　遺跡位置図……13
第3図　遺跡地形図……15
第4図　地形平板測量図……17
第5図　立神遺跡地盤概念図……19
第6図　B－1トレンチ北側土層図……21
第7図　土層位対比図（立神一櫛島）……22

第８図　土層位対比図…… 23
第９図　A地区調査実施状況図…… 25
第10図　須恵器出土状況…… 25
第11図　B地区調査実施状況図…… 26
第12図　B地区第Ⅱ層遺物水平・垂直分布図…… 27
第13図　B地区第Ⅲ層遺物水平・垂直分布図…… 29
第14図　B地区第Ⅳ層遺物水平・垂直分布図…… 31
第15図　C地区調査実施状況図…… 32
第16図　C地区第Ⅱ層遺物水平・垂直分布図…… 33
第17図　C地区第Ⅲ層遺物水平・垂直分布図…… 35
第18図　C地区第Ⅳ層遺物水平・垂直分布図…… 37
第19図　尖頭器の最大長さと幅…… 41
第20図　ナイフ形石器、細石核、細石刃、尖頭器、掻器・削器実測図…… 42
第21図　掻器・削器実測図…… 43
第22図　掻器・削器の最大長さと幅…… 44
第23図　掻器・削器実測図…… 45
第24図　掻器・削器実測図…… 46
第25図　掻器・削器、錐器、彫器、二次加工のある剥片実測図…… 47
第26図　石錐の最大長さと幅…… 48
第27図　二次加工のある剥片、使用痕のある剥片実測図…… 49
第28図　二次加工のある剥片の最大長さと幅…… 50
第29図　使用痕のある剥片の最大長さと幅…… 50
第30図　使用痕のある剥片、剥片・砕片実測図…… 51
第31図　剥片・砕片実測図…… 52
第32図　剥片・砕片実測図…… 53
第33図　石鏃、剥片・砕片実測図…… 54
第34図　石鏃、石核実測図…… 67
第35図　石核実測図…… 67
第36図　石核、磨石実測図…… 55
第37図　石核実測図…… 56
第38図　石鏃の最大長さと幅…… 57
第39図　石鏃の最大長さと厚さ…… 58
第40図　土器実測図…… 69
第41図　その他の遺物実測図…… 70

図 版 目 次

図版１　上：調査地遠景
　　下：調査風景（Ｂ地区表土剝ぎ作業）…… 82
図版２　上：調査風景（Ｂ地区表土剝ぎ作業）
　　下：Ｂ地区（西側から）…… 83
図版３　上：調査風景（Ｃ地区表土剝ぎ作業）
　　下：調査風景（Ⅳ層の掘り込み）…… 84
図版４　上：調査風景（Ｂ地区Ⅳ層）
　　下：グリッド状況（上方Ａ地区、下方Ｂ地区）…… 85
図版５　土層（Ｂ－１トレンチ北側壁面）…… 86
図版６　上：Ｂ地区調査終了状況
　　下：土層Ｂ地区北側壁面…… 87
図版７　上：Ｃ地区調査終了状況
　　下：土層Ｃ地区北側壁面…… 88
図版８　上：Ａ地区須恵器出土状況
　　下：Ｂ地区Ⅱ層縄文土器出土状況…… 89
図版９　上：Ｂ地区Ⅱ層石器出土状況
　　下：Ｂ地区Ⅱ層縄文土器出土状況…… 90
図版10　上：Ｂ地区Ⅲ層ナイフ形石器出土状況
　　下：Ｂ地区Ⅲ層石核出土状況…… 91
図版11　上：Ｂ地区Ⅳ層遺物出土状況
　　下：Ｂ地区Ⅳ層遺物出土状況…… 92
図版12　上：Ｂ地区Ⅳ層遺物出土状況
　　下：Ｂ地区Ⅳ層遺物出土状況…… 93
図版13　上：Ｃ地区Ⅱ層遺物出土状況
　　下：Ｃ地区Ⅱ層遺物出土状況…… 94
図版14　上：Ｃ地区Ⅱ層石鏃出土状況
　　下：Ｃ地区Ⅱ層遺物出土状況…… 95
図版15　上：Ｃ地区Ⅱ層石鏃出土状況
　　下：Ｃ地区Ⅱ層石鏃出土状況…… 96
図版16　上：Ｃ地区Ⅱ層遺物出土状況
　　下：Ｃ地区Ⅲ層遺物出土状況…… 97
図版17　上：Ｃ地区Ⅲ層遺物出土状況

下：C地区Ⅳ層遺物出土状況…… 98
図版 18　出土遺物（001～017　第20図）…… 99
図版 19　出土遺物（001、017～028　第21図）…… 100
図版 20　出土遺物（029～043　第23図）…… 101
図版 21　出土遺物（044～055　第24図）…… 102
図版 22　出土遺物（056～068　第25図）…… 103
図版 23　出土遺物（069～094　第27図）…… 104
図版 24　出土遺物（095～109　第30図）…… 105
図版 25　出土遺物（110～121　第31図）…… 106
図版 26　出土遺物（122～139　第32図）…… 107
図版 27　出土遺物（127、129～131　第32図）…… 108
図版 28　出土遺物（140～163　第33図）…… 109
図版 29　出土遺物（164～170　第36図）…… 110
図版 30　出土遺物（172～175　第37図）…… 111
図版 31　出土遺物（176～181　第38図）…… 112
図版 32　出土遺物（182、183　第39図）…… 113

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至るまで

日本道路公団は九州縦貫自動車道の建設を計画し、昭和46年６月に開通した「植木」―「熊本」インター間を手はじめに、「南関」―「熊本」、「熊本」―「御船」インターなど順次建設工事をおし進め、すでに昭和54年３月現在では、熊本県「松橋」インターから福岡を経て山口県の中国自動車道に接続するまでに至っている。

今回報告を行う立神ドトク遺跡が所在する「松橋」―「八代」インター間の路線が決定されたのは昭和46年２月のことである。

公団から依頼を受けて、熊本県教育委員会は路線内に所在する埋蔵文化財の確認調査を実施した。その結果、建設工事を実施する前に記録保存のための発掘調査を行うことになった遺跡は、下益城郡松橋町「竹崎城」、同郡小川町「年ノ神・中小野遺跡、アケサン古塔群」、八代郡竜北町「大瀬田横穴」、同郡宮原町「五ツ穴横穴群岩立Ｃ古墳、立神寺院址、平原瓦窯址、林源衛門の墓、野寺古墳、オサキ墓地」、八代市「境３・４号墳、平原古墳群、玉泉寺古塔群、清水古墳、興善寺跡、車塚古墳、川田・片町遺跡」があり、その数は19カ所に及んだ。

公団から発掘調査の依頼を受けて、昭和50年度に「竹崎城・年の神・中小野遺跡」の発堀調査を実施し、昭和51年度は、八代郡宮原町に所在する「五ツ穴横穴群・岩立Ｃ古墳・立神寺院址・平原瓦窯址・アケサン古塔群」の調査がはじめられた。そのような中で立神寺院址は昭和51年４月27日に発掘調査を開始した。調査の組織は下記に示すとおりである。

調査の組織

調査主体	熊本県教育委員会	
調査責任者	岩崎辰喜	（熊本県文化課課長）
	境　信三郎	（前熊本県文化課課長）
	合志太助	（前熊本県文化課課長）
調査総括	隈　昭志	（同文化財調査係長）
調査員	江本　直	（同学芸員）
調査事務局	真弓袈裟勝	（同課長補佐）
	河野宗忠	（同前課長補佐）
	前田利郎	（同課長補佐）
	望野正雄	（同管理係長）
	松本　巽	（同前管理係長）
専門調査員	橘　昌信	（別府大学文学部助教授）
	高橋俊正	（熊本大学教養部助教授）
	長谷義隆	（熊本大学理学部助手）

調査協力者	乙益重隆	(国学院大学文学部教授)
	賀川光夫	(別府大学文学部教授)
	宮原町教育委員会	
遺物整理	上野辰男	(熊本県文化課主幹)
石器実測	勢田広行	(熊本県文化課嘱託)
写真撮影	白石　巌	(熊本県文化課臨時職員)
整理	山城仁恵	(熊本県文化課嘱託)

2　調査の経過

昭和51年4月27日、現地に行き、調査地の状況を調べ、そのあと周辺の遺跡の踏査を実施した。また、地元、宮原町教育委員会と立神地区の区長宅をたずね、発掘調査を実施する旨の説明を行い、調査に対するご理解とご協力をお願いした。

翌4月28日、日本道路公団松橋工事事務所をたずね、発掘調査を開始することを連絡し、調査予定地の用地買収が完全に終了していることの最終的な確認を終えた。

5月4日、地元の作業者5名と現地に集合し、熊本県文化財収蔵庫から運んだ調査器材を調査地に搬入する。午後から立木の伐採と表土剝ぎを主とした作業を開始した。調査地をA～D地区に分け、作業はA地区から行うことにした。A地区はもともとミカン畑で一部の樹木は移植されていたが、残りは根元から伐採されていた。表土剝ぎ作業では、これらのミカンの根を取り除く必要があったが、調査地が急峻な坂を登りつめた丘の上にあるため機械力の導入ができず、すべて人力によって行った。

A地区とB地区との間には約1mの段差が見られるが、調査地の全体的な地層の状態を観察するために、この段差を垂直に切り落す作業もひきつづいて行った。以上のA地区の表土剝ぎ作業は6月3日に終了した。

6月4日からはB地区の表土剝ぎ作業をはじめた。A地区と同じように、もとはミカン畑であったが、樹木はほとんどが根元から掘り起され、他の場所へ移植されていた。したがって、根を掘り起す作業を行う必要はなく、作業は順調に進んだ。A地区の約2倍の面積があるにもかかわらず6月25日をもって終了した。

A、B両地区の表土剝ぎ作業を進めると、量的には少ないが、縄文時代の土器片や石器類が出土し、当初考えられた寺院に関する痕跡は認められなかった。

石器類の中には先土器時代の可能性が非常に強いスクレーパーや剝片があり、調査は、縄文時代と先土器時代を主として行うことになった。そして、遺物の分布は、B地区の南側にまとまった状態で見られ、さらにC・D地区に広がるものと思われた。

6月28日、C地区には竹および雑木が生い繁っており、立木の伐採や表土剝ぎ作業が非常に困難であることから、まずはD地区の方から先に行うことにした。D地区のほぼ中央に3m×15mの規模で設けたD－1トレンチからは、少量ながら石器類の出土があった。C地区

は、D地区よりも50～60cm程高い位置にあり、遺物の出土する可能性はD地区よりもずっと強いことから、調査を実施すべきであるとの判断をした。

6月30日からはさっそくC地区の立木の伐採と表土剝ぎ作業をはじめた。雑木や竹の伐採をすませたあと表土剝ぎ作業を行ったが、A・B・D地区の作業で手馴れたこともあり、作業は順調に進み早くも7月14日には終了した。これらの作業の中で石鏃やスクレーパーの出土が相つぎ、下層への掘り下げに期待がもたれた。また、雑木や竹の伐採が進み、見通しが良好となった時点で、STA 117+20の東側幅杭を基点とした一辺2mのグリッドを組み、基点杭から西側へA～T、南側へ1～35の番号をつけた。

7月15日からいよいよA地区のグリッドの掘り込みをはじめた。第I層を表土剝ぎ作業で終了しているので、第II層から10cmごとの掘り込みを行った。いずれも期待した程の遺構や遺物の出土はなく、7月20日をもってA地区の第III層までの調査は終了した。

7月21日からはB地区のグリッド掘りを行った。B地区では、K・M・O—17グリッドに多くの遺物が集中することが判明し、その周辺のグリッドを拡張して掘り込みを行った。O－17グリッドの第III層からは、ナイフ形石器一点が出土し、先土器時代と縄文時代早期とが重複した遺跡であることが判明した。一応第III層までの掘り込みは8月9日で終了する。

8月9日からは、C地区の第II、III層のグリッド掘りをはじめる。C地区には調査の可能なグリッドが87カ所あったが、その中の53カ所を調査した。その結果、少量ながら遺物はほぼ全域に散布することがわかり、下層への掘り込みを行う必要があることが判明した。

8月24日からは、A地区のB～F－5～7グリッドの第IV層の掘り下げを行ったが、第II～III層と同じく顕著な遺構・遺物の出土は見られず、A地区の調査を終了した。

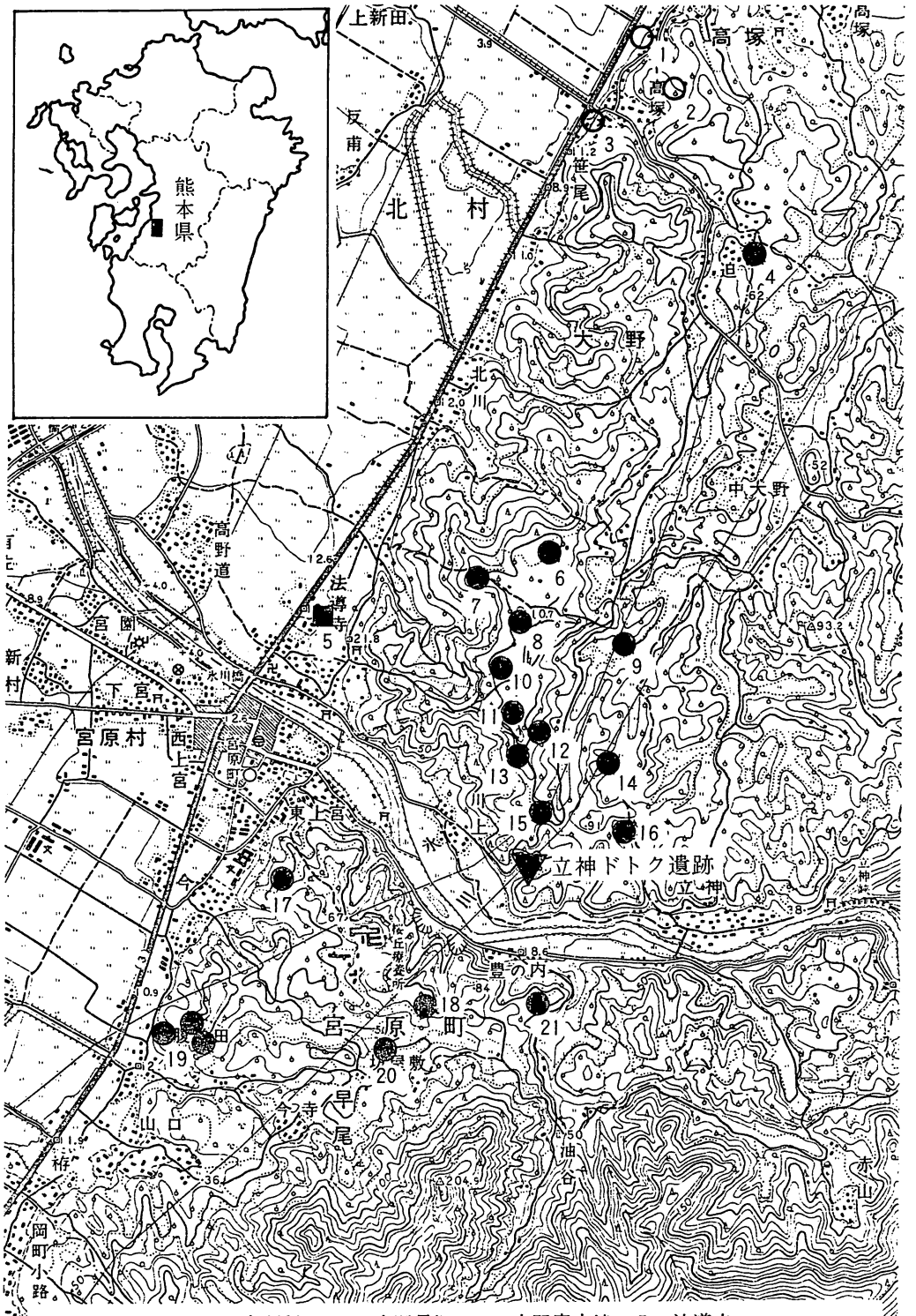
9月7日、A地区の第IV層の掘り込みを行っている間にC地区第II層の出土状況の実測・写真撮影と遺物の取り上げ作業を終了し、ひきつづき、第III層の掘り下げをはじめた。

9月22日からは第IVab層の調査で、B地区K～O－17～19グリッドから行った。並行してC地区の第III層の遺物出土状況の実測、写真撮影と遺物の取り上げを行った。

9月29日からはC地区の第IVa層の掘り下げ、並行してB地区の第IVab層の実測と遺物の取り上げを行う。

10月7日からはB地区第IVc層とC地区第IVbの掘り下げを行い、調査も大詰めを迎えた。10月13日はB、C両地区の第IVc層の掘り込みと、C地区第IVa、IVb層の実測と遺物の取り上げを行った。10月15日には、両地区の第IVc層の実測と遺物の取り上げを行い調査をほぼ終了した。10月16日、最後の調査として、B・C両地区の壁面の清掃作業と実測、写真撮影を行い、すべての調査を終了した。

10月18・19日、調査器材と遺物を熊本県文化財収蔵庫へ運び、プレハブを撤収した。



1．四ツ江貝塚　2．西平貝塚　3．大野貝塚　4．大野窟古墳　5．法導寺
6．姫ノ城古墳　7．物見櫓古墳　8．中の城古墳　9．岩立C古墳　10．端ノ城古墳
11．下溝口古墳　12．蕾園古墳　13．園ノ迫古墳　14．溝口古墳　15．川上古墳
16．九十九塚古墳　17．桜ケ丘古墳　18．平原瓦窯址群　19．大王山古墳群　20．一口坂古墳
21．平原古墳

第1図　遺跡位置と周辺の遺跡

0　1,000　2,000 m

第II章　遺跡の位置および環境

1　遺跡の位置および立地

本遺跡は行政区、熊本県八代郡宮原町立神字園ノ迫に位置し、国土地理院、昭和53年２月発行、50,000分の１「八代」では、図幅の北から 6.7cm、東から14.5cmにあたる。八代平野は東を九州山地にとざされているが奥深い山地から、砂川、氷川、球磨川によって多くの土砂が運びこまれ、広大な沖積平野が形成されたものである。九州山脈の西端にあたる東の山地には、城山(282m)、竜峰山(542m)、八峰山(574m)、八竜山(500m)などが南北に続き、急傾斜しながら海抜３～４ｍの平野部と境している。

今回の調査地が所在する宮原町は、八代平野の一部にあたり、国道３号をはさみ東を山地西に平野を有している。町の北側を氷川が流れ、竜北町と境している。氷川の右岸には五木・五家荘県立公園の「立神峡」があり、その清流と、石灰岩の露頭は見事な景勝をほこっている。この立神峡に大規模な石灰岩の露頭が見られるように、付近一帯の山地には多くの石灰岩も多い。この付近の基盤は宮原花崗閃緑岩と称されるもので、その上面を不整合の礫層や阿蘇溶結凝灰岩（阿蘇Ⅲ）、軽石凝灰岩（阿蘇Ⅳ）などが覆っている。宮原花崗岩は、臼杵・八代構造線の北に接し、宮原から東北東の方向に伸びている。

参考文献

原　田　敏　明　「熊本県の風土」『熊本県の歴史』　文画堂　1957

山　下　利　夫　「自然・風土」『宮原町郷土誌』　宮原町公民館　1959

松　本　唯　一　「特殊な地質と地形」『熊本県史』　熊本県　1965

江　上　敏　勝　「原始」『竜北村史』　竜北村　1973

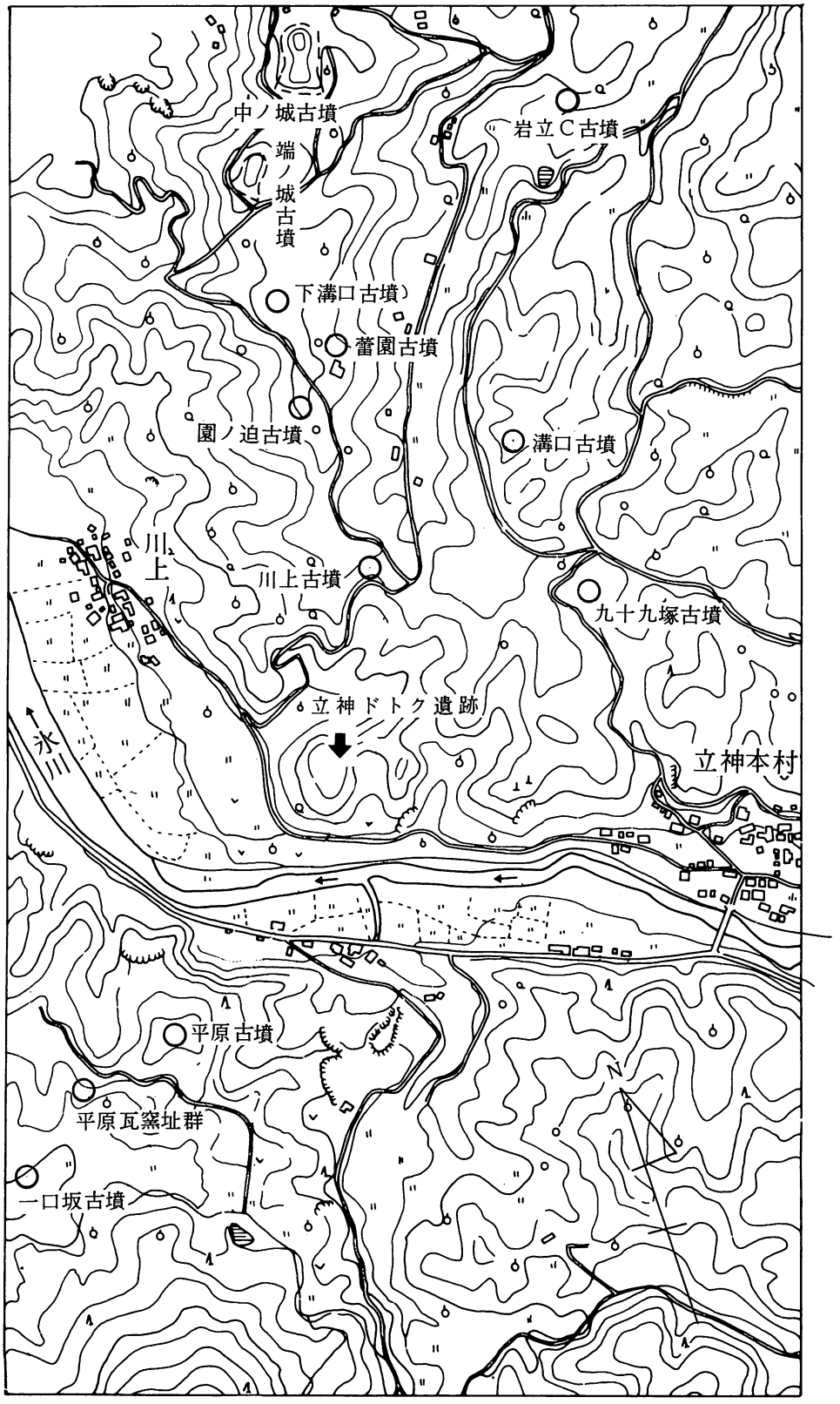
長谷義隆・高橋俊正　「立神遺跡付近の地質学的所見」『本報告書第Ⅲ章３』　熊本県教育委員会　1979

2　周辺の歴史的環境

砂川、氷川流域は県下屈指の遺跡密集地である。従来知られなかった先土器時代にも、今回新たに岩立Ｃ古墳と本報告を行う立神ドトク遺跡とが加わった。いずれにもナイフ形石器や二次加工のある剥片などが出土し、後期旧石器時代終末期の所産であろう。

縄文時代は、竜北町に古く明治12年、Ｅ・Ｓ・モースが発掘調査を手がけた大野貝塚（中期南福寺式）があり、近接して、西平貝塚（後期、西平式）、四ツ江貝塚が知られる。同じく貝塚としては鏡町に有佐貝塚（後期、出水式）があり、貝塚は縄文時代中期～後期にかけての遺跡が多い。これらの貝塚（中期～後期）に加えて、氷川に相対した平原瓦窯址群、立神ドトク、岩立Ｃ遺跡から、押型文土器や条痕文土器が新たに出土したため、縄文時代は早期から後期にかけて各時期の遺跡が存在することが明らかになって来ている。

弥生時代には、好資料を有する遺跡が少ないが、昭和52年度に野津地区の水田が圃場整備の



第2図　遺跡位置図

0　100　200m

ための溝掘り作業が行われていた時に、脚台付の甕をはじめとする多量の弥生式土器が発見されたことがあり、今後、水田地下から大きな遺跡が発見される可能性が強いといえよう。

古墳時代にはいると遺跡の数は爆発的に増加している。竜北町に所在する高塚古墳、大野窟古墳をはじめとして、姫ノ城・中ノ城・端ノ城・物見櫓古墳の野津古墳群はあまりにも著名である。現在は消滅してしまったが、石製、蓋の出土で知られる天ノ堤古墳も、かって野津古墳群の近くに所在していたものである。宮原町にも大王山古墳群をはじめとして数多くの古墳が所在する。大王山古墳群は大字早尾地区に所在しているが、その中で三号墳は、板石積みの長方形の石室の中に、凝灰岩製の石棺を入れたもので、石棺は身が舟の形をなし、蓋は家の形を形どり身の床には石枕、屋根には両側端に四つの穴をあけ、亀甲形の装飾や、縄掛け突起が見られるなど非常に珍しい古墳である。今回の調査地の立神地区に限って古墳を列記すれば、蕾園古墳群、五ツ穴横穴群、馬原古墳群、園ノ迫古墳、七ツ穴横穴群、九十九塚古墳群、滑川古墳群、湯口古墳群、下溝古墳群、立神本村古墳群、岩立古墳などが所在している。

氷川がもたらす肥沃な水田地がおりなした豊富な生産基盤をもとにして県下屈指の古墳文化が形成されたものと理解されるが、古墳時代以降もこの状態はひきつづけられたものであろう。

平原瓦窯址群からは奈良時代の布目瓦が出土している。今のところここで生産された布目瓦がつかわれたところは定かではないが、付近に寺院址が存在したであろうことは充分考えられるものである。野津に所在する法導寺は平安時代後期の布目瓦を出土し、律令時代最後の所産といえよう。

参考文献

乙　益　重　隆　「通史」『宮原町郷土誌』　宮原町公民館　1959

江　上　敏　勝　「原始」『竜北村史』　竜北村　1973

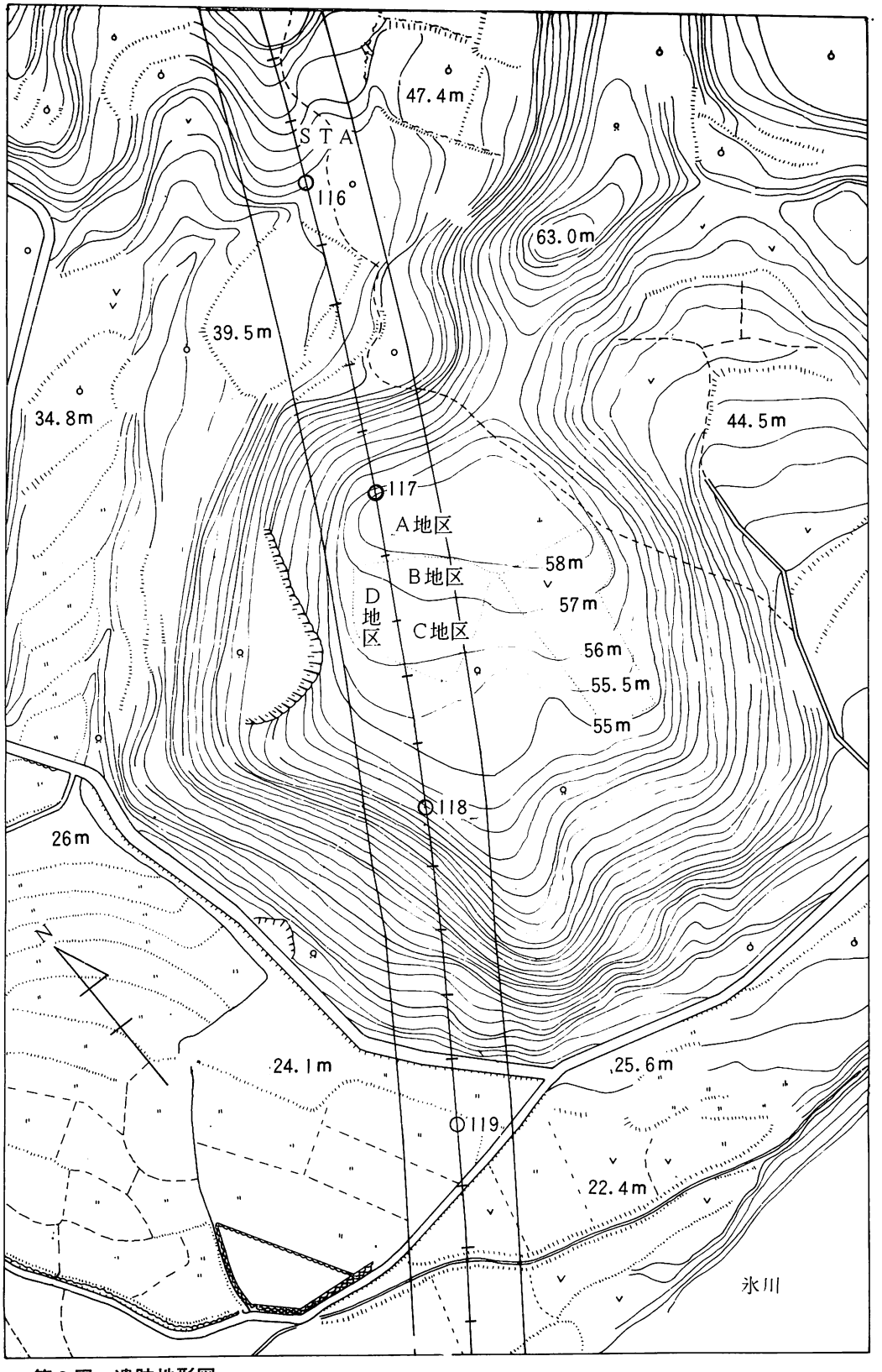
富　田　紘　一　「旧石器・縄文時代の熊本」『新・熊本の歴史１』　熊本日日新聞社　1978

乙　益　重　隆　「原始時代」『熊本県の歴史』　文画堂　1957

乙　益　重　隆　「史前」『熊本県史』　熊本県　1965

「九州自動車道と文化財第１号」『熊本の文化財調査』　熊本県教育委員会　1977

「九州自動車道と文化財第２号」『熊本の文化財調査』　熊本県教育委員会　1978



第3図　遺跡地形図

0　100m

第Ⅲ章　遺跡の調査

1　調査地について

調査地は氷川の右岸に位置する。国道３号から県道宮原－五木線に方向を変えると、ほどなく宮原の町並みを過ぎて、やがて左手に氷川が見え、立神の集落に着く。立神本村は、氷川の右岸にある。立神本村から右岸にそった細い道を行くと約 1,000ｍで立神川上の集落に着く。調査地はこの立神本村から、川上の集落へと向う途中で、右手の急峻な坂を登りつめたところにある。標高55～58.5ｍで眼下に氷川を見下し、野津古墳群は真北の方向に直線で約 800ｍの地点にあたる。平原瓦窯址群とは直線にして約 600ｍで、氷川を峡み相対した状態にある。

調査地の行政区は八代郡宮原町大字立神字園ノ迫で、およそ４筆に分かれており、北側から2997番地・2992番地・2991番地・2993番地である。地籍は2997、2992番地が畑地で、残りは山林であった。北側の2997番地の標高が最も高く58.5ｍで南側にいくにしたがって低くなり、約3.5ｍの比高差がみられた。便宜上、2997番地をＡ地区として、2992番地をＢ地区、2991番地をＣ地区、2993番地をＤ地区とそれぞれ呼称した。

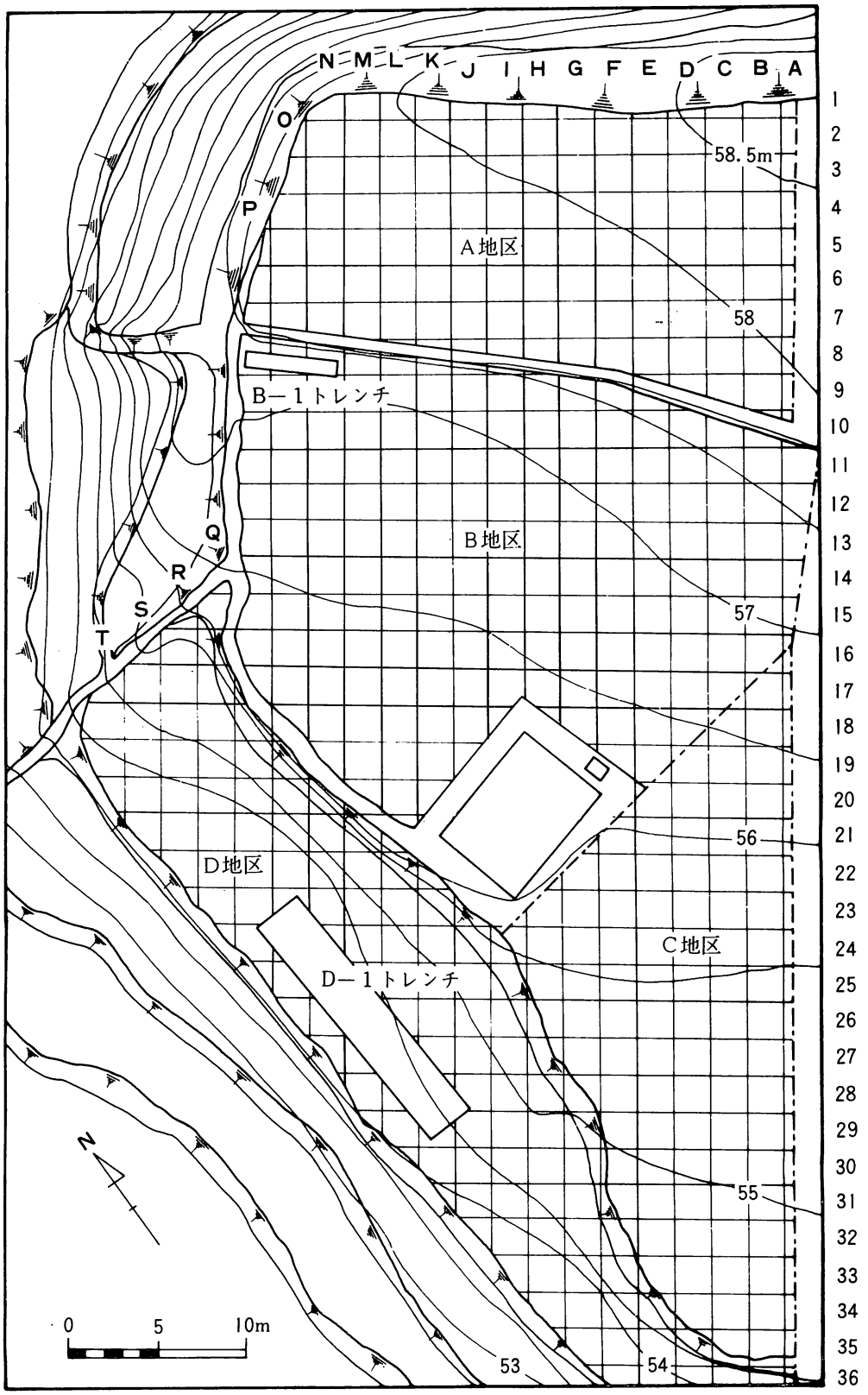
調査前の状況を述べればＡ、Ｂ両地区はもともとミカン畑であったが移植のため根元から掘り起し、残りは伐採されていた。Ｃ地区は雑木と竹とが入り混じった雑木林で、Ｄ地区は樫木を伐採したあと枝木が散らばった荒地であった。調査地は以上のような荒地であったので、調査は全体の表土剝ぎ作業から開始することにし、Ａ地区から順次作業を進めた。

2　グリッドの設定（第４図参照）

グリッドはＳＴＡ 117＋00の東幅杭を基点とした。基点から中心杭へ向って東西の線をひき、直交して南北の線を設定した。東西の線を２ｍごとにＡ～Ｔとし、同じく南北の線を１～35とした。

このほかＢ地区の北隅に土層観察のために設けたトレンチと、Ｄ地区のほぼ中央に遺物の出土状況を調べるために設けたトレンチは、それぞれ、グリッド番号に関係なく、Ｂ－１、Ｄ－１トレンチと呼んだ。第４図に全体のグリッドを示したが、発掘深度については、各地区の調査実施状況図に示すことにした。

なお、グリットの方向は方位には合せていない。また、Ｂ地区の空白部分は調査事務所を設置したところで調査を除外したため、グリッドの設定は行っていない。Ａ地区とＢ地区とは、畑の境で分け、Ｂ地区とＣ地区も畑と雑木林の境に直線を引いて分けた。Ｄ地区はＢ・Ｃ地区の斜面から下とした。


N M L K J I H G F E D C B A
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36
O
P
Q
R
S
T
58.5m
58
57
56
55
54
53
A地区
B地区
C地区
D地区
B－1トレンチ
D－1トレンチ
N
0 5 10m

第4図　地形平板測量図

3　立神遺跡付近の地質学的所見

熊本大学理学部　長　谷　義　隆
同　教養部　高　橋　俊　正

I　はしがき

筆者らは、熊本県教育庁文化課の委嘱により、昭和51年9月25日および昭和52年9月27日、九州縦貫道建設工事予定地にある立神遺跡・平原瓦窯址群および岩立古墳付近の地質学的観察を行なった。ここに観察の概要をとりまとめ報告する。

現地観察に際しては、熊本県教育庁文化課江本直氏をはじめ、職員の方々に考古学的見地からの御教示を賜わった。厚く御礼申し上げる。

II　立神遺跡付近（第5図参照）

この付近の基盤岩は、宮原花崗閃緑岩である。本岩は、一般に風化作用の結果、脆弱になっている。

宮原花崗閃緑岩を不整合に覆って厚さ1～3mの礫層が存在し、さらに上位には整合関係で厚さ10mをこえる黒色溶結凝灰岩が重なる。この凝灰岩の上部は、風化によって灰褐色を呈する。黒色溶結凝灰岩は阿蘇火山を噴出源としている。岩相から阿蘇3期の火砕流堆積物であると推定されるが、今回の観察が小範囲に限られたので明確なことは云えない。

黒色溶結凝灰岩の上位には、厚さ数mの砂礫層が不整合に覆っている。この砂礫層中の礫は亜角礫であり、その産状から、崖錐堆積物である可能性も考えられるが、この丘陵では、ほぼ同一レベルの数ケ所の露頭に砂礫層が存在することから、この砂礫層は黒色溶結凝灰岩と軽石凝灰岩との間に挾在するものと考えられる。礫種はチャート、砂岩、粘板岩など古期岩類に由来するものが多い。

軽石凝灰岩はやや風化している。風化して黄色を呈する軽石を多く含み、角閃石の結晶をしばしば含むことから、この軽石凝灰岩は阿蘇4期火砕流堆積物に相当すると考えられる。軽石凝灰岩の最上部30～40cmは著しく風化し、粘土化している。

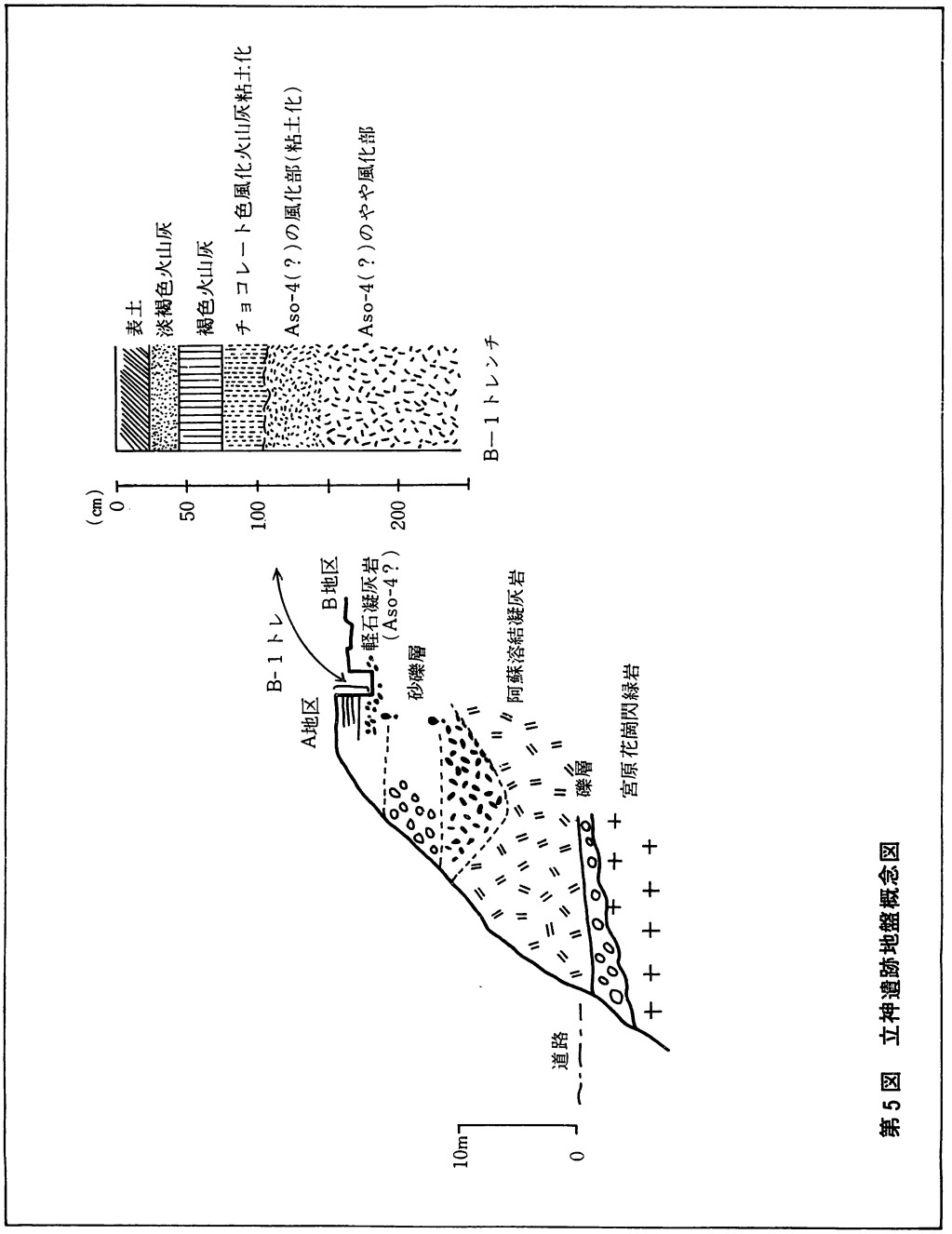
軽石凝灰岩の上位に重なる厚さ約30cmの褐色粘土質火山灰層は、ブロック状に、チョコレート色を呈している部分を含む。軽石凝灰岩との境界は明瞭でなく、波状又はV字状に軽石凝灰岩上部の粘土化帯に入りこんでいる部分が認められる。この褐色粘土質火山灰層は、軽石凝灰岩の風化部の一部なのか、独立した火山灰層かは明らかでない。

さらにその上位は、厚さ約30cmで、やや赤味を帯びた褐色火山灰層である。この火山灰層は、考古学的に、縄文時代の古い時期の遺物を包含する層と考えられている。

さらに上位には、厚さ約25cmのやや黄味を帯びた淡褐色火山灰層が存在する。考古学的に、

この火山灰層は縄文時代前期の遺物を包含するものと考えられている。

最上位には、厚さ約30cmの黒味をおびた茶褐色の耕作土が存在する。



第5図　立神遺跡地盤概念図

4 層　位

B－1トレンチ北側断面の土層図は

第Ⅰ層　耕作土層　第Ⅱ層の淡黄褐色土が主体となり、第Ⅲ層の小さな土塊が一部混じっている。また耕作等によって攪乱や植物等の腐植土が混じり、部分的に黒褐色を呈する。全体的にさらさらとした感じで粘質

第Ⅱ層　淡黄褐色土層　細かな粒子で淡黄褐色を呈し、キナコ状にある。

第Ⅲ層　暗褐色粘質土層　色調は暗褐色を呈し、粒子が大きくなり、水分を多く含み固くなる。したがって、第Ⅱ層とは、色調および粘質土に明確な差異があり、分離は容易である。

第Ⅳ層　赤褐色粘質土層　色調は第Ⅲ層にくらべていくぶん明るくなり、砂粒をより多く含み、粘質性がいく分うすらぎ非常に固くなる。

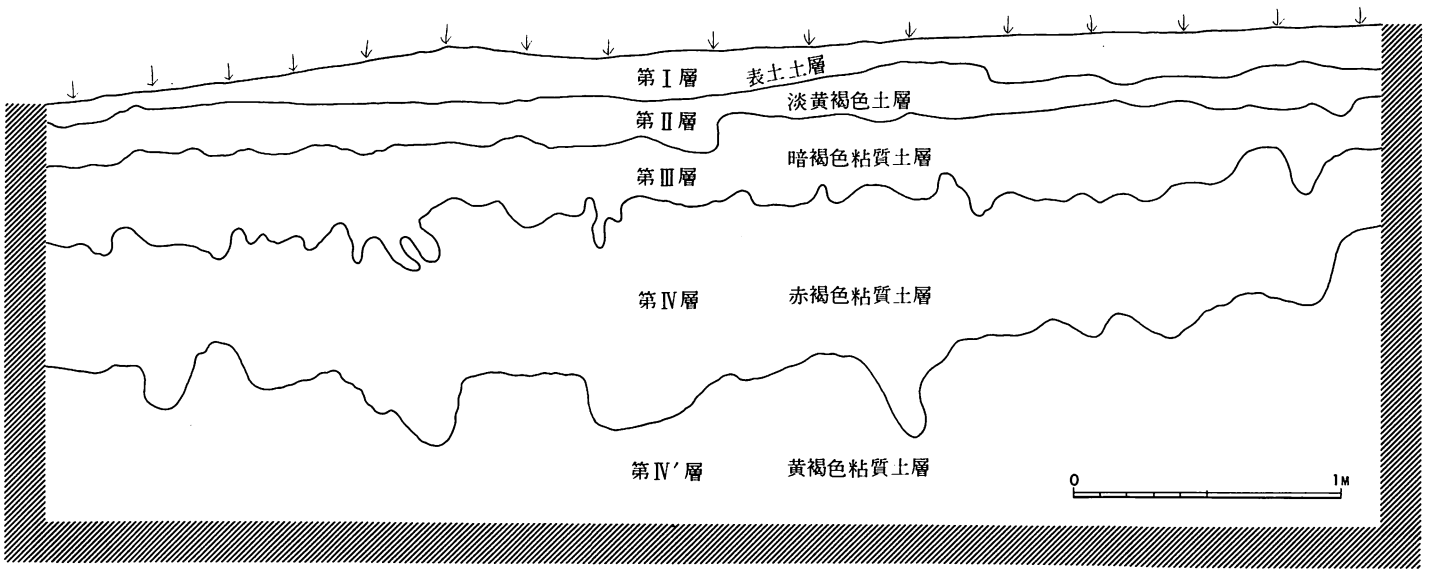
Ⅳ'層は下位になるにしたがい、色調が赤褐色から黄褐色へと変化し、砂粒の混入が多くなり、小石を多く含むようになる。小石は凝灰岩質のやわらかなものがほとんどである。黄褐色や赤褐色を呈する小石もみられるが、いずれも柔かくくずれやすいもので凝灰岩質のものと思える。

以上のような層序と土質の特徴を述べることができよう。また第Ⅲ層と第Ⅳ層との境に著しい起伏がみられることをつけ加えておきたい。

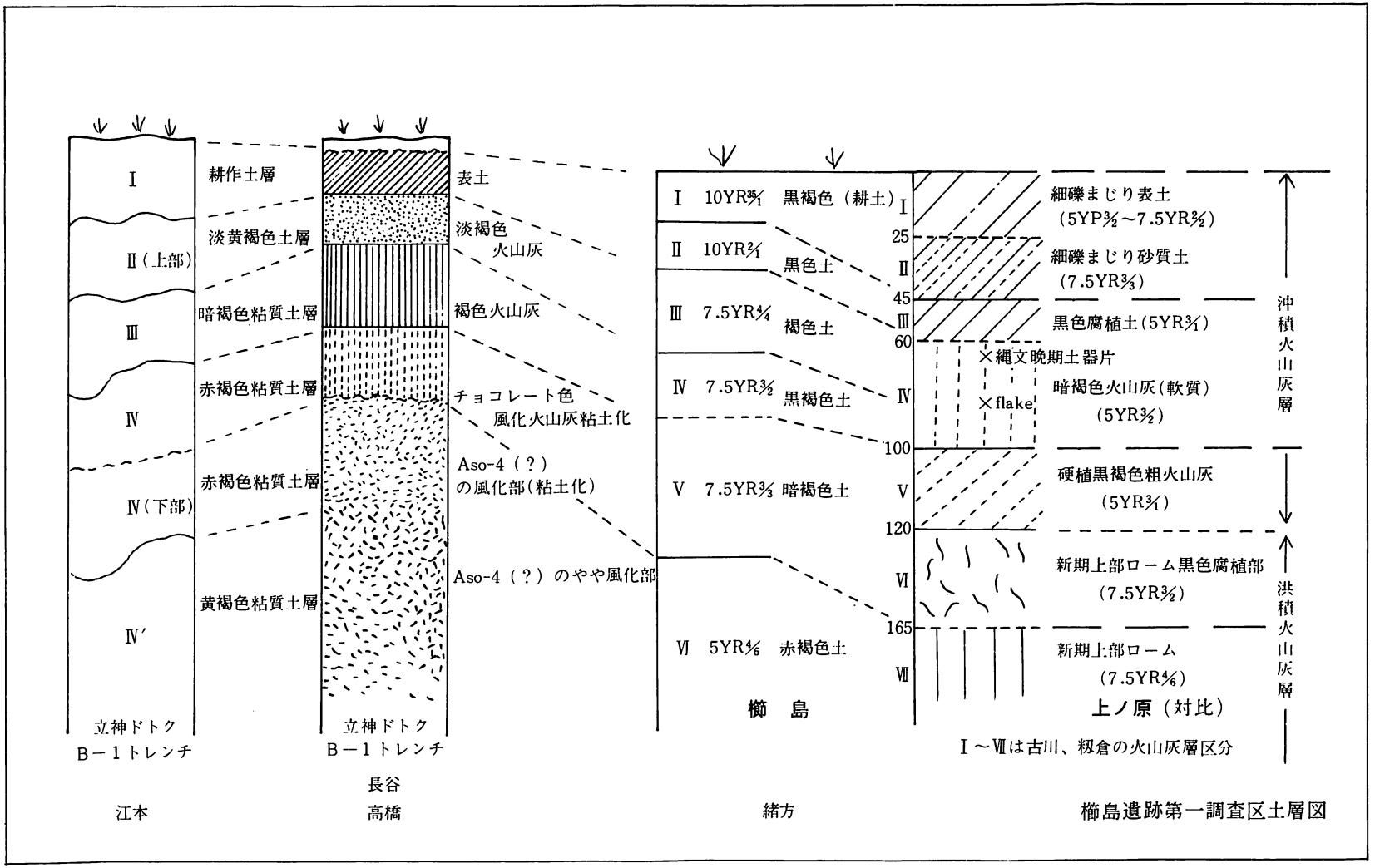
さて、長谷・高橋両先生の報告された概念図と対比した柱状図は第7図に示す通りである。筆者は第Ⅳ層を第Ⅳ層・第Ⅵ'層の2つの層に分けているが、さらに両先生は、筆者のいう『第Ⅳ層・第Ⅳ'層』を「チョコレート色風火火山灰粘土化・ASO－4（？）の風化部（粘土化）・ASO－4－（？）のやや風化部」の三つの層に分けられており、両者には若干の相違が見られる。筆者のいう第Ⅳ層が二つに細分され、第Ⅳ'層と『ASO－4のやや風化部』とは一致するものと理解することができよう。

以上のような、第Ⅳ層の特徴に加えて第Ⅱ層は淡褐色を呈する火山灰土であることなどの特徴をもとに、他遺跡の土壌図と対比をすることとしたい。熊本県周辺沖積火山灰土壌の対比については、籾倉克幹氏の調査に詳しい。

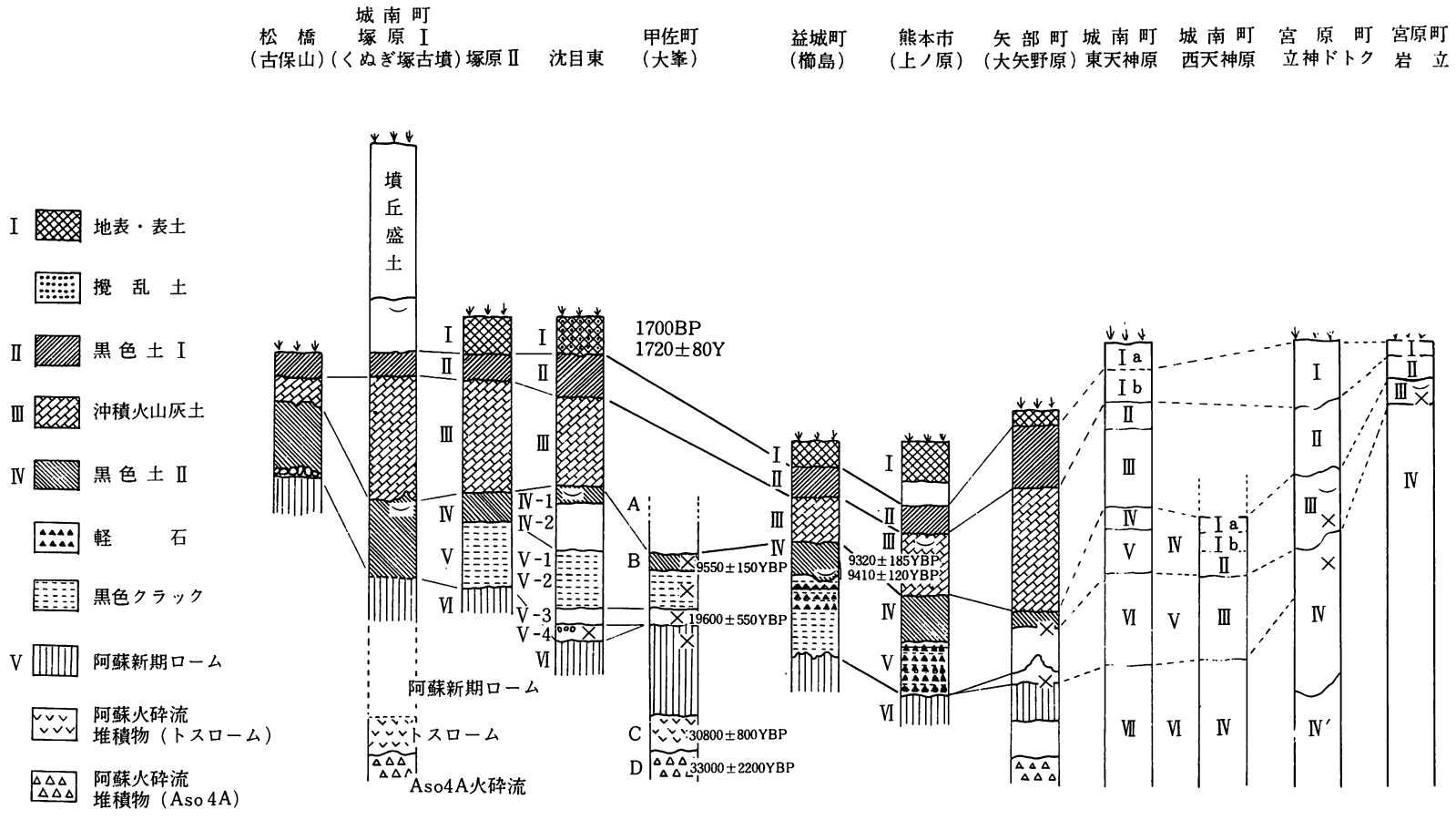
前記の特徴を櫛島遺跡第一調査区土層図と対比すると第7図のごとく示すことができよう。櫛島の第Ⅱ層黒色土は、立神には見られない。もともと存在していなかったのかどうかについては定かでないが、丘陵の頂上に立地することから流れ去ってしまったことも充分考えられる。[註1] ともあれ、立神第Ⅱ層と櫛島第Ⅲ層褐色土とは土質・色調および沖積火山灰土であることにつき類似性が非常に強く、両者を対比することは充分可能である。櫛島の第Ⅳ層と立神第Ⅲ層とは互いに暗褐色粘質土の火山灰土であり類似する。立神第Ⅳ層上面と櫛島第Ⅴ層、立神第Ⅳ層下面と櫛島第Ⅵ層とそれぞれに対比でき、ともに洪積火山灰層と見ることができよ



第6図　B－1トレンチ北側土層図


Ⅰ
Ⅱ(上部)
Ⅲ
Ⅳ
Ⅳ(下部)
Ⅳ′
立神ドトク
B－1トレンチ
江本
耕作土層
淡黄褐色土層
暗褐色粘質土層
赤褐色粘質土層
赤褐色粘質土層
黄褐色粘質土層
表土
淡褐色
火山灰
褐色火山灰
チョコレート色
風化火山灰粘土化
Aso-4（？）
の風化部(粘土化)
Aso-4（？）のやや風化部
立神ドトク
B－1トレンチ
長谷
高橋
Ⅰ 10YR3/1 黒褐色（耕土）
Ⅱ 10YR2/1 黒色土
Ⅲ 7.5YR4/4 褐色土
Ⅳ 7.5YR3/2 黒褐色土
Ⅴ 7.5YR3/3 暗褐色土
Ⅵ 5YR4/6 赤褐色土
櫛島
緒方
Ⅰ
25
Ⅱ
45
Ⅲ
60
Ⅳ
100
Ⅴ
120
Ⅵ
165
Ⅶ
細礫まじり表土
(5YP3/2～7.5YR2/2)
細礫まじり砂質土
(7.5YR3/3)
黒色腐植土(5YR3/1)
×縄文晩期土器片
×flake
暗褐色火山灰(軟質)
(5YR3/2)
硬植黒褐色粗火山灰
(5YR3/1)
新期上部ローム黒色腐植部
(7.5YR3/2)
新期上部ローム
(7.5YR4/6)
上ノ原（対比）
沖積火山灰層
洪積火山灰層
Ⅰ～Ⅶは古川、籾倉の火山灰層区分
櫛島遺跡第一調査区土層図

第7図　土層位対比図



熊本周辺沖積火山灰土土壌対比図

第8図 土層位対比図

う。

以上のごとく櫛島遺跡第一調査区土層との対比をもとに籾倉氏が「塚原」[註2]の報告の中に発表された熊本周辺沖積火山灰土壌対比図に岩立C遺跡[註3]、東西天神原遺跡[註4]を加えた対比図の試案は第8図である。

さらに、立神ドトク遺跡の層位についての特徴を述べれば次のとおりである。

まず県内の広い地域に見られる第II層黒色土Iが立神には認められない。前述したように、丘陵の頂上に位置することから、元来、存在していたものが流出してしまった可能性が大であろう。立神第II層は、土質、色調など大矢野原III層等に対比できる。立神第III層も大野野原IV層等に対比できよう。　神第IV層から下層を阿蘇新期ローム～ASO4に対比できようが、軽石、黒色クラック層が存在していたのか否かについては定かにしえない。そして第III層と第IV層との間には多くの起伏があり、層的な乱れがある。各遺跡の遺物の出土状態から推察すると、プライマリーな状態であれば、第II層には縄文前期から晩期の遺物を、また第III層には縄文早期の遺物をそれぞれに包含していることが知られ、第IV層からは先土器時代遺物の包含層といえよう。

註1．緒方勉　「土層層位」『櫛島』　熊本県教育委員会　1975

註2．籾倉克幹　「塚原周辺の地形地質」『塚原』　熊本県教育委員会　1975

註3．八代郡宮原町大字立神字岩立に所在、後期古墳とともに縄文時代、先土器時代の遺物が出土。

註4．島津義昭・田中寿夫他『益城郡衙』　熊本県教育委員会　1978

第Ⅳ章　各地区の出土状況

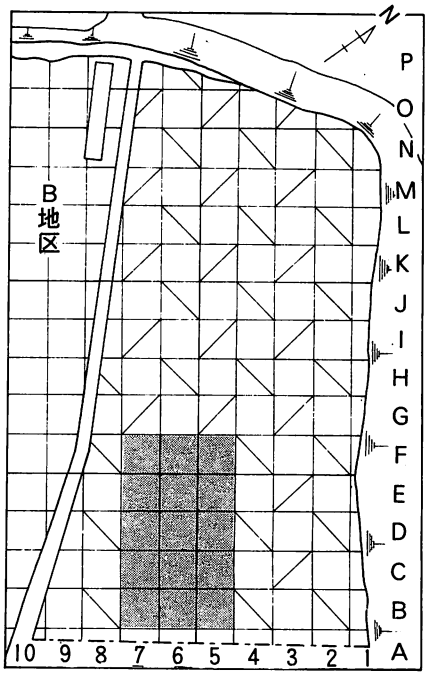
1　A地区の出土状況

A地区で掘り込みを行ったグリッドは第9図に示すとおりで、斜線で示すグリッドは第Ⅲ層まで、点で示すグリッドは第Ⅳc層まで掘り込みを行った。

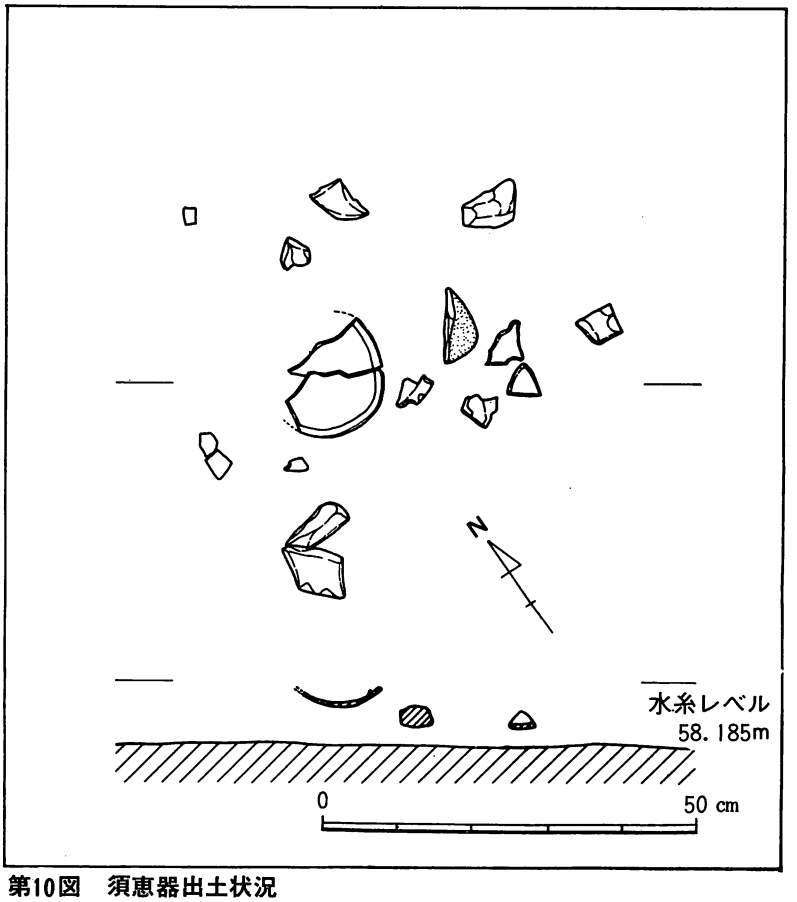
出土した遺物には、スクレーパー1点と磨石2点それに須恵器片がある。この中でスクレーパーは第Ⅰ層表土からの出土である。須恵器片は3点あるが、そのうち2点は表採資料で、残り一点は第Ⅱ層直上から出土したものである。いずれも須恵器の蓋で身の部分の出土はない。周囲に河原石が見られたが、遺構として捉えるまでには至らなかった。

このほかに、石器と認定できるものの出土はなかった。

A地区は今回の調査地で最も高い位置にあり、北側および東側は切り落されている。須恵器の出土は単独であり、墓地とされた時代があった可能性もある。



第9図　A地区調査実施状況図



第10図　須恵器出土状況

2　B地区の出土状況

表採と第Ⅰ層から出土した石器は、細石核1点、石鏃5点、掻器12点、二次加工のある剥片5点などがある。土器は須恵器、青磁片各1点だけで少ない。

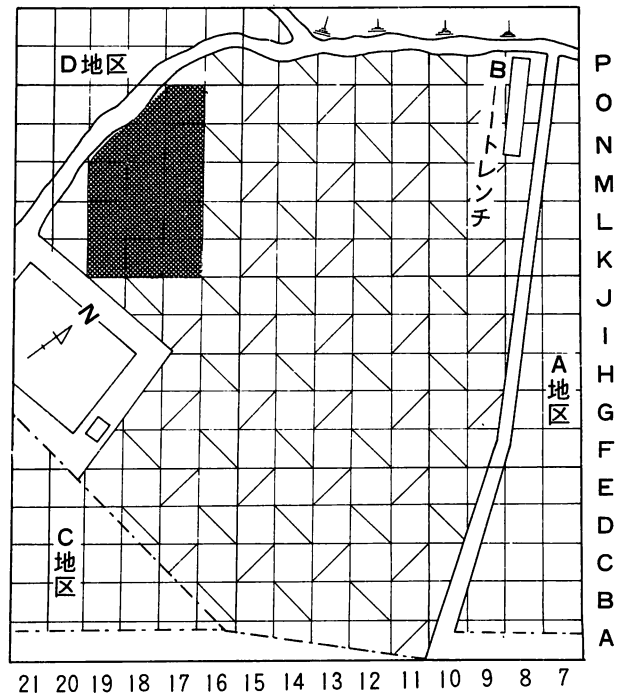
第Ⅱ層はK～O－17～20グリッドを調査することができ、石器は細石刃、錐器、掻器各1点や石核2点などが出土している。土器は押型文片1点である。遺物の水平、垂直分布状態については第12図に示すとおりである。K～O－18グリッドに少しまとまった状態での分布が見られるが、時代に違いのある遺物の出土があるように、原位置、原層位を保っている遺物は少ない。

第Ⅲ層はナイフ形石器1点、石核2点、掻器2点、使用痕のある剥片2点などが出土している。遺物はM～O－17～19付近にかなり集中する傾向が見られ、2点の石核の周囲に剥片が散らばる状態を示唆している。加えてO－18グリッドにナイフ形石器、M－18グリッドに使用痕のある剥片、L－18グリッドに掻器の出土があり、石器の種類も多い。

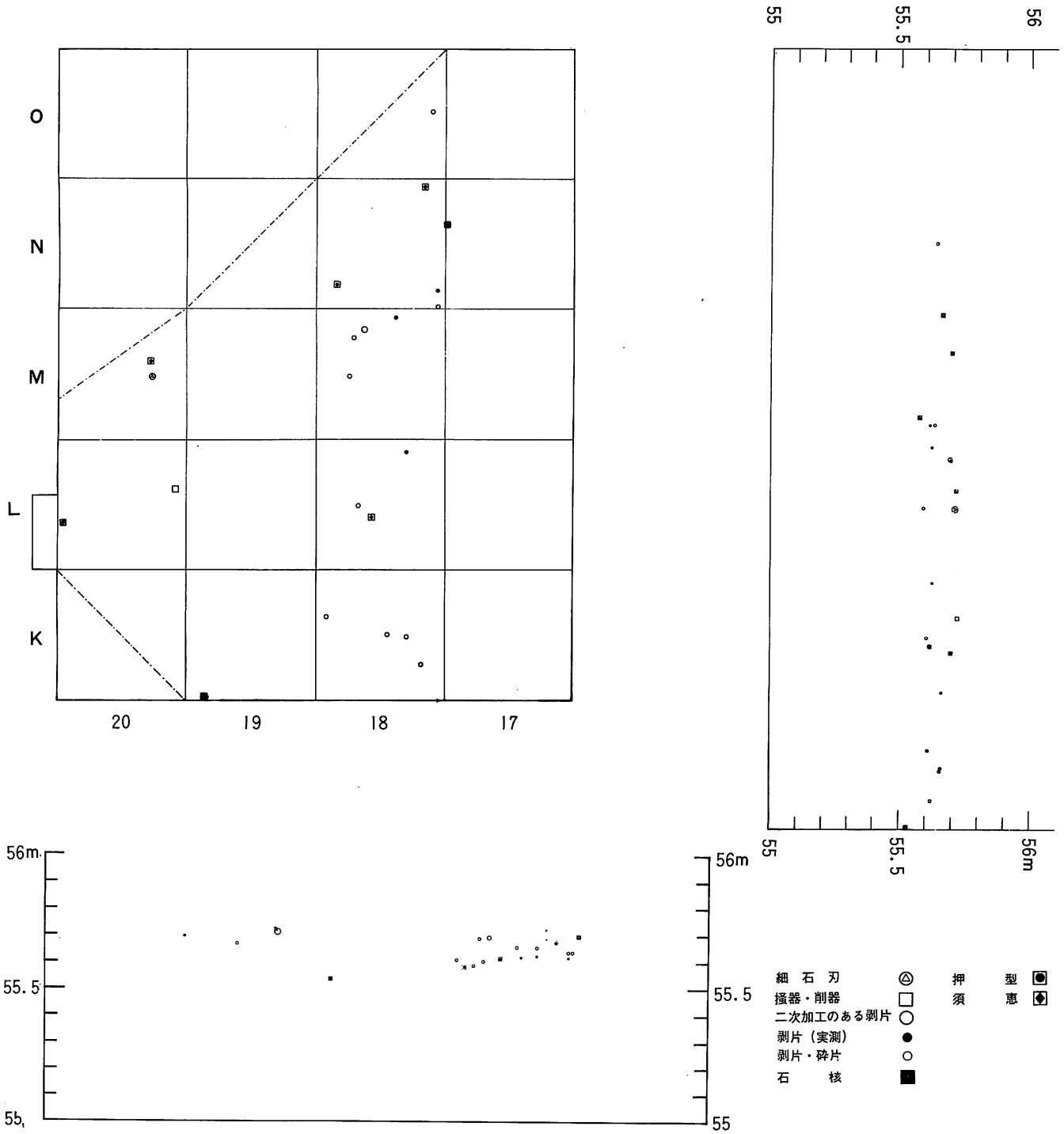
東西の垂直分布はほぼフラットな状態を示すが南北では南側に向っての傾斜が見られる。

第Ⅳ層はK－17・18、L－18グリッドを除く各グリッドに遺物が見られる。第Ⅳa層まで押型文土器片の出土があるが、いずれも細片である。石器は石核1点、掻器3点、使用痕のある剥片6点と剥片である。全体を一つの遺物の集中する地点として捉えるべきであろう。第Ⅲ層と同じく石器の機種は多い。

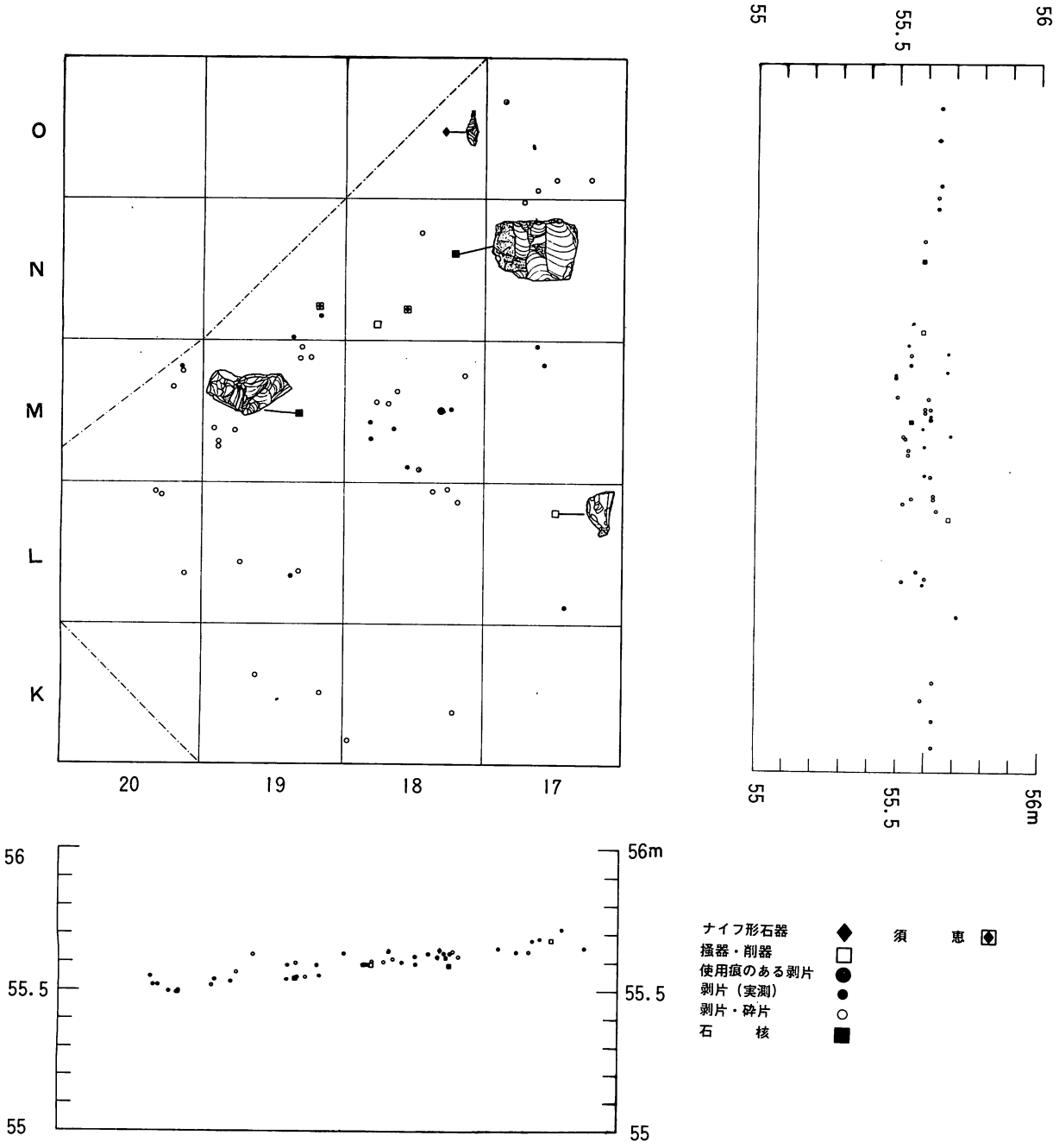
なおA～P－8～16グリッドおよびA～J－17～19グリッドについても、1グリッドごとに掘り込みを行ったが、遺物の出土はほとんどみられなかった。削平によって、Ⅰ～Ⅲ層とⅣ層の上面を失していたためで、以降の掘り下げは行わなかった。



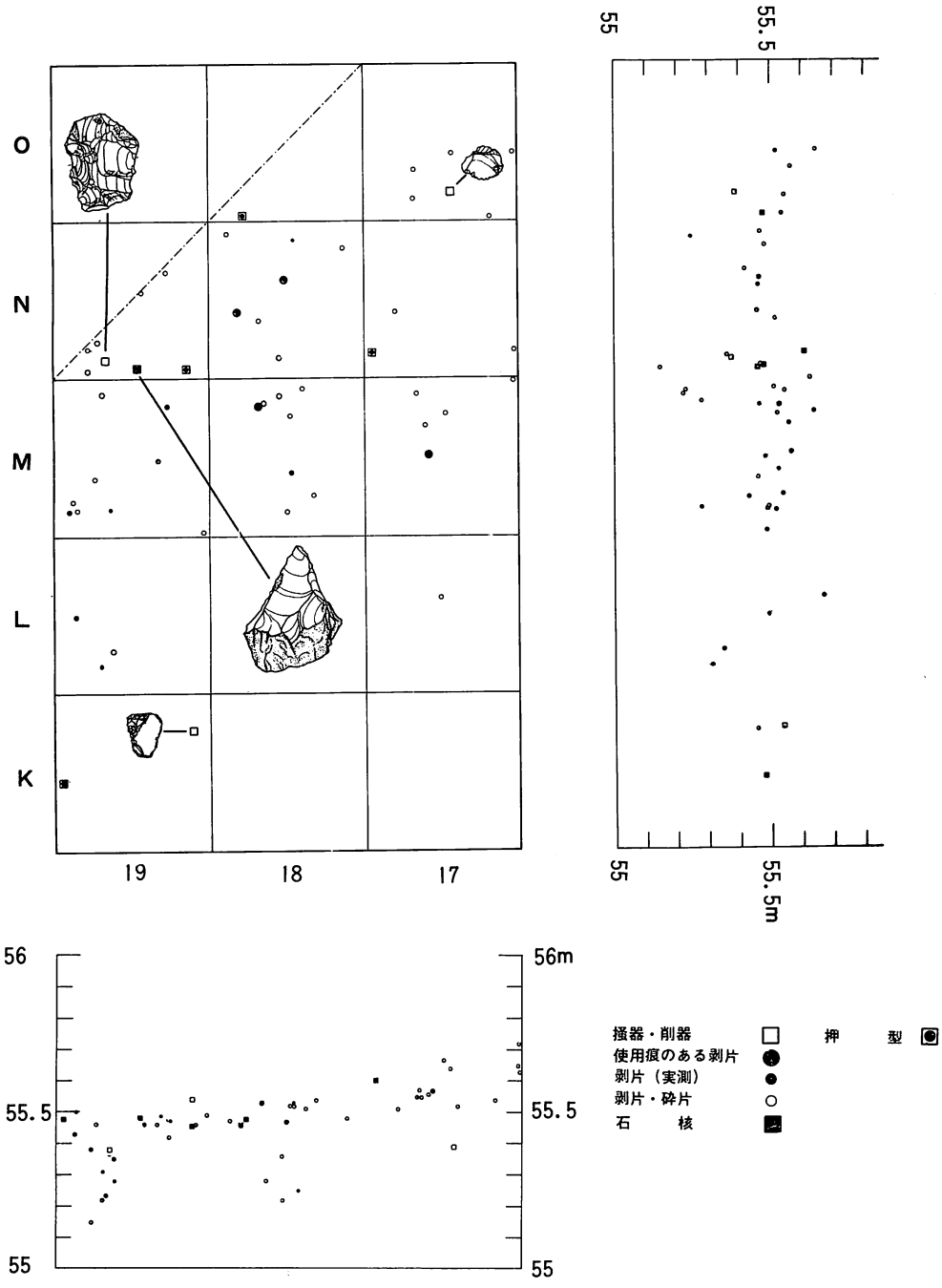
第11図　B地区調査実施状況図



第12図　B地区第Ⅱ層遺物水平・垂直分布図



第13図　B地区第Ⅲ層遺物水平・垂直分布図



第14図　B地区第Ⅳ層遺物水平・垂直分布図

3　C地区の出土状況

表土層から掻器7点、石鏃4点、尖頭器2点、二次加工のある剥片4点が出土した。

第II層の出土状況は第16図に示すとおりである。各種の石器や土器片が入り混じり複雑な遺物の出土状態を示している。B～E－17～25グリッドに遺物が少ないのは、この部分が整地の際に削平を受けているからにほかならない。

注目されるのは南北の垂直分布に見られるフラットな面である。各時期の遺物が出土していることから時期を限定して言及はできないが、4カ所に分かれるフラットな面が確認できる。すなわち、23～25－平坦、26－斜面、27～29－平坦、29－斜面、29～30－平坦、31－斜面、31～33－平坦といった状態にある。東西の垂直分布についてもほぼ同じ状態を示している。機種ではB地区に出土していない尖頭器の出土があり、石鏃の数が増している。

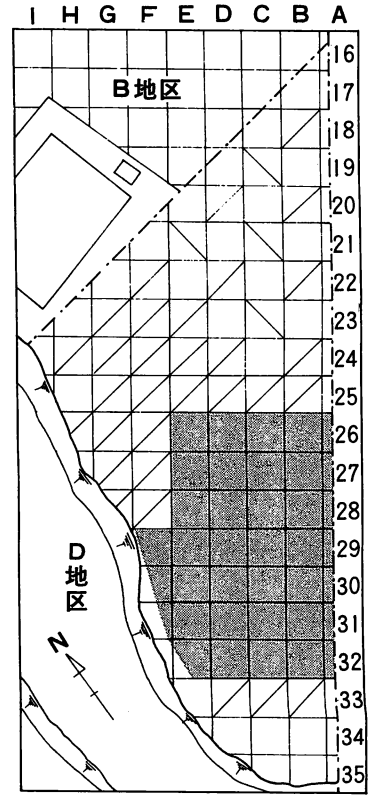
第III層は土器片の出土数が減り、攪乱や落ち込みが少なくなって来ている。石器は全体に散らばった状態であるが、南側に幾分多いといえよう。北側に石核があり、南側には石鏃、尖頭器が多い。第II層で見られた4カ所の平坦地傾向は中央の2カ所がまとまり、3カ所になっている。

第IV層にも土器片の出土がみられるが、その数は少なく落ち込みと思われる。石器は大型のものが多く出土する傾向にある。IVc層以下には遺物の出土はない。

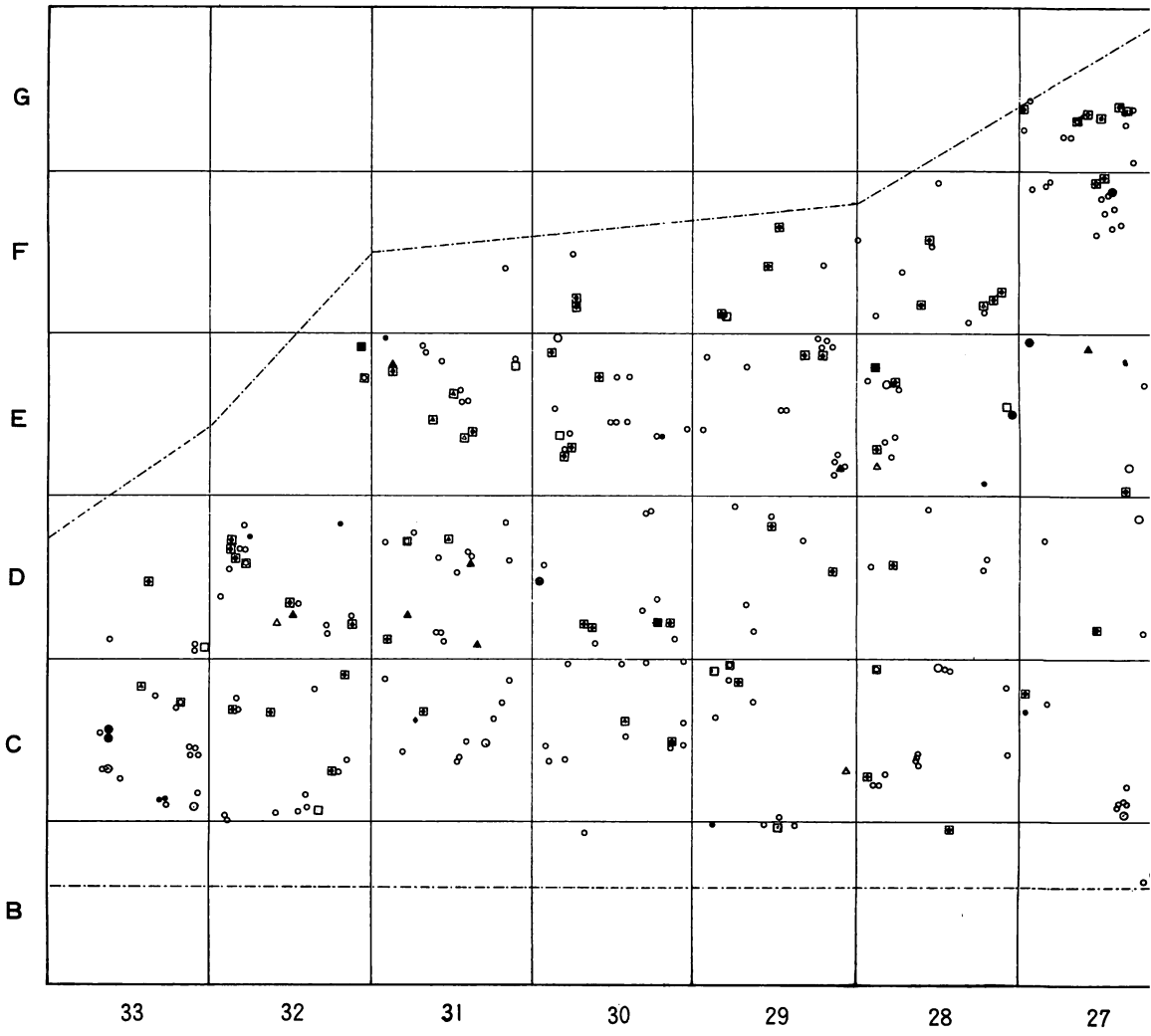
4　D地区の出土状況

D地区にD－1トレンチを設けて遺物は一括して取り上げた。削器2点、使用痕のある剥片2点が出土している。

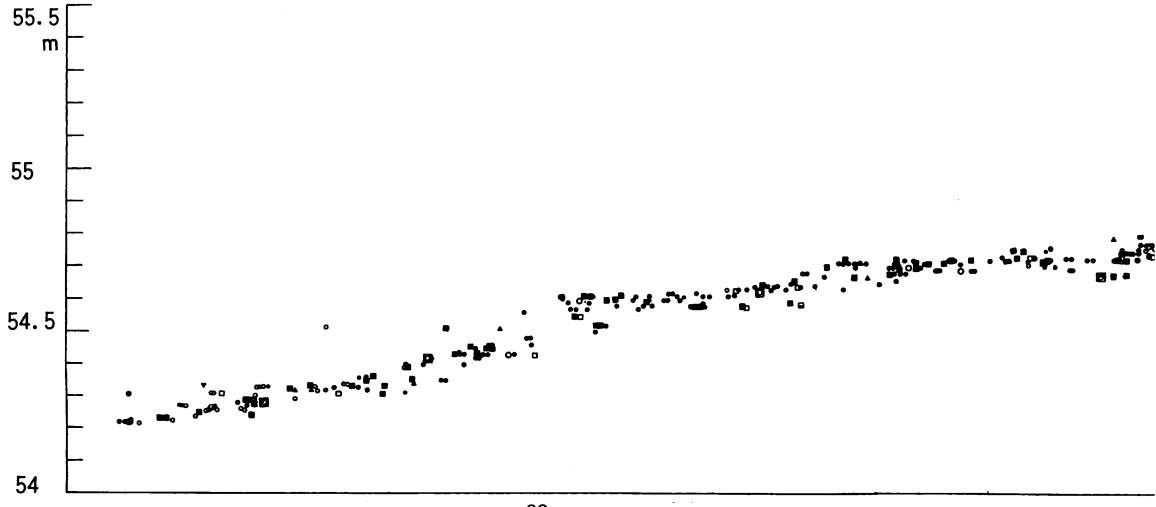
出土した遺物はいずれも層位を明らかにしない。D地区はある時期畑地とされていたもので、削平・攪乱が多く、遺構として捉えることは不可能な状態であり、D地区の調査は、D－1トレンチだけにとどめた。D地区の西側は急斜面となるが、斜面には砂礫層の露頭がみられ、石器の石材となるチャートが多く含まっている。石材はたやすく入手できる状態にある。

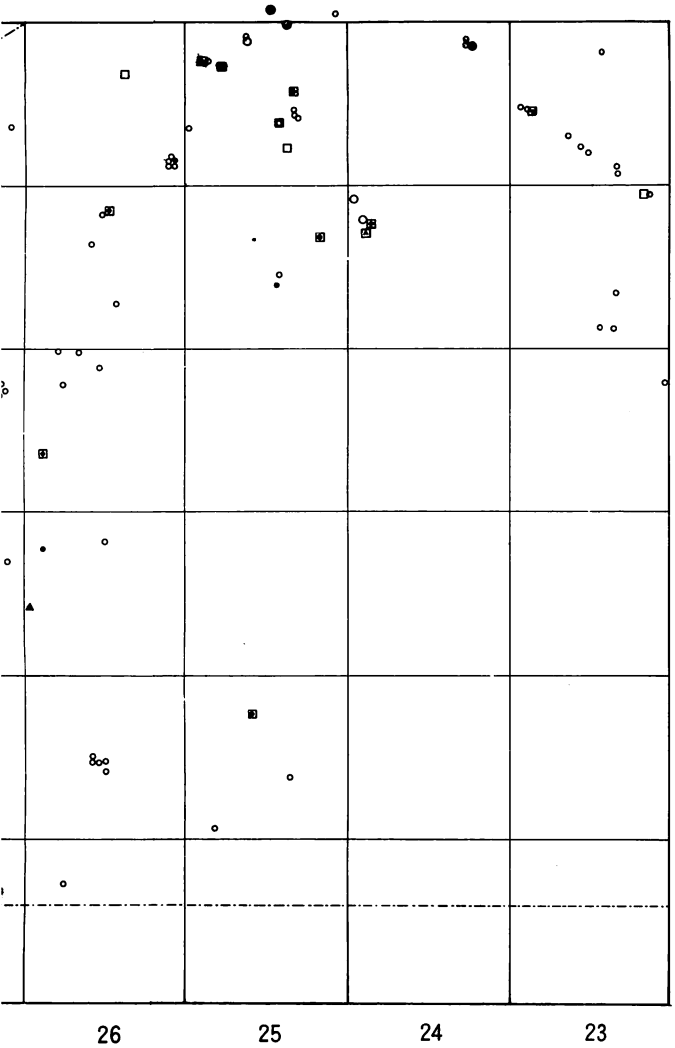


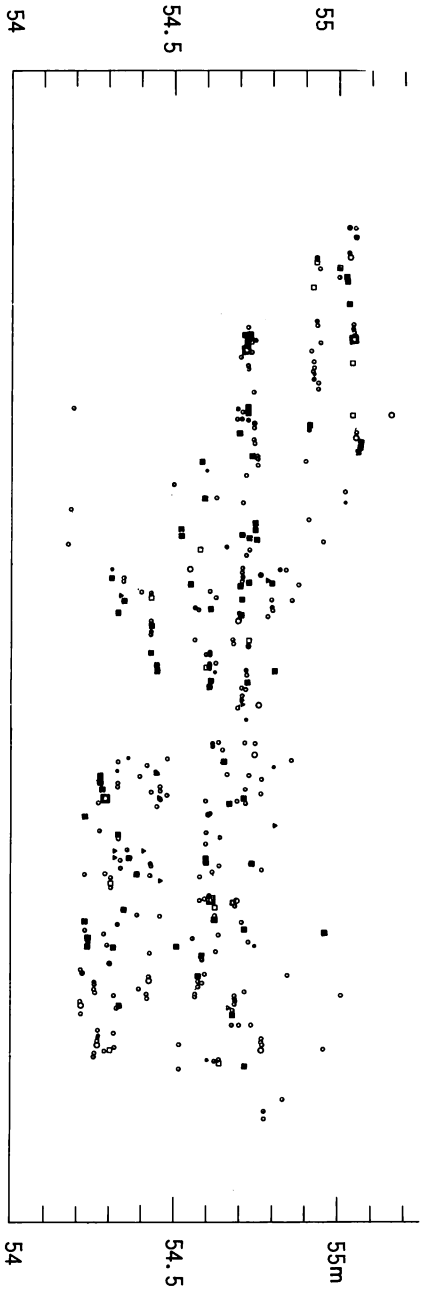
第15図　C地区調査実施状況図

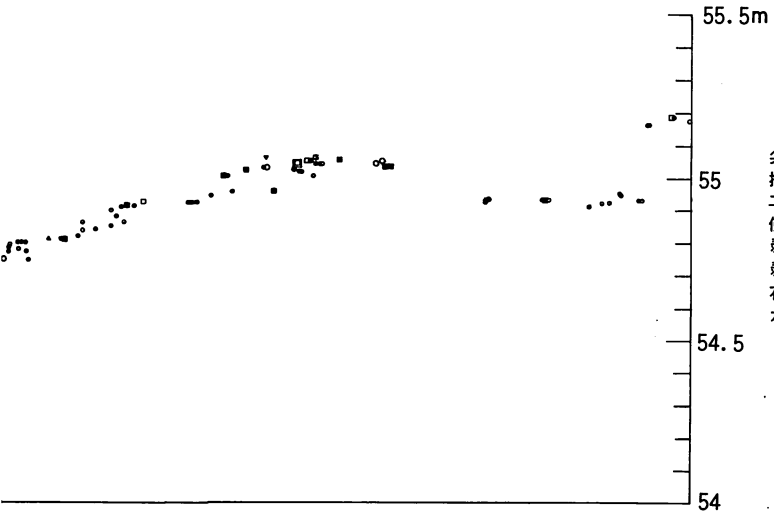


第16図　C地区と第Ⅱ層 遺物水平・垂直分布図



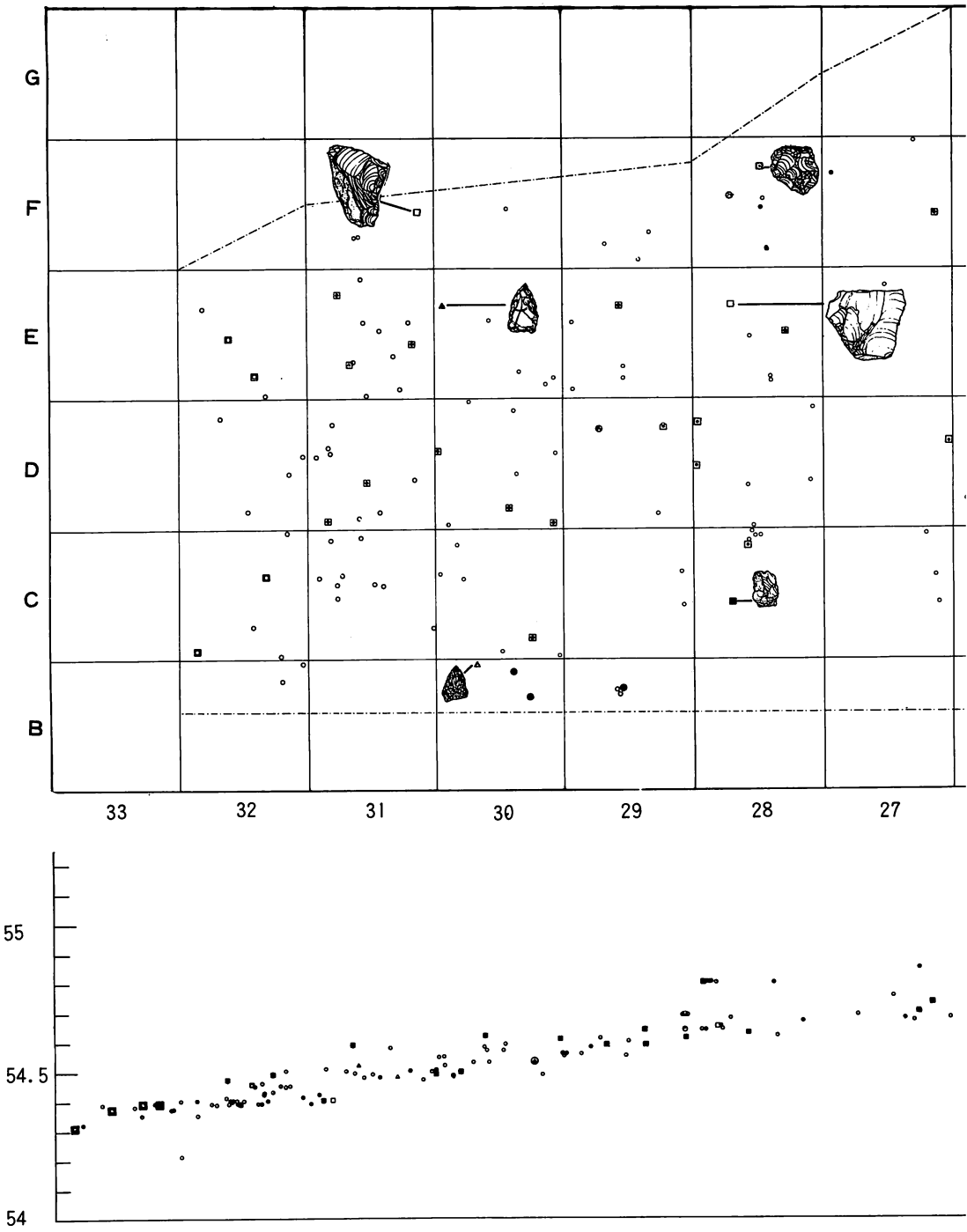






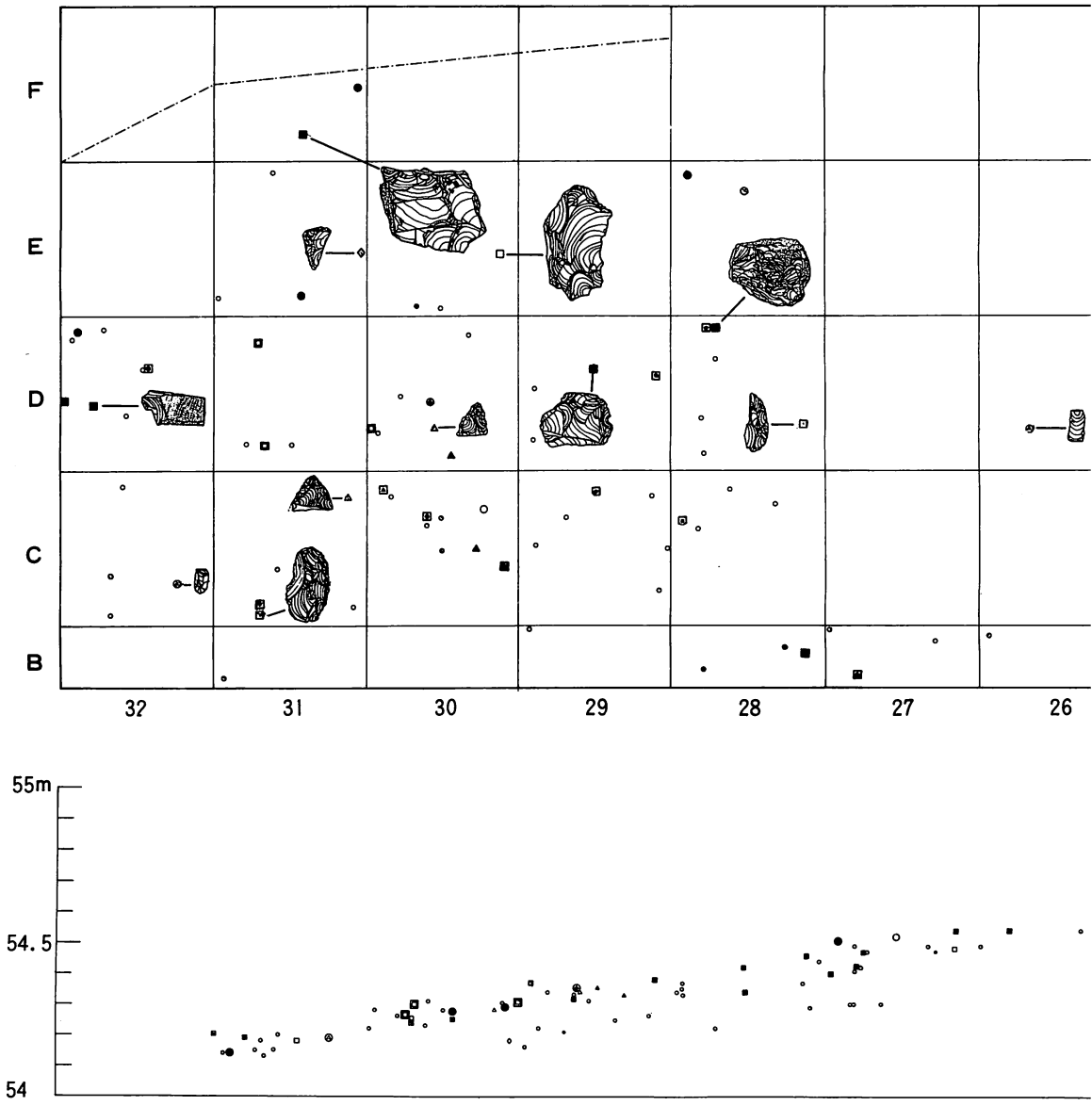
尖頭器 △
掻器・削器 □
二次加工のある剥片 ○
使用痕のある剥片 ●
剥片（実測） ●
剥片・砕片 ○
石鏃 ▲
石核 ■

土師 □
青磁 ▲
押型 ◉
須恵 ◆
磁器 △
瓦質土器 ◯



第17図　C地区第Ⅲ層遺物水平・垂直分布図

54
54.5
55
54
54.5
55m
26
55m
54.5
54
尖頭器
掻器・削器
錐器
二次加工のある剥片
使用痕のある剥片
剥片（実測）
剥片・砕片
石鏃
石核
土師質土器
押型
須恵
磁器



第18図　C地区第Ⅳ層遺物水平・垂直分布図

54
54.5
54
54.5m
55m
54.5
54
細石刃
尖頭器
掻器・削器
錐器
二次加工のある剥片
使用痕のある剥片
剥片（実測）
剥片・砕片
石鏃
石核
土師質土器
土師
押型
須恵
磁器

第Ⅴ章　出土遺物について

1　石器の種類

A～D地区における各地区・各層位ごとに分けた機種別の出土数は表1に示すとおりである。

表採したものや第Ⅰ層から出土したものを含めた石器の機種には、ナイフ形石器、細石核、細石刃、掻器、尖頭器、彫器、錐器、石鏃、石核、剥片がある。この中で剥片については二次加工のある剥片と使用痕のある剥片とに分け、残りを剥片と砕片（長さ10mm以下）とに分けた。

ナイフ形石器や細石核、細石刃の出土は非常に少なく、掻器や使用痕のある剥片が多く出土している。石錐はB、C両地区に出土しているが尖頭器はC地区にだけしか出土していない。

表1　各地区別石器出土数一覧表

地区	層位＼器種	ナイフ形石器	細石核	細石刃	尖頭器	掻器削器	錐器	彫器	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	剥片砕片	石鏃	石核	磨石
A地区	表採													2
	表土層					1								
	Ⅱ													
	Ⅲ													
	計					1								2
B地区	表採					1					3		1	
	表土層		1			9		1	5	3	2	5	4	
	Ⅱ		1	1		2	1		1		2		3	
	Ⅲ					2				2	10		1	
	Ⅳ					3				6	5			
	計		2	1		17	1	1	6	11	22	5	9	
C地区	表土層				1	9			3		1	4		
	Ⅱ				3	9	1		11	8	6	8	3	
	Ⅲ	1			1	4	1			3	3	1	1	
	Ⅳ			2	2	3	1			3	2	3	2	1
	計	1		2	7	25	3		14	14	12	16	6	1
D地区	Ⅰ					1			1	1			1	
総計		1	2	3	7	44	4	1	21	26	34	21	16	3

2　石器の石材

石材はチャート、黒曜石、サヌカイト、黄緑凝灰岩、安山岩などがあり、中でも数が最も多いのはチャートである。調査地周辺をはじめ、氷川流域にその供給源を求めることができ、付近の崖錐面を見ると阿蘇溶結凝灰岩（ASO4）と軽石凝灰岩（ASO4）との間の砂礫層に多く含まれている。調査地のすぐ下の斜面にも層として認めることができる。これらの多量のチャートの中から良質のものを取り出して使用したものと思われる。

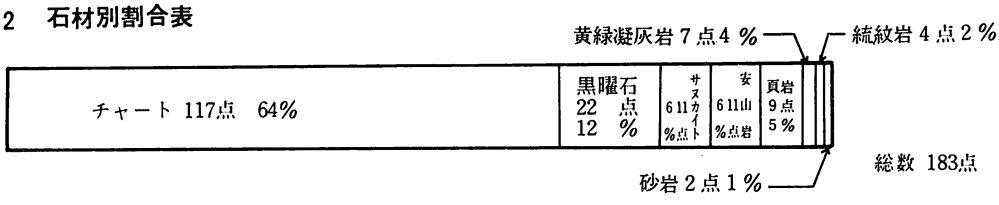
このようにチャートの入手は比較的容易であるが、一つの石であっても質のよい部分と悪い部分とがあるなど、石器の素材として使用される部分はかなり少ない。また、チャート特有の節理が非常に多く見られ、節理面で折れてしまうために大きな剥片（3～4㎝を越える）を取り出すことは仲々困難である。さらに、節理が多く、その部分では不規則な熱伝導が起るため、たとえ大きな剥片ができたとしても、その形状はいびつに変形することが多い。

黒曜石については、これも肉眼での観察にほかならないが、少なくとも二種類は認めることができる。例えばC地区D－26グリッドに出土した石鏃(158)は、黒色を呈する良質のもので県内で出土するものではなく、佐賀県や長崎県地方に供給地を求めるのが正しかろう。C地区E－31グリッド出土の石鏃(156)に使用された黒曜石は、黒色を呈する中に縞模様がはいるもので、これは県内の凝灰岩層に多く含まれるものと見てよい。ただし、この中に含まれる黒曜石は大きなものがほとんどなく、石器の中でもこの石鏃のように小型のものに使用されたものであろう。

サヌカイトは勿論、県内に出土地を求めることはできない。質の良い黒曜石とともに、西北九州地域にその供給地を求めるべきであろう。

黄緑凝灰岩、安山岩は数的に非常に少ない。黄緑凝灰岩は表面の風化の進み具合が早く、表面の状態は従来報告された頁岩に類似している。供給地については今のところ定かにできていない。

表2　石材別割合表



3　ナイフ形石器（001）

ナイフ形石器の出土はただ1点であった。B地区の第Ⅲ層からの出土である。石質はチャートで、素材は縦長の非常に薄いものを使用している。打面側を先端部とし、背および基部に、細かなブランティングを施している。基部のブランティングは刃の側に少しみられ、背の側にはない。長さ22㎜、幅9㎜でナイフ形石器の中では最も小型の部類に属する。

4　細　石　核（002・003）

細石核として2点を認定した。2点はB地区の表土層と第II層から出土したものである。いずれも石材はチャートである。(002) は自然平坦面を打面として表皮細石刃剥離を行っている。(003) も自然平坦面を打面とし、側面調整をしたあと剥離を施している。

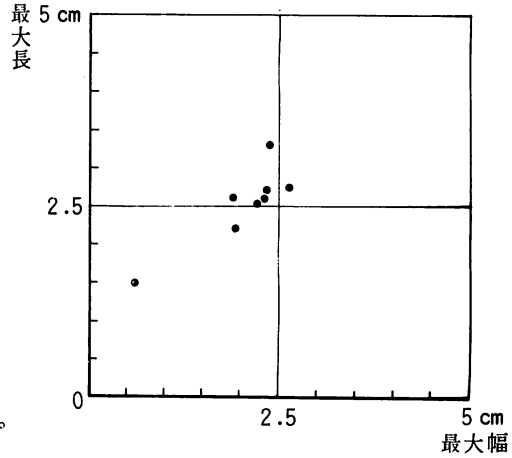
5　細　石　刃（004～006）

3点の細石刃が出土している。B地区第II層から1点、C地区第IVa層から2点である。石材は黒曜石、サヌカイト、安山岩の三種である。(004)と(006)は先端を失しているが、(005) は完形である。断面は(004) (006)が三角形で(005)は台形を呈している。三点とも使用痕が認められる。

6　尖　頭　器（007～013）

尖頭器として7点をとり上げた。いずれもC地区から出土したもので、第I層から第IVa層まで出土している。石材はすべてチャートである。

A類(008)　縦長剥片を素材としている。横断面が三角形を呈し、両側縁および基部に調整剥離を加え、先端を尖している。剥片尖頭器といえよう。



第19図　尖頭器の最大長さと幅

B類(009・010)　縦長もしくは横長の剥片の両面全面に剥離を加えて、先端を尖らせている。形状は三角形を呈し、胴部がややふくらみ基部はうすくなっている。

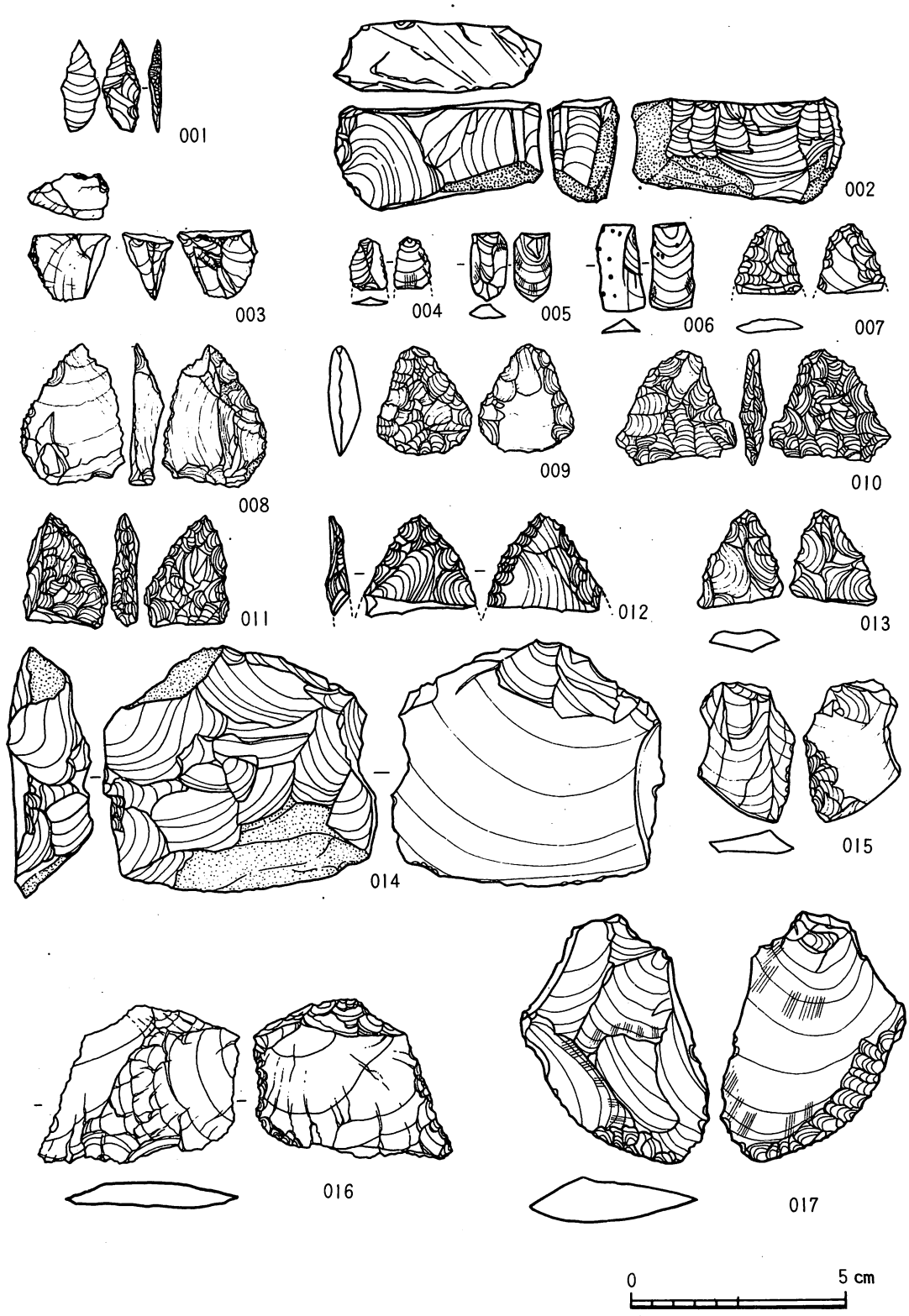
C類(007・011～013)　いずれも先端部だけで胴部以下を欠失している。主に縦長の剥片を素材として両側縁や両面に加工を加え、先端を尖らしている。木の葉状の形状を呈するものと思われる。

このほか、石鏃としてとりあげた(153・163)にも尖頭器としての可能性がもたれ、C類に近い。

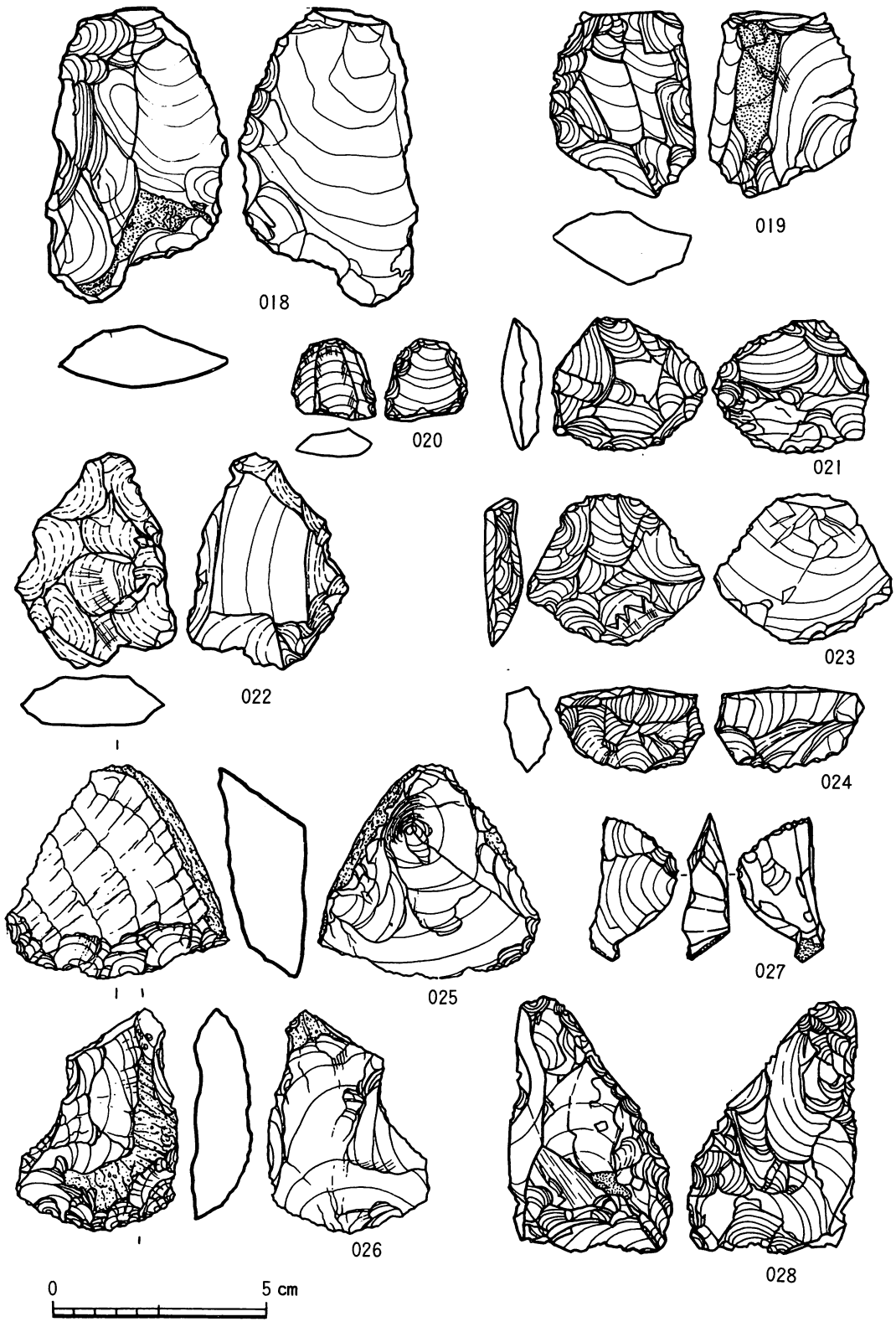
7　掻器・削器（014～057）

剥片の一縁辺もしくは縁辺に二次加工を施して刃部を形成している石器については、掻器・削器として一括した。今回の石器の中では最も出土数が多く、A地区1点、B地区18点、C地区31点、合計50点を数える。縦長や横長の剥片や不定形の剥片を素材として、二次加工を加えたもので、大きく分ければ、サイド、エンド、ラウンドスクレーパーの三種類である。

A地区(014)　A地区では表土層から1点だけの出土である。石材は頁岩で横長の剥片の左側



第20図　ナイフ形石器、細石核、細石刃、尖頭器、掻器・削器実測図



第21図　掻器・削器実測図

辺に刃部加工を施しており、サイドスクレーパーに分類できよう。なお主要剥離面にはバルブスカーが見られる。

B地区(016～031)　表採および表土層から10点、II層2点、III層2点、IV層3点である。

A類(015～019・024～031)　いずれも縦長、横長それに不定形の剥片の両側辺や側辺の一部に二次加工を施し刃部を形成しているものである。(017)には綿密なプレッシャーフレーキングが見られ、原礫面を残さない。(018・019)は厚手の素材の両サイドにかなり綿密な二次加工を施し刃部を形成している。(025・026)の素材も厚く、両側辺に刃部を形成している。(028)は残核の縁辺に刃部を形成したものである。(029)にも同じく残核の再利用の可能性がある。

B類(020～023)　(023)の素材は不定形の剥片であるが、B面を主として、ほぼ一周する二次加工がある。(021・023)も二次加工がほぼ一周している。(023)の形状は三角形で円にはほど遠いが二次加工はほぼ一周しておりB類に含めた。

C地区　表土層から9点、II層9点、III層4点、IV層3点の合計25点が出土している。

A類(032・035～040・042・044・045・050・051・054・056)…(サイドスクレーパー)

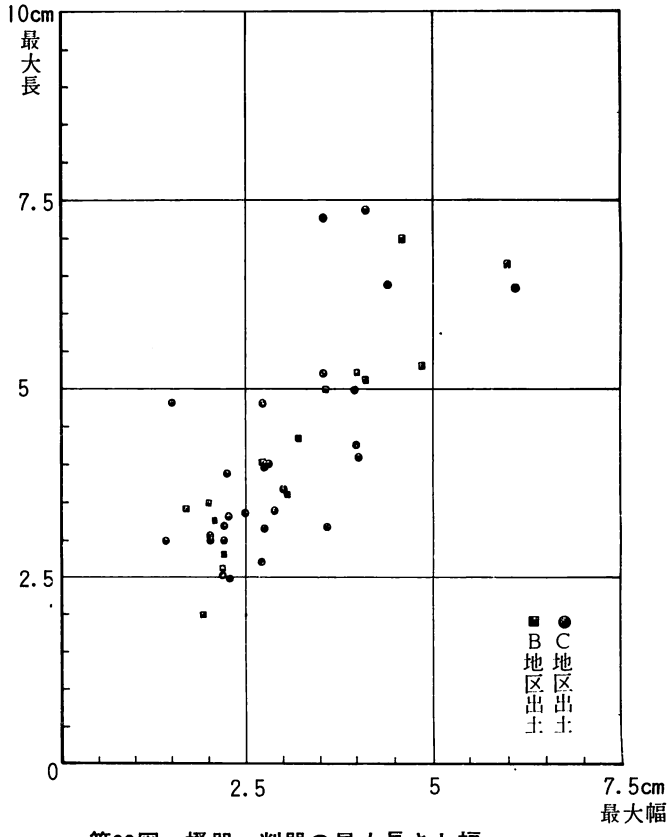
(032)は分厚い素材で横断面は三角形を呈する。縁辺はすべて刃部となったものであろう。

(037)は側辺に丹念な刃部加工を施し、打面側に加工があればラウンドスクレーパーである。(050)は大型で厚手の素材で三角形を呈する。側辺に刃部加工がある。(051)は厚礫面が多く残るが側辺に刃部加工がある。(054)は片方の側辺が刃部である。(056)は大型の縦長剥片で片方の側辺にA面からの刃部加工がある。

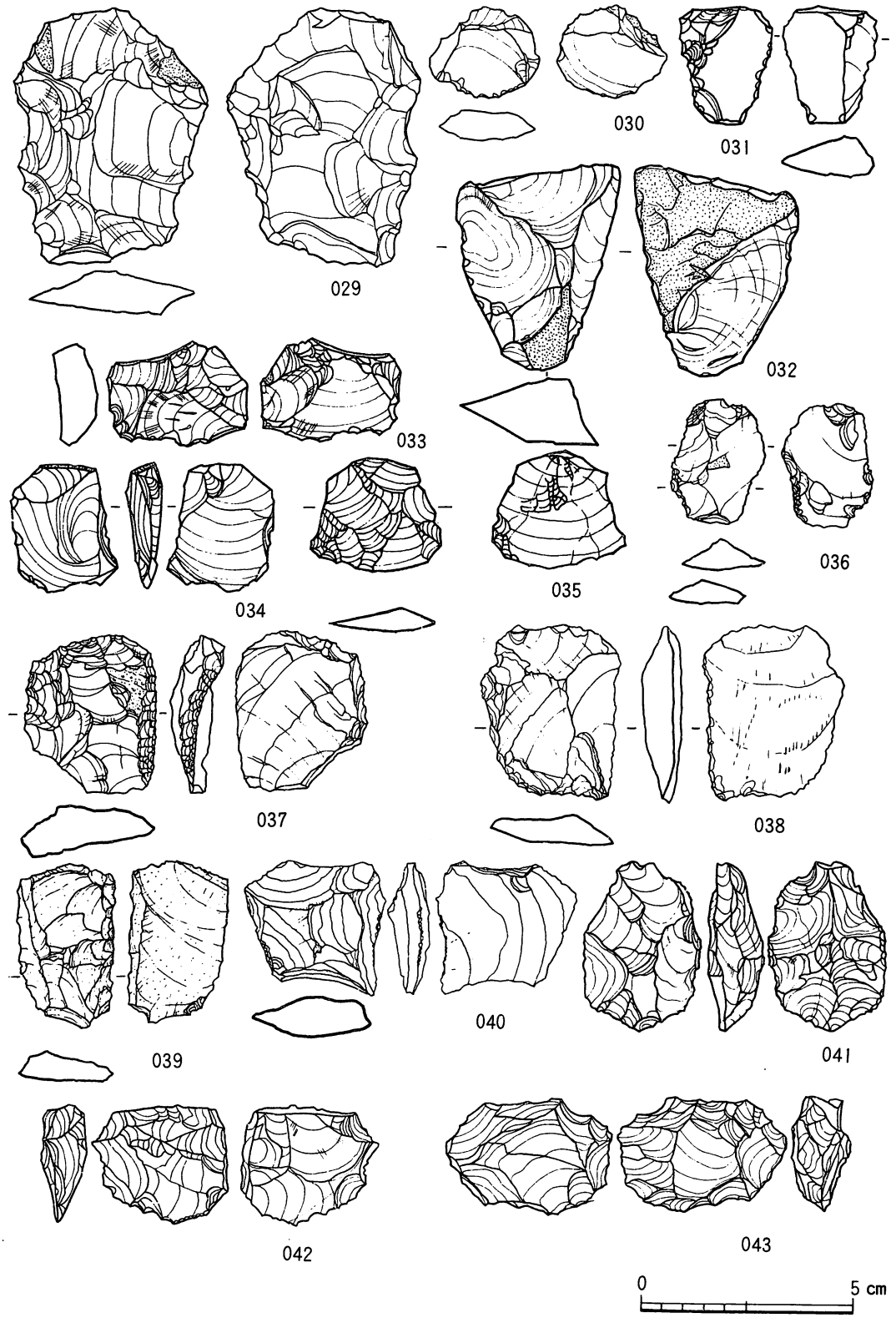
B類(033・034・042・045・053)

…(エンドスクレーパー)

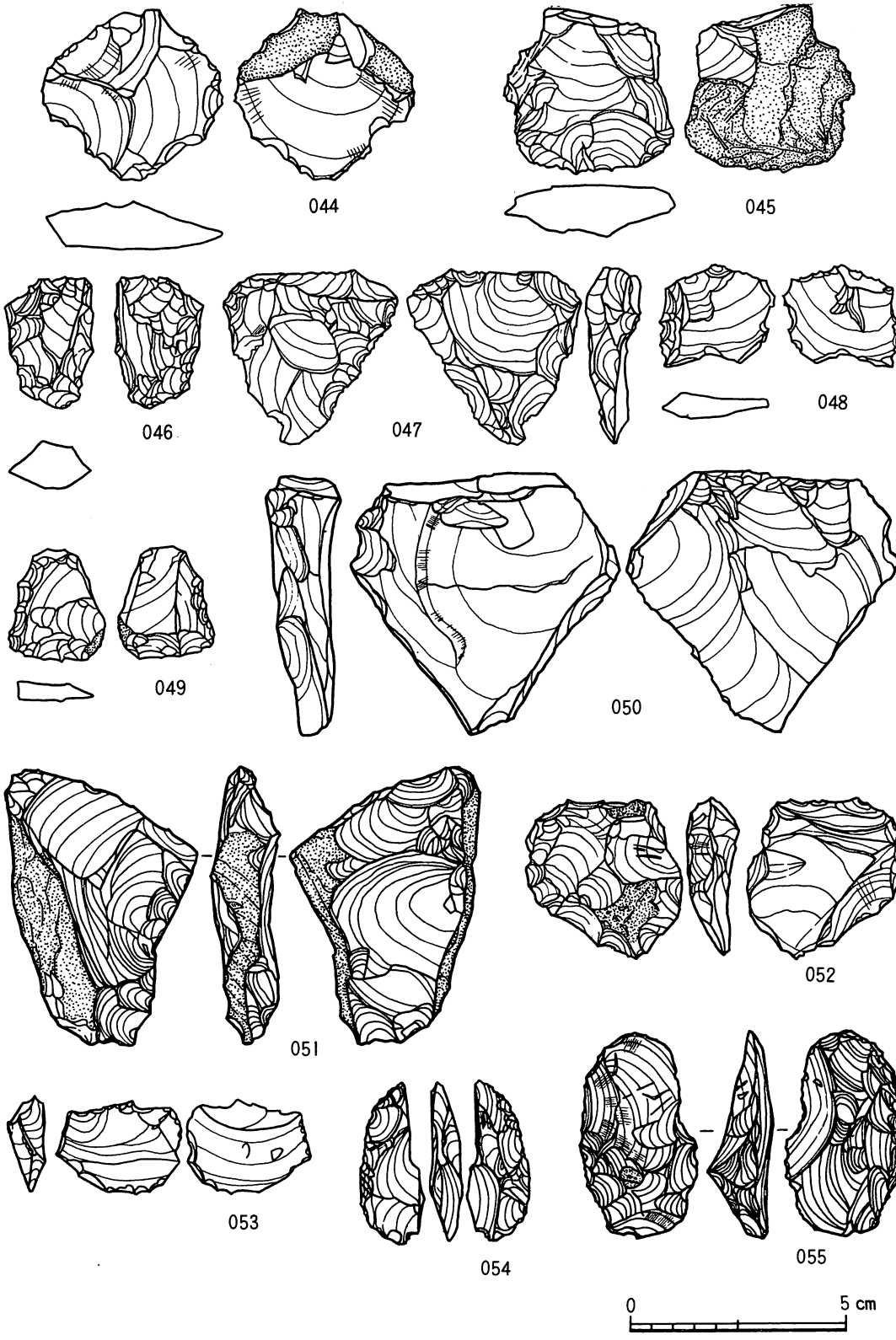
(033・034・042)ともに下縁を刃部としている。(045)は厚礫面が多く残るが下縁を刃部としてい



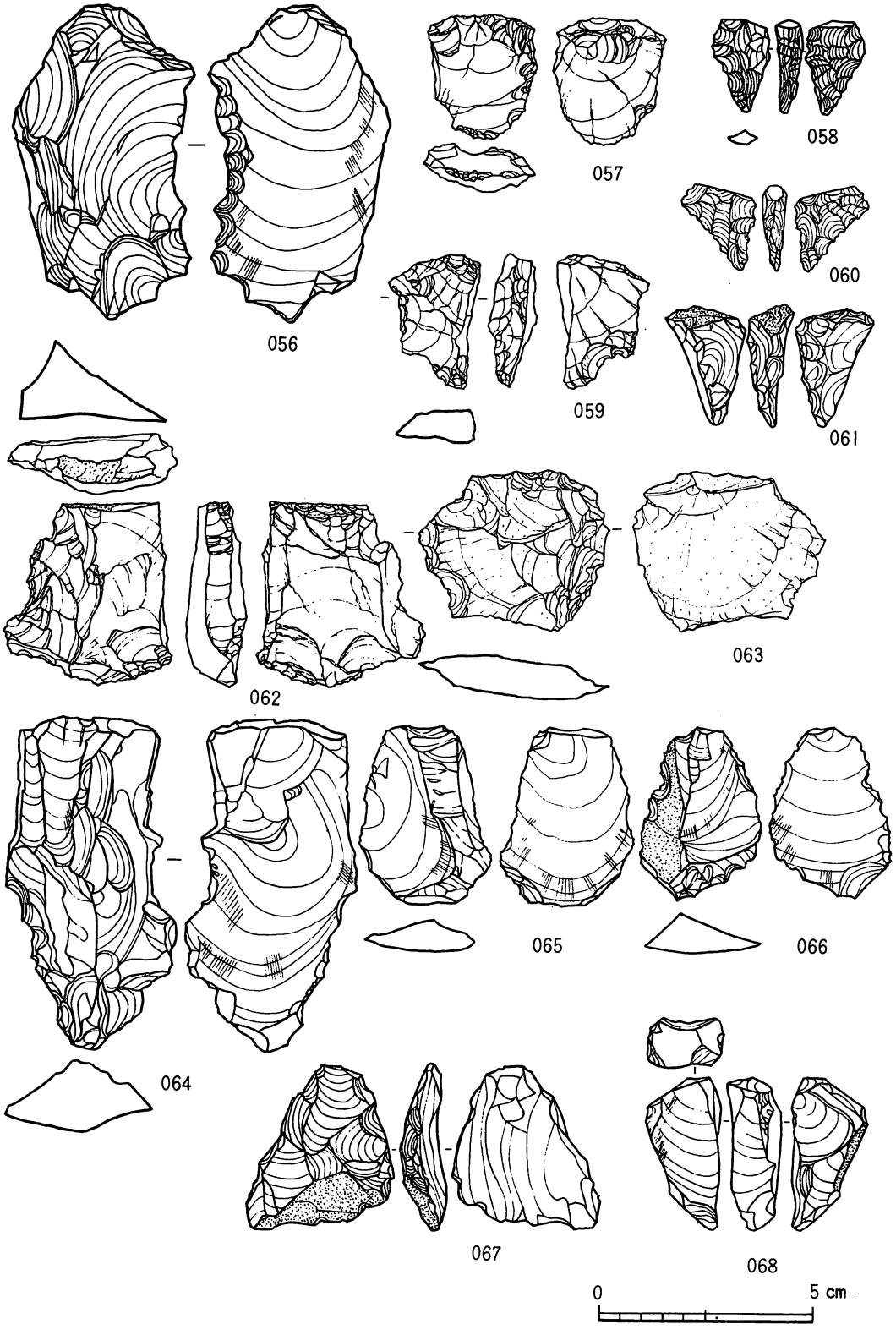
第22図　掻器・削器の最大長さと幅



第23図　掻器・削器実測図



第24図　掻器・削器実測図



第25図　掻器・削器、錐器、彫器、二次加工のある剝片実測図

る。(053) は横長の剥片で、下縁と打面側にも刃部を形成している。

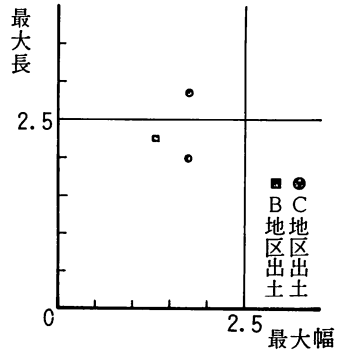
C類 (041・043・046～049・052・053・055)…(ラウンドスクレーパー)

(041・043) は分厚い不定形剥片を素材として、全面に二次加工を施している。(046) も類似する。(047) は三角形の形状にある。(055) の素材は横断面が三角形を呈する横長剥片で、両面に刃部加工を施している。

D地区　D地区からは一点だけ表土層から出土している。縦長の剥片を素材として片方の側辺と下辺に刃部加工を施している。

8　錐　　器 (058～061)

B地区II層から1点とC地区のII、III、IV層から各1点出土している。石材は全てチャートで小型の石錐である。(058・060・061)は三角形の形状を呈し、ほぼ全面に亘る二次加工を施し錐部を形成している。(059) は不定形の剥片を素材としている。粗い剥離で全体を整形したあとノッチ状の二次加工で先端を尖らし、さらに細かな剥離を加えて錐部を形成している。



第26図　石錐の最大長さと幅

9　彫　　器 (062)

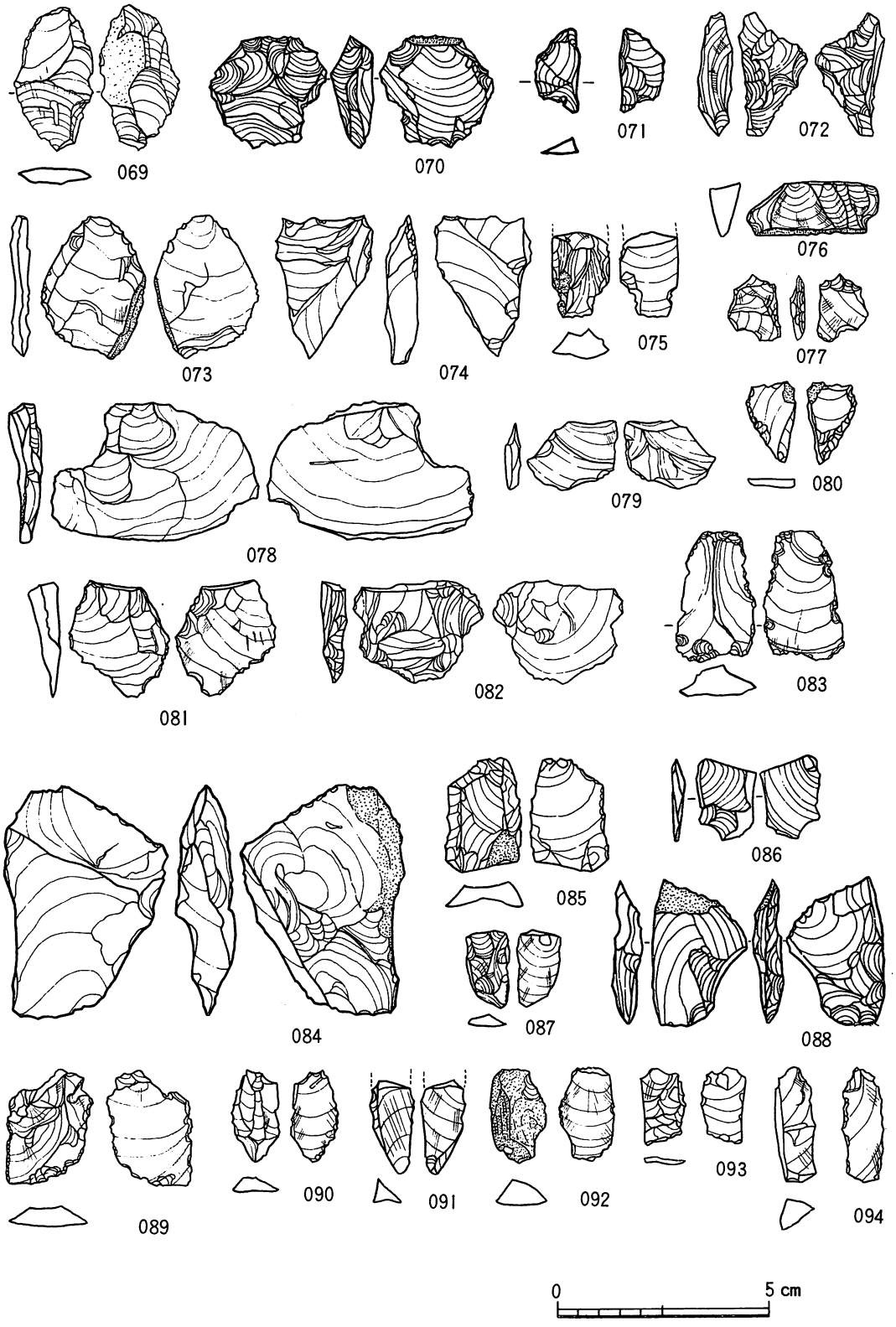
彫器として (062) を取り上げた。B地区の表土層から出土したものである。石材はチャートで不定形の剥片を素材としている。平坦打面を彫刻刀面作出の打面としており、最初に加えた打撃でほぼ先端近くまで彫刻刀面を形成し、さらに数度の細かな剥離を加えて彫刻刀面を作出している。他の側辺にも二次加工があり、スクレーパーとして使用された可能性もある。

10　二次加工のある剥片 (063～083)

二次加工のある剥片として21点をとり上げた。B地区6点、C地区14点、D地区1点である。

B地区 (063～068)

B地区の6点は表土層から5点、II層から1点で石材には安山岩・チャート・黄緑凝灰岩がある。素材は縦長の剥片が多く4点で、残りの2点が横長の剥片である。自然の平坦面を打面としたものと、打面調整が行われたものとがある。(064) は最も大型の縦長剥片を素材として、側辺の一部に二次加工をしている。鋭い側辺は刃器として使用されたものであろう。(063・066・067・068)はいずれも原礫面が残っている。主に側辺に二次加工があり、掻器として使用された



第27図　二次加工のある剥片、使用痕のある剥片実測図

ものであろう。(068) は彫器の刃部状の剥離がある。

C地区

C地区の14点は表土層から3点、II層から11点が出土しており、石材は2点の黒曜石を除き他はすべてチャートである。素材は不定形の剥片がほとんどで11点、このほか縦長剥片2点、横長剥片1点である。

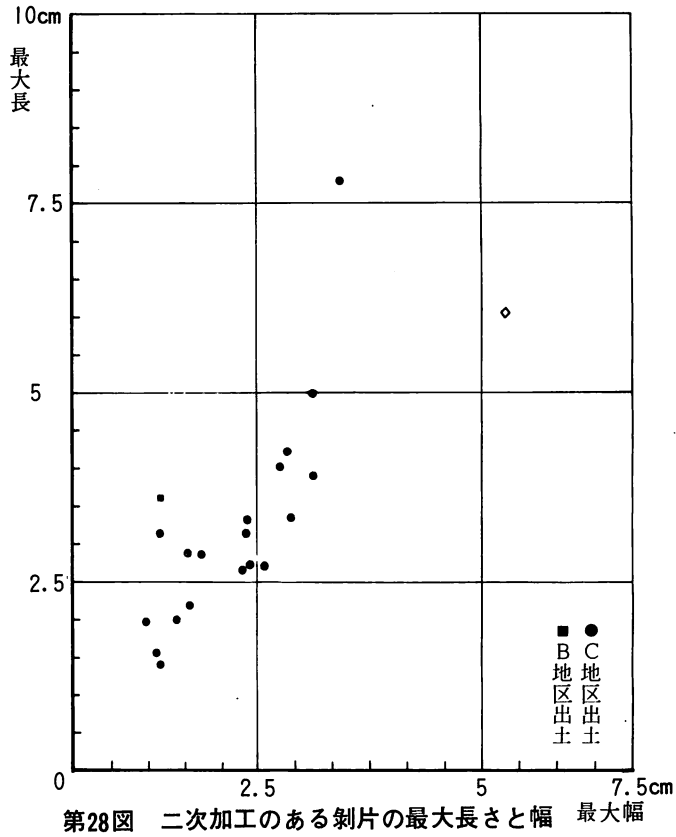
(069) は縦長の剥片を素材とし、主要剥離面の先端部方向から再剥離を行って鋭い縁辺を作り出して刃部としている。

(078) は横長の剥片を素材とし、鋭い側辺を刃部としたもので、バルブカットが行われている。

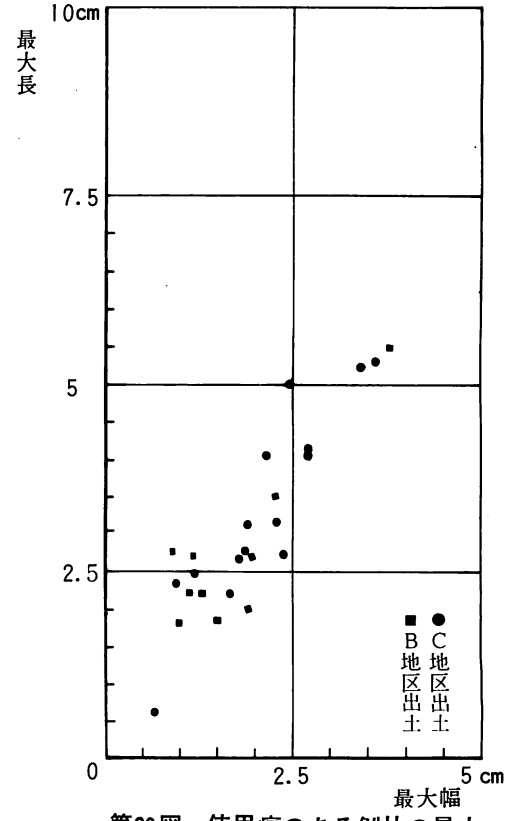
不定形の剥片を素材としたものの中で (071) は小型のナイフ形石器に類似する。(072・074) も形状は切出型のナイフ形石器に類似するが、双方とも素材が分厚く、二次加工が不充分である。

D地区

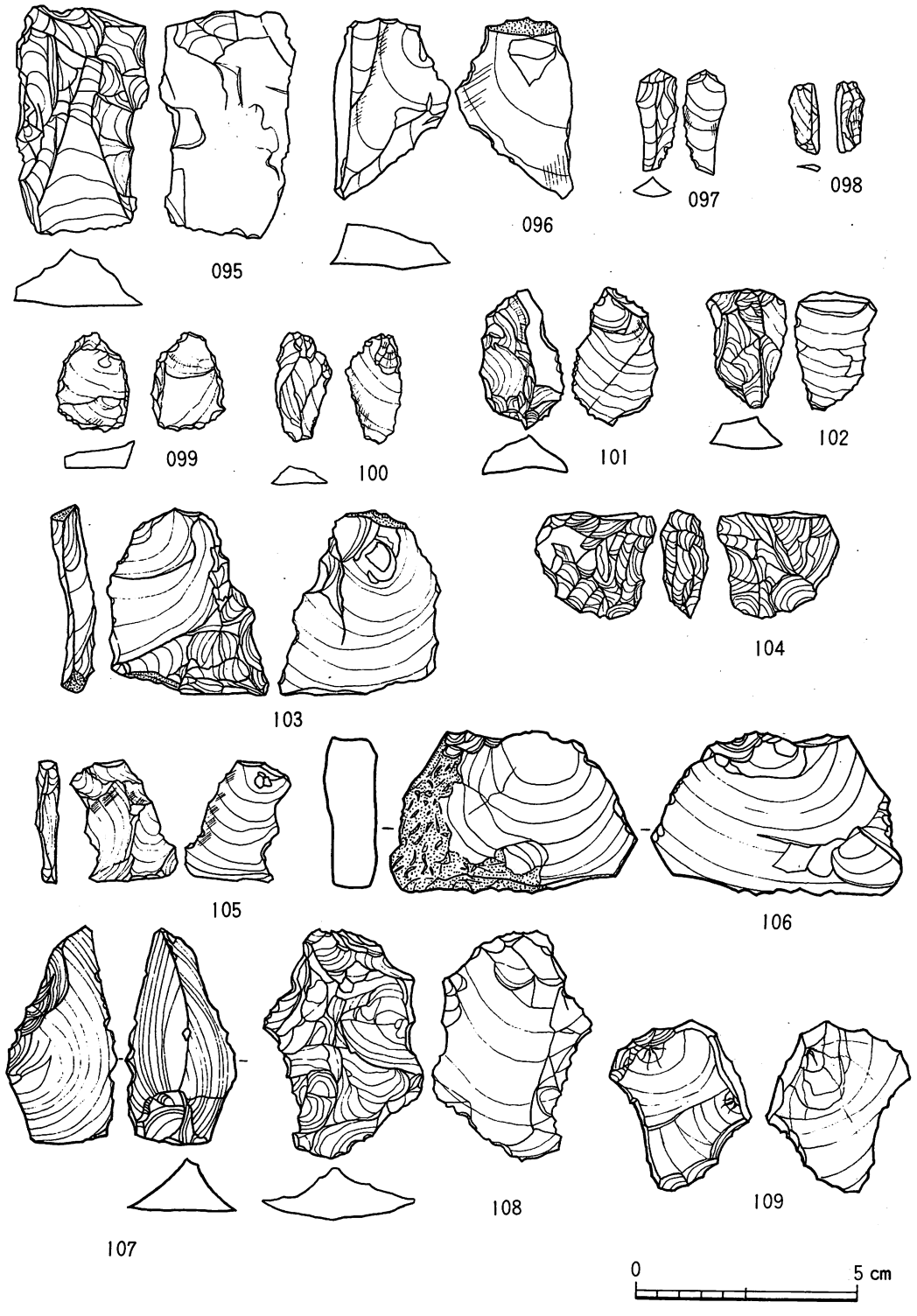
D地区は表土層から1点だけ出土している。(083) 石材はチャートで横断面が三角形を呈する縦長剥片を素材としている。鋭い両側辺を刃部としており、刃器状剥片と呼べよう。



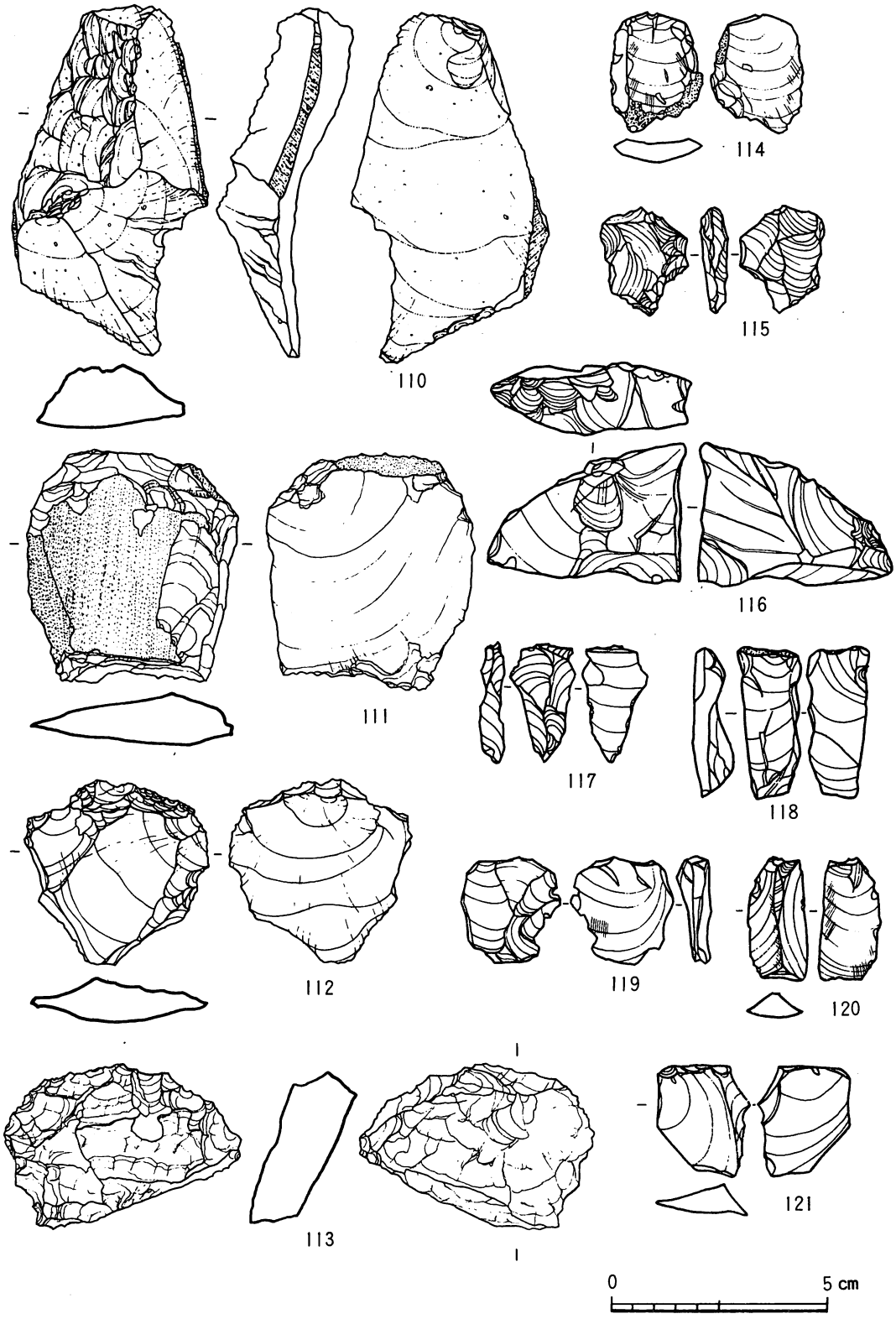
第28図　二次加工のある剥片の最大長さと幅



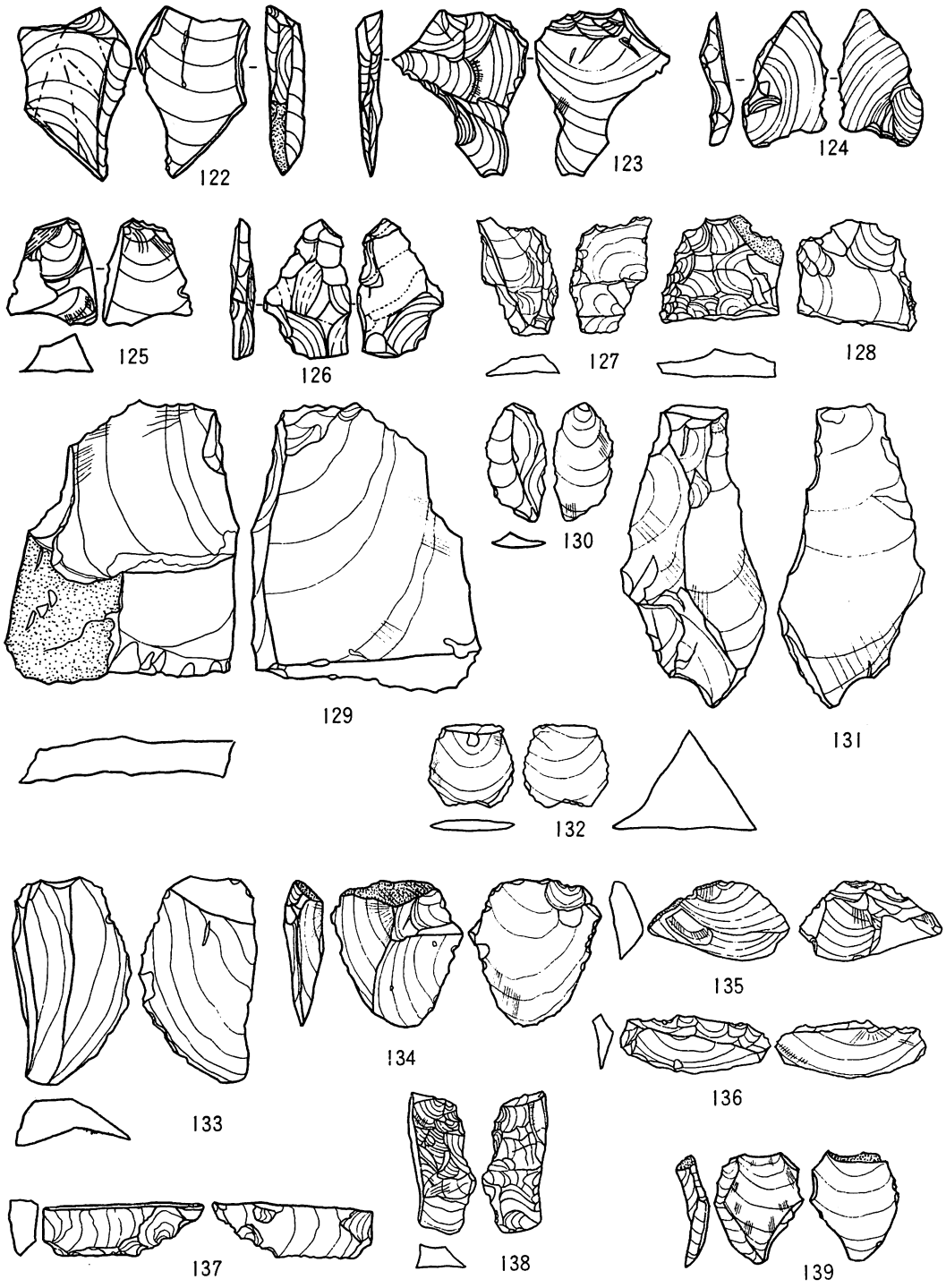
第29図　使用痕のある剥片の最大長さと幅



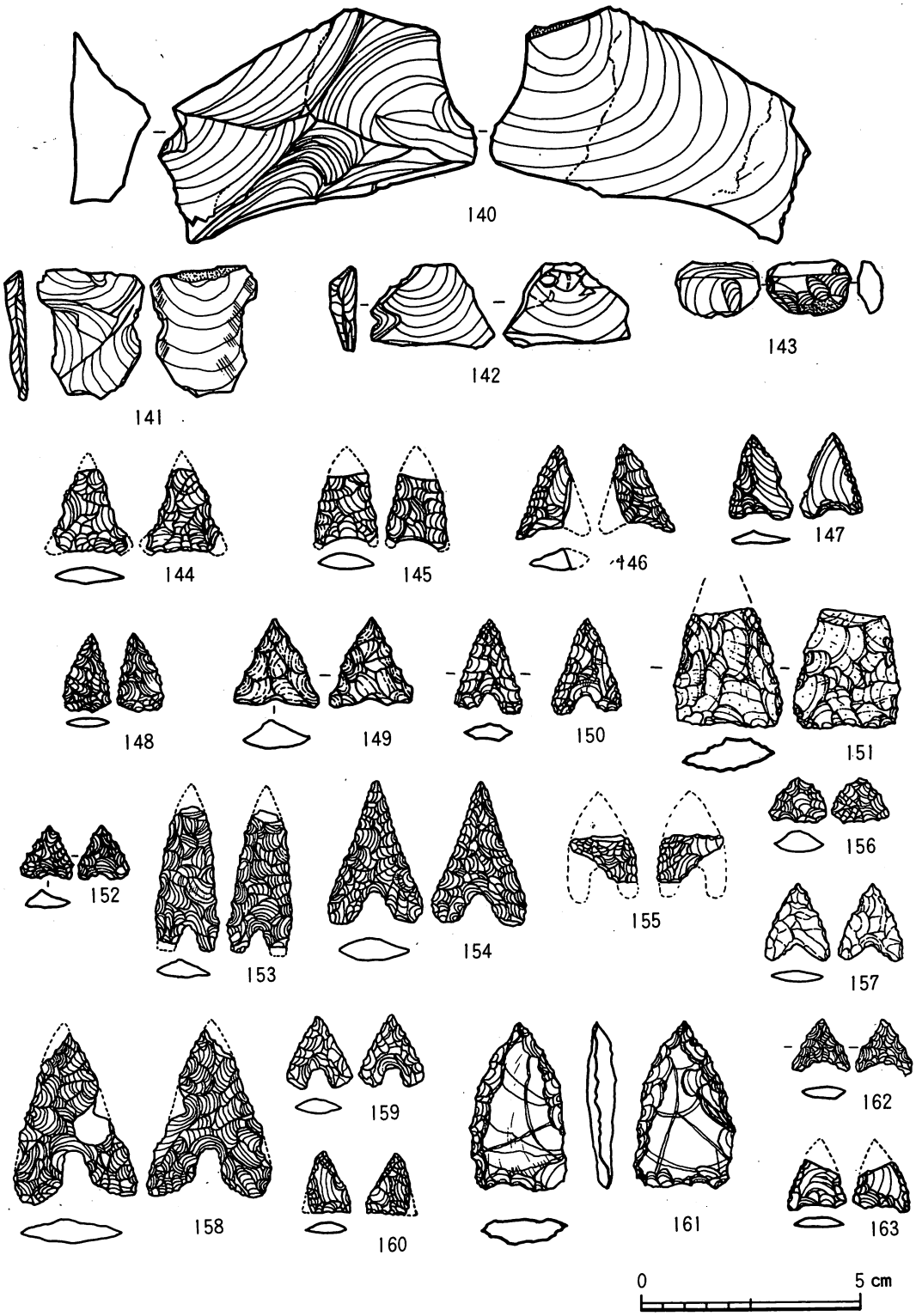
第30図　使用痕のある剥片、剥片・砕片実測図



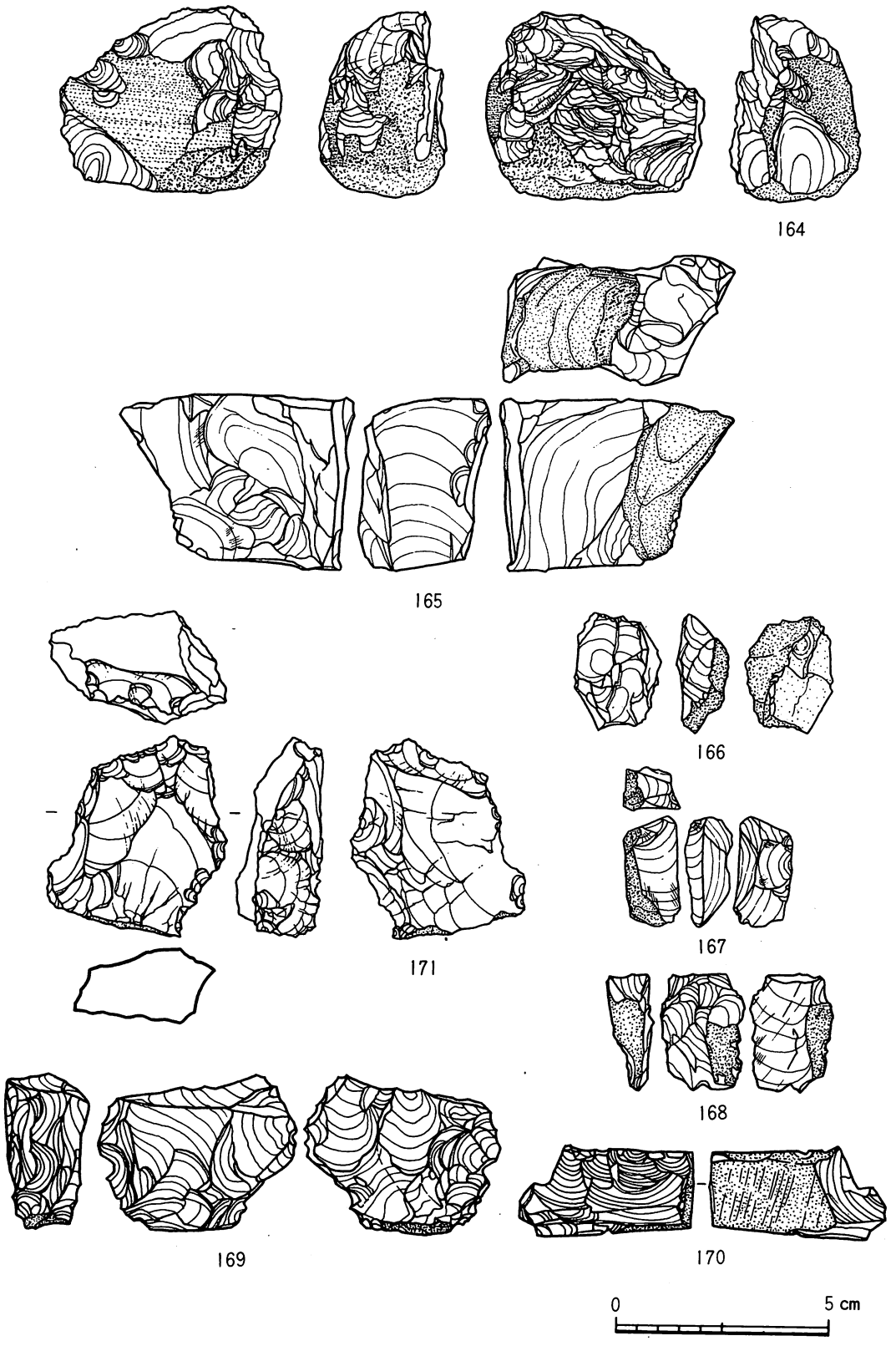
第31図　剝片・砕片実測図



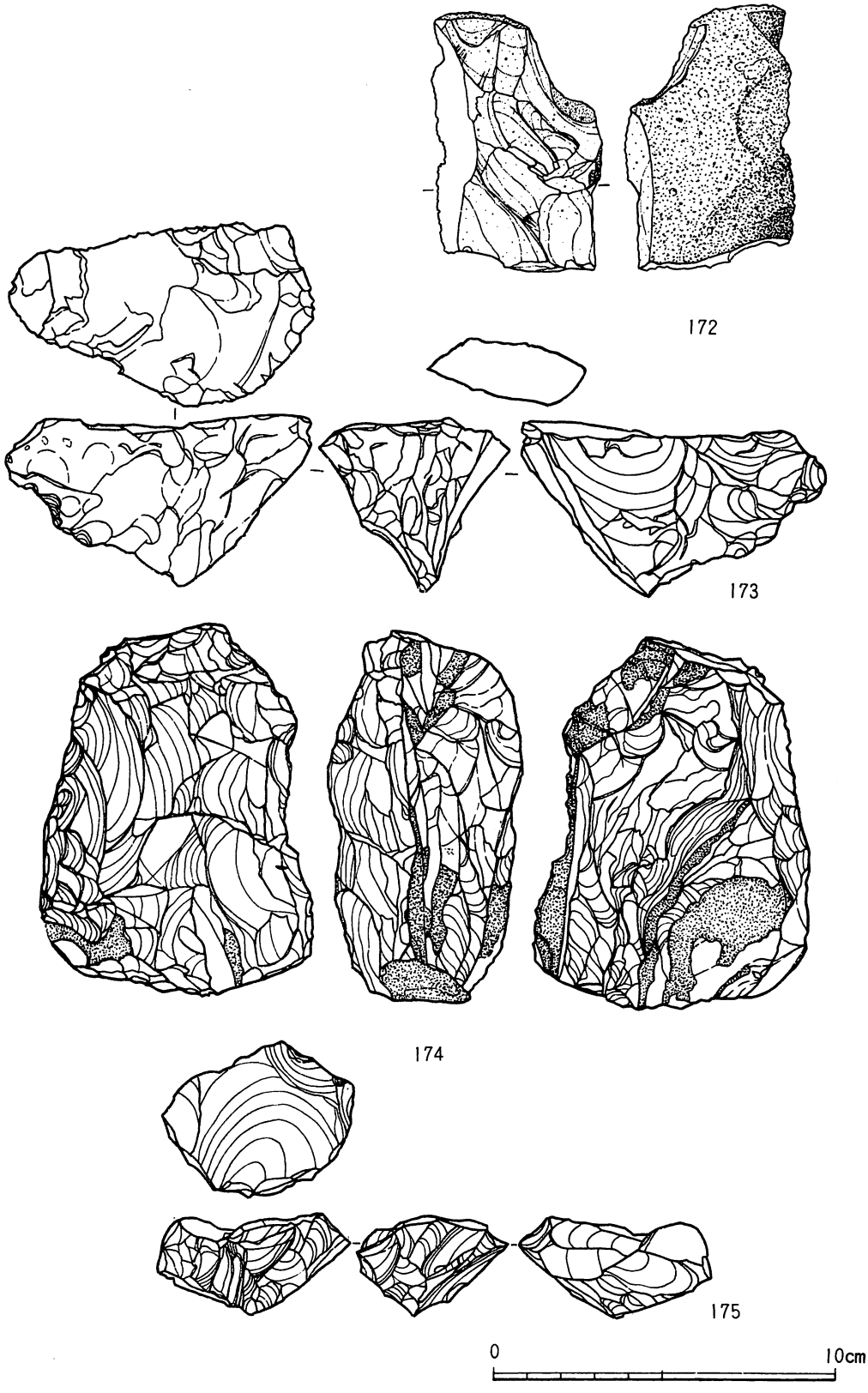
第32図　剝片・砕片実測図



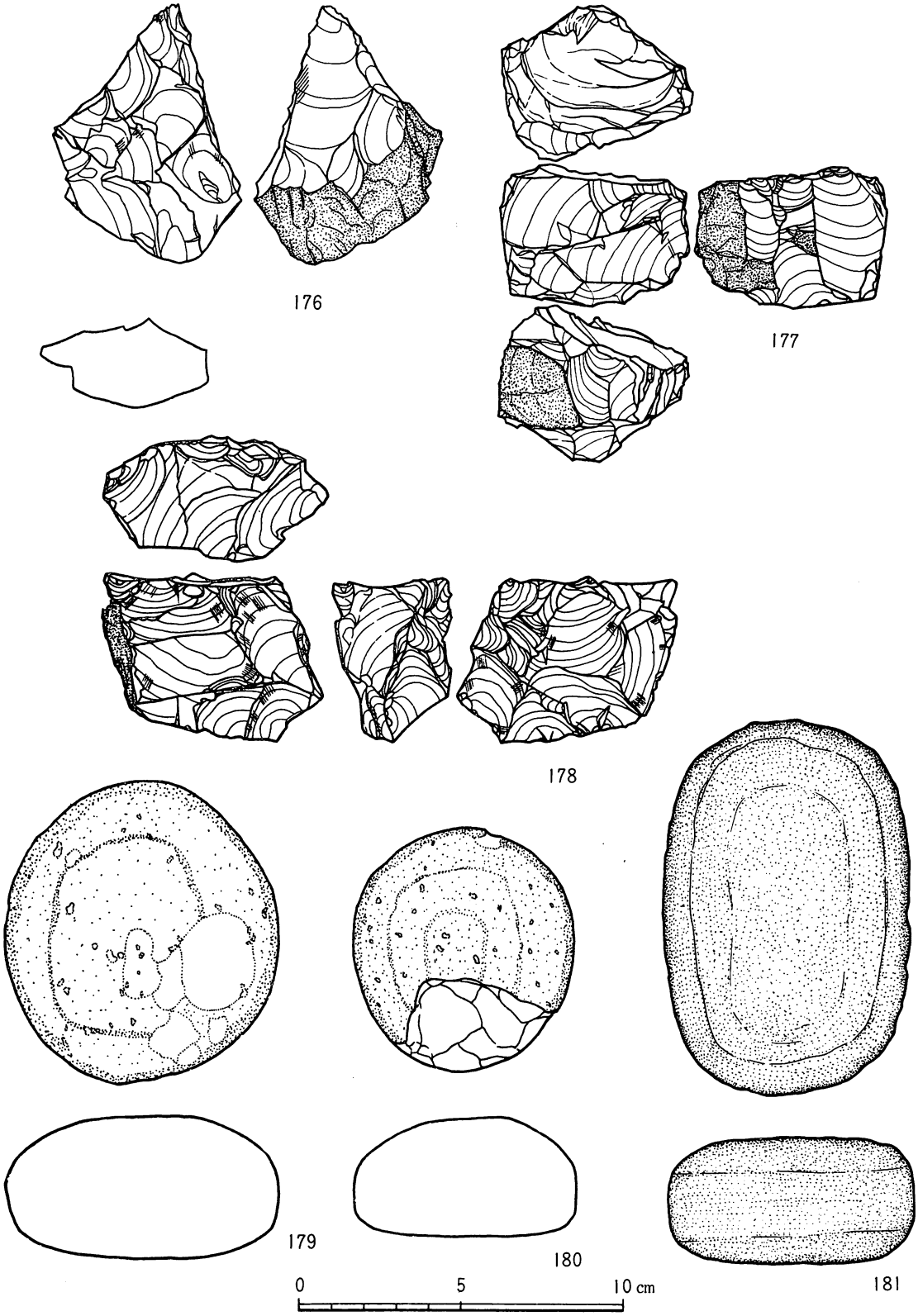
第33図　石鏃、剝片・砕片実測図



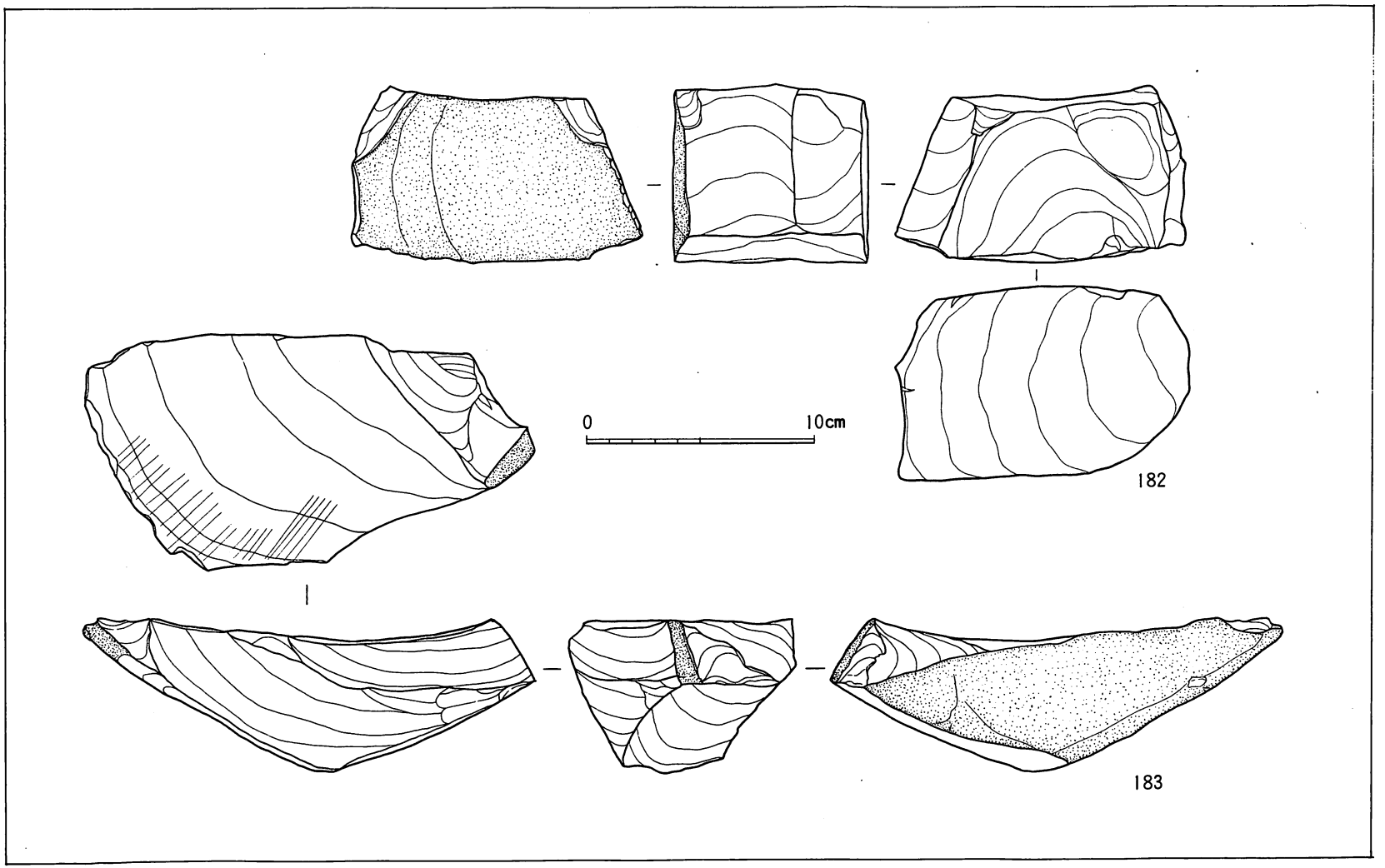
第34図　石鏃、石核実測図



第35図　石核実測図



第36図　石核、磨石実測図



第37図　石核実測図

図版番号	名称	地区	グリッド	層位	出土高度	石材	色調	長さ	最大幅	最大厚さ	重さ	特徴
第20図 001	ナイフ形石器	B地区	D－18	Ⅲ層	55.642 m	チャート	灰色	2.2cm	0.9cm	0.3cm	0.42g	素材は縦長剥片、背および基部にブランティング、先端は鋭く尖る。使用痕あり。
第20図 002	細石核	B地区		表土層		チャート	灰色	4.9	2.4	1.6	24.68	上下双方の自然平坦面から剥離、原礫面が残る
第20図 003	細石核	B地区	L－20	Ⅱ層	55.668	チャート	灰色	1.8	1.6	1.2	2.25	残核。自然平坦面から剥離
第20図 004	細石刃	B地区	M－20	Ⅱ層	55.711	黒曜石	黒色	0.8	0.7	0.2	0.70	刃部に使用痕あり。先端部を一部欠失。
第20図 005	細石刃	C地区	C－32	Ⅳa	54.193	サヌカイト	灰白色	1.6	0.9	0.3	0.42	完形、片方の刃部に使用痕がある。打面は自然平坦部で主要剥離面にバルブが大きく残る。
第20図 006	細石刃	C地区	D－26	Ⅳa	54.563	安山岩	灰オリーブ色	2.0	1.0	0.3	0.92	断面は三角形、先端を一部欠失。刃部には刃こぼれが見られる。
第20図 007	尖頭器	C地区	C－29	Ⅱ層	54.668	チャート	灰色	1.5	0.6	0.3	0.86	先端部。両側縁とも両側から調整加工。先端を尖らす。
第20図 008	尖頭器	C地区	E－28	Ⅱ層	54.708	チャート	暗青灰色	3.3	2.4	0.7	4.82	素材は縦長剥片。A面から両側縁に加工。先端を尖らす。断面は三角形、基部加工はない。剥片尖頭器
第20図 009	尖頭器	C地区		表土層		チャート	青灰色	2.5	2.3	0.7	2.10	胴部は厚い。先端の尖りは少ない。下縁は薄くなる。両面から緻密な調整剥離である。
第20図 010	尖頭器	C地区	D－32	Ⅱ層	54.318	チャート	灰色	2.8	3.3	0.4	1.90	胴部は薄い。先端の尖りは不充分。両側から調整剥離。
第20図 011	尖頭器	C地区	B－30	Ⅲ層	54.483	チャート	灰色	2.6	1.9	0.6	3.10	素材は不定形剥片。先端の尖りは鋭い。両側から調整剥離。
第20図 012	尖頭器	C地区	C－31	Ⅳa層	54.283	チャート	明青灰色	2.6	2.3	0.5	2.80	先端部。両側縁とも両側から調整剥離。先端を尖らす。
第20図 013	尖頭器	C地区	D－30	Ⅳa層	54.343	チャート	暗青灰色	2.2	1.9	0.5	1.82	先端部。両側縁とも両側から調整剥離。先端を尖らす。
第20図 014	掻器 削器	A地区	F－6	表土層		頁岩	灰白色	6.1	5.6	2.0	62.50	素材は横長剥片。打面は平坦面。バルブカットがある。側縁と下縁部を刃部としている。
第20図 015	掻器 削器	B地区		表土層		チャート	灰白色	3.3	2.1	0.6	4.80	素材は不定形剥片。一側縁に剥離を施し、刃部を形成する。
第20図 016	掻器 削器	B地区		表採		チャート	暗緑色	5.3	3.6	1.0	15.10	不定形剥片。打面は平坦。両側縁に使用痕
第20図 017	掻器 削器	B地区		表土層		黄緑凝灰岩	灰白色	5.9	3.9	1.1	22.30	素材は縦長剥片、調整打面でA面に打瘤痕が残る。縁辺に押圧剥離を連続して施し刃部を形成。サイド
第21図 018	掻器 削器	B地区		表土層		サヌカイト	オリーブ黄色	7.0	4.1	1.5	38.80	素材は縦長剥片、両側縁に粗い剥離で刃部を形成。一部に原礫面を残す。先端ほか四カ所に新しいわれ
第21図 019	掻器 削器	B地区		表土層		チャート	暗緑灰色	4.3	3.2	1.7	23.00	素材は分厚い不定形剥片。打面は平坦。断面は三角形両側縁に刃部を形成。
第21図 020	掻器 削器	B地区		表土層		チャート	灰色	2.0	2.0	0.7	3.12	素材は不定形剥片。打面は平坦。B面に2本の稜線がある。両側縁に刃部加工。
第21図 021	掻器 削器	B地区		表土層		チャート	オリーブ黒色	3.6	3.1	1.0	9.90	素材は不定形剥片。刃部を形成する剥離はほぼ一周する。
第21図 022	掻器 削器	B地区		表土層		サヌカイト	灰オリーブ色	5.0	3.6	1.2	58.52	素材は不定形剥片。粗雑な剥離で刃部を形成
第21図 023	掻器 削器	B地区		表土層		チャート	灰色	3.5	4.2	0.9	12.68	素材は横長剥片。打面は平坦。両側縁に使用痕が残る。

第3表　出土遺物一覧表(001～023)

図版番号	名　称	地　区	グリッド	層　位	出土高度	石　材	色　調	長さ	最大幅	最大厚さ	重さ	特　　徴
第21図 024	掻器　削器	B地区		表土層	m	チャート	暗緑灰色	3.5cm	2.0cm	0.6cm	7.10g	素材は分厚い不定形剥片。--側縁に剥離を施し刃部を形成する。
第21図 025	掻器　削器	B地区	L－20	Ⅱ　層	55.723	チャート	緑灰色	5.2	3.9	2.1	50.82	素材は分厚い不定形剥片。断面は三角形。縁辺の薄いところに刃部加工。原礫面が残る。
第21図 026	掻器　削器	B地区	L－20	Ⅱ　層	55.668	チャート	暗緑灰色	5.2	3.7	1.5	27.89	不定形剥片。原礫面が残る。
第21図 027	掻器　削器	B地区	L－17	Ⅲ　層	55.678	チャート	暗青灰色	3.4	1.7	1.1	5.88	素材は不定形剥片。ナイフ形石器のような形状を示す。刃部に使用痕がある。原礫面が残る。
第21図 028	掻器　削器	B地区	N－18	Ⅲ　層	55.588	チャート	黒　色	4.1	5.1	2.6	43.20	残核の縁辺に剥離を施し、刃部を形成する。断面は三角形、原礫面が残る。
第23図 029	掻器　削器	B地区	N－19	Ⅳa層	55.378	頁　岩	明青灰色	6.1	4.5	1.0	36.82	素材は縦長の剥片。打面は平坦。両側縁に刃部加工。
第23図 030	掻器　削器	B地区	O－17	Ⅳb層	55.388	チャート	黒　色	2.6	2.2	0.7	4.76	素材は不定形剥片。--側縁を刃部とする。
第23図 031	掻器　削器	B地区	K－19	Ⅳ　a	55.538	チャート	青黒色	2.8	2.2	1.0	4.90	素材は縦長剥片。打面は平坦面。断面は三角形。両側縁に刃部加工。
第23図 032	掻器　削器	C地区		表土層		頁　岩	淡黄色	5.0	3.9	1.5	23.72	素材は不定形剥片。断面は三角形。両側縁に刃部加工。
第23図 033	掻器　削器	C地区		表土層		チャート	暗灰色	3.4	2.5	0.9	8.08	素材は横剥で分厚い。下縁を刃部としている。
第23図 034	掻器　削器	C地区		表土層		チャート	暗緑灰色	3.0	1.4	0.9	5.78	素材は横長剥片で弯曲している。打面は平坦。下縁に刃部加工。使用痕がのこる。
第23図 035	掻器　削器	C地区		表土層		チャート	暗青灰色	3.9	2.3	0.7	7.35	素材は横長剥片。打面は平坦。片方の側縁を刃部とする。
第23図 036	掻器　削器	C地区		表土層		チャート	暗青灰色	3.0	2.0	0.7	4.52	素材は縦長剥片、打面は平坦。B面に稜線がある。両側縁を刃部とする。
第23図 037	掻器　削器	C地区		表土層		チャート	灰　色	3.7	3.0	0.8	13.00	素材は不定形剥片。先端が尖り、ドリル状にある。縁辺を刃部とし、使用痕が残る。
第23図 038	掻器　削器	C地区		表土層		チャート	灰白色	4.2	3.2	0.8	10.30	不定形剥片。片方の側縁に使用痕がある。
第23図 039	掻器　削器	C地区		表土層		サヌカイト	浅黄橙色	3.9	2.3	0.7	7.35	片方の側縁を刃部とする。グレーバーの可能性をもつ。
第23図 040	掻器　削器	C地区		表土層		チャート	暗青灰色	3.4	2.9	1.0	10.31	素材は不定形剥片。縁辺を刃部とし、使用痕がある。
第23図 041	掻器　削器	C地区	G－26	Ⅱ　層	54.923	チャート	暗緑灰色	4.0	2.8	1.3	12.70	素材は不定形剥片、縁辺を刃部とし使用痕がある。
第23図 042	掻器　削器	C地区	E－30	Ⅱ　層	54.598	チャート	青灰色	3.3	2.8	1.1	9.68	素材は不定形剥片。打面は平坦。鋭い縁辺に刃部加工。
第23図 043	掻器　削器	C地区	G－27	Ⅱ　層	54.733	チャート	青灰色	4.0	2.8	0.9	14.02	素材は不定形剥片、縁辺の薄い部分を刃部としている。
第24図 044	掻器　削器	C地区	C－32	Ⅱ　層	54.308	安山岩	淡黄色	4.3	4.0	1.1	15.62	素材は不定形剥片。ほぼ--周する刃部加工がある。
第24図 045	掻器　削器	C地区	D－33	Ⅱ　層	54.308	チャート	暗赤褐色	3.8	3.7	1.2	18.20	素材は不定形剥片。B面はほとんど原礫面。B面に3回の剥離で刃部を形成。
第24図 046	掻器　削器	C地区	G－24	Ⅱ　層	54.933	チャート	灰　色	3.1	2.0	1.1	6.62	素材は不定形剥片。ほぼ全周に刃部を形成。

第4表　出土遺物一覧表（024～046）

図版番号	名称	地区	グリッド	層位	出土高度	石材	色調	長さ	最大幅	最大厚さ	重さ	特徴
第24図 047	掻器 削器	C地区	F－29	Ⅱ 層	54.578 m	チャート	暗赤褐色	4.1cm	4.0cm	1.2cm	14.70g	素材は不定形剥片。打面は平坦。一端は尖り、尖頭状にある。側縁の一部に刃部加工。
第24図 048	掻器 削器	C地区	B－29	Ⅱ 層	54.638	黒曜石	黒色	2.5	2.2	0.6	3.90	素材は不定形剥片。打面は平坦。縁辺に刃部加工。
第24図 049	掻器 削器	C地区	C－29	Ⅱ 層	54.628	チャート	暗青灰色	2.6	2.3	0.4	3.59	素材は不定形剥片。変則四辺形の二辺を刃部とする。
第24図 050	掻器 削器	C地区	E－28	Ⅲ 層	54.693	頁岩	灰白色	6.4	6.1	1.8	57.52	素材は分厚い不定形剥片。打面は平坦。片方の側縁を刃部とする。
第24図 051	掻器 削器	C地区	F－31	Ⅲ 層	54.403	チャート	緑灰色	6.4	4.4	1.4	36.80	素材は不定形剥片。原礫面が残る。
第24図 052	掻器 削器	C地区	F－28	Ⅲ 層	54.653	チャート	青灰色	3.7	3.6	0.7	14.90	素材は不定形剥片。側縁の一部を刃部とする。
第24図 053	掻器 削器	C地区	F－26	Ⅲ 層	54.858	統紋岩	灰白色	2.9	2.2	0.9	4.41	素材は横長剥片。打面は平坦。縁辺に刃部加工。石材は縞状の流状構造をもつ。
第24図 054	掻器 削器	C地区	D－28	Ⅳa層	54.483	チャート	暗青灰色	4.8	1.5	0.8	3.05	素材は不定形剥片。断面は三角形。縁辺に二次加工を施し、刃部としている。
第24図 055	掻器 削器	C地区	C－31	Ⅳa層	54.253	サヌカイト	灰色	4.8	2.8	1.4	12.90	素材は不定形剥片。片方の側縁にステップフレーキングにより刃部を形成する。
第25図 056	掻器 削器	C地区	E－28	Ⅳa層	54.513	黄緑凝灰岩	浅黄色	5.7	3.6	1.2	33.68	素材は縦長剥片。断面は三角形、片方の側縁に二次加工。
第25図 057	掻器 削器	D地区		表土層		チャート	青灰色	2.9	2.4	0.4	6.45	不定形剥片。打面は平坦。縁辺に使用痕。
第25図 058	錐器	B地区	N－17	Ⅱ 層		チャート	灰色	2.2	1.3	0.6	1.60	交互剥離によって錐部を形成、磨滅がある。
第25図 059	錐器	C地区	C－33	Ⅱ 層	54.218	チャート	暗緑灰色	3.1	2.2	1.1	5.20	不定形剥片。原礫面が残る。縁辺に使用痕。
第25図 060	錐器	C地区	G－26	Ⅲ 層	54.833	チャート	灰白色	2.0	1.8	0.6	1.48	先端は鋭く尖る。交互剥離によって錐部を形成
第25図 061	錐器	C地区	E－31	Ⅳb層	54.183	チャート	緑白色	2.9	1.7	0.9	3.25	粗い剥離で刃部を形成。
第25図 062	彫器	B地区		表土層		チャート	暗赤褐色	4.5	4.0	1.1	25.20	厚手の剥片。打面は平坦。調整剥離がある。
第25図 063	二次加工のある剥片	B地区		表土層		安山岩	にぶい黄褐色	4.4	3.6	1.1	2.28	素材は横長剥片、打面は平坦。両側に剥離加工がある。
第25図 064	二次加工のある剥片	B地区		表土層		黄緑凝灰岩	灰オリーブ色	7.8	3.7	1.7	45.22	素材は縦長剥片、打面は平坦。先端は尖っていたと思われる。最先端を欠失、B面に調整痕がある。
第25図 065	二次加工のある剥片	B地区		表土層		安山岩	淡黄色	4.2	2.9	0.7	9.90	素材は縦長剥片、打面は平坦。B面にステップフレーキングが施されている。両側縁を刃部としている。
第25図 066	二次加工のある剥片	B地区		表土層		チャート	暗青灰色	4.0	2.8	1.0	10.52	不定形の剥片、断面は三角形。縁辺が刃部で使用痕がある。
第25図 067	二次加工のある剥片	B地区		表土層		安山岩	淡黄色	3.9	3.3	1.0	11.00	素材は不定形剥片、原礫面を一部残している。B面に三条の剥離がある。
第25図 068	二次加工のある剥片	B地区	N－18	Ⅱ 層	55.613	チャート	灰色	3.6	1.7	1.2	7.50	分厚い不定形剥片、原礫面が一部残る。
第27図 069	二次加工のある剥片	C地区		表土層		チャート	灰色	3.4	1.8	0.5	2.60	二次加工はない。鋭い縁辺を刃部とし、使用痕がある。形状はナイフ形石器に類似する。

第5表　出土遺物一覧表（047～069）

図版番号	名　称	地　区	グリッド	層　位	出土高度	石　材	色　調	長さ	最大幅	最大厚さ	重さ	特　　徴
第27図 070	二次加工のある剝片	C地区		表土層	m	チャート	暗青灰色	2.7cm	2.6cm	0.1cm	6.12g	素材は不定形剝片。打面は平坦。分厚い部分の調整剝離がある。縁辺を刃部として、使用痕が認められる。
第27図 071	二次加工のある剝片	C地区		表土層		チャート	暗青色	2.0	1.0	0.4	0.68	素材は不定形剝片。先端を尖らし、プランティングが見られる。ナイフ形石器の未製品の可能性がある。石質も同じである。
第27図 072	二次加工のある剝片	C地区	F－24	Ⅱ　層	55.043	チャート	青黒色	2.9	1.5	0.8	3.05	素材は分厚い不定形剝片。薄くするための調整剝離がある。形状はナイフ形石器状にある。刃部には刃こぼれがある。
第27図 073	二次加工のある剝片	C地区	G－25	Ⅱ　層	55.033	チャート	暗緑色	3.4	2.5	0.4	3.22	素材は縦長剝片、一部に原礫面を残す。縁辺を刃部としている。使用痕が残る。
第27図 074	二次加工のある剝片	C地区	C－28	Ⅱ　層	54.688	チャート	暗赤色	3.3	2.4	0.8	6.80	素材は不定形剝片、形状は台形様石器状にある。背の一部にA面からプランティング様の剝離を施す。刃部には刃こぼれ
第27図 075	二次加工のある剝片	C地区	E－30	Ⅱ　層	54.548	黒曜石	黒色	2.0	1.4	0.7	0.91	素材は不定形剝片、側面にノッチがある。頭部を欠失、石材はオリーブ黄色の気泡がはいる。
第27図 076	二次加工のある剝片	C地区	C－33	Ⅱ　層	54.218	チャート	暗灰色	3.2	1.2	0.7	3.10	平坦面から四条の剝離を行っている。細石核の可能性あり。縁辺に細かな二次加工を施している
第27図 077	二次加工のある剝片	C地区	C－27	Ⅱ　層	54.768	黒曜石	黒色	1.6	1.2	0.6	0.58	素材は不定形剝片。側縁に二次加工がある。
第27図 078	二次加工のある剝片	C地区	G－26	Ⅱ　層	54.613	チャート	青灰色	5.0	3.2	0.7	9.80	素材は横長剝片、打面は平坦。縁辺は鋭い部分が少なく、鋭い部分を刃部として使用。
第27図 079	二次加工のある剝片	C地区	E－27	Ⅱ　層	54.758	チャート	暗青灰色	2.2	1.6	0.4	1.52	素材は不定形な剝片、側縁部の一部に二次加工ドリルの可能性あり。
第27図 080	二次加工のある剝片	C地区	C－31	Ⅱ　層	54.428	チャート	暗青灰色	2.0	1.2	0.2	0.72	形状は二等辺三角形を呈する。片方の側縁と下縁に二次加工を施す。石鏃の未製品か。
第27図 081	二次加工のある剝片	C地区	C－33	Ⅱ　層	54.268	チャート	暗青色	2.6	1.2	0.6	3.22	打面は自然平坦面、先端はいく分尖がっている縁辺に二次加工を施す。掻器の可能性あり。
第27図 082	二次加工のある剝片	C地区	D－27	Ⅱ　層	54.748	チャート	灰白色	3.1	2.4	0.6	3.61	不定形剝片、打面は平坦、縁辺を刃部とする。細かな二次加工がある。
第27図 083	二次加工のある剝片	D地区		表土層		チャート	黒色	3.2	1.8	0.8	4.18	縦長剝片。横断面は三角形。両側縁に使用痕。
第27図 084	使用痕のある剝片	B地区		表土層		チャート	暗赤褐色	5.5	3.8	1.4	27.50	ナイフ形石器のような形状を示す。顕著な二次加工は認められない。刃部に使用痕。
第27図 085	使用痕のある剝片	B地区		表土層		チャート	暗灰色	2.7	1.3	0.6	3.60	縦長剝片。打面は平坦。縁辺に使用痕。
第27図 086	使用痕のある剝片	B地区	M－19	Ⅲ　層	55.538	黒曜石	黒色	2.0	1.4	0.3	0.86	不定形剝片。側辺に使用痕。
第27図 087	使用痕のある剝片	B地区		表土層		黒曜石	黒色	1.9	1.5	0.3	0.41	縦長剝片。打面は平坦。縁辺に使用痕。
第27図 088	使用痕のある剝片	B地区	M－18	Ⅲ　層	55.618	チャート	暗赤褐色	3.5	2.2	0.7	4.01	形状はナイフ形石器状にある。二次加工なし。縁辺に使用痕。
第27図 089	使用痕のある剝片	B地区	N－18	Ⅳa層	55.458	チャート	灰色	2.8	0.9	0.7	1.70	断面が三角形を呈する剝片。三稜の一辺に使用痕。
第27図 090	使用痕のある剝片	B地区	N－18	Ⅳc層	55.248	頁岩	灰白色	2.2	1.1	0.4	0.82	不定形剝片。片方の縁辺に使用痕。
第27図 091	使用痕のある剝片	B地区	M－18	Ⅳa層	55.488	黒曜石	黒色	2.3	1.1	0.5	0.88	断面が三角形を呈する剝片。三稜に使用痕がある。
第27図 092	使用痕のある剝片	B地区	M－17	Ⅳa層	55.568	黒曜石	黒色	2.2	1.3	0.6	1.78	第一剝片。B面は原礫面。縁辺に使用痕。

第6表　出土遺物一覧表（070～092）

図版番号	名　称	地　区	グリッド	層　位	出土高度	石　材	色　調	長さ	最大幅	最大厚さ	重さ	特　　徴
第27図 093	使用痕のある剝片	B地区	L－19	Ⅳb層	55.308m	黒　曜　石	黒　　色	1.8cm	1.0cm	0.1cm	0.48g	不定形剝片。縁辺に使用痕。
第27図 094	使用痕のある剝片	B地区	N－18	Ⅳa層	55.468	黒　曜　石	黒　　色	2.7	2.0	0.5	3.32	不定形剝片。縁辺に使用痕。
第30図 095	使用痕のある剝片	C地区	G－25	Ⅱ　層	55.053	チャート	暗灰黄色	5.1	2.9	1.3	21.52	縦長剝片、厚手、下縁は鋭く、使用痕。
第30図 096	使用痕のある剝片	C地区	C－27	Ⅱ　層	54.748	安　山　岩	浅　黄　色	4.1	2.7	0.9	9.51	不定形剝片。打面は平坦。縁辺に使用痕。
第30図 097	使用痕のある剝片	C地区	G－25	Ⅱ　層	55.053	チャート	灰　　色	2.2	0.9	0.5	1.80	不定形剝片。打面は平坦。断面は三角形。側縁に使用痕。
第30図 098	使用痕のある剝片	C地区	F－27	Ⅱ　層	54.743	黒　曜　石	黒　　色	1.6	0.6	0.2	0.32	縦長の剝片。断面は三角形。片方の側縁に使用痕。
第30図 099	使用痕のある剝片	C地区	G－24	Ⅱ　層	54.933	チャート	灰　　色	2.2	1.7	0.6	2.20	不定形剝片。縁辺に使用痕。
第30図 100	使用痕のある剝片	C地区	D－30	Ⅱ　層	54.608	チャート	暗　灰　色	2.5	1.2	0.4	1.30	縦長剝片。両側縁に使用痕。
第30図 101	使用痕のある剝片	C地区	E－28	Ⅱ　層	54.728	チャート	灰　　色	3.2	1.9	0.7	4.70	不定形剝片。断面は三角形。片方の側縁に使用痕。
第30図 102	使用痕のある剝片	C地区	C－33	Ⅱ　層	54.308	チャート	灰　　色	2.7	1.8	0.7	3.40	縦長剝片。断面は三角形。両側縁に使用痕。
第30図 103	使用痕のある剝片	C地区	B－30	Ⅲ　層	54.493	チャート	暗緑灰色	4.2	3.4	0.7	10.52	不定形剝片。打面は平坦。片方の側縁は鋭い。
第30図 104	使用痕のある剝片	C地区	F－28	Ⅲ　層	54.643	チャート	灰　　色	2.7	2.4	1.1	7.50	不定形剝片。分厚い。縁辺の一部に使用痕。
第30図 105	使用痕のある剝片	C地区	B－29	Ⅲ　層	54.563	チャート	灰　　色	2.7	1.8	0.5	2.30	縦長剝片。打面は平坦。両側縁に使用痕。
第30図 106	使用痕のある剝片	C地区	E－28	Ⅳa層	54.513	チャート	黒　　色	5.7	3.6	1.2	33.68	横長剝片。分厚い。原礫面が一部残る。片方の側縁に使用痕。
第30図 107	使用痕のある剝片	C地区	E－31	Ⅳa層	54.283	チャート	灰　　色	5.0	2.5	1.2	10.28	横長剝片。断面は三角形。側縁に使用痕。
第30図 108	使用痕のある剝片	C地区	F－31	Ⅳa層	54.293	チャート	灰　　色	5.2	3.4	1.2	16.48	不定形剝片。断面は三角形。縁辺に使用痕。節理が多く、いびつな形状。
第30図 109	使用痕のある剝片	D地区	D－1トレ	表土層		チャート	暗　赤　色	3.9	3.0		7.82	横長剝片。打面は平坦。両側縁に使用痕。
第31図 110	剝片・砕片	B地区		表　採		サヌカイト	暗青灰色	8.1	4.2	0.9	53.05	縦長の不定形剝片。打面は平坦。下縁は鋭い。
第31図 111	剝片・砕片	B地区		表　採		チャート	灰オリーブ色	5.3	4.2	1.4	45.34	不定形剝片。打面は平坦。片方の側縁は鋭い。
第31図 112	剝片・砕片	B地区		表　採		頁　　岩	灰　白　色	4.2	4.2	1.0	14.70	横長の不定形剝片。打面は平坦。縁辺の一部は鋭い。
第31図 113	剝片・砕片	B地区		表土層		チャート	暗青灰色	5.5	3.6	1.5	31.50	分厚い不定形剝片、断面は台形。原礫面を残す。鋭い縁辺はない。
第31図 114	剝片・砕片	B地区		表土層		チャート	暗赤褐色	2.8	2.1	0.4	3.05	縦長剝片。B面に2本の稜線、原礫面が残る。
第31図 115	剝片・砕片	B地区	L－18	Ⅱ　層	55.623	チャート	灰　　色	2.1	2.1	0.6	2.68	不定形剝片。縁辺に鋭い部分はない。

第7表　出土遺物一覧表（093～115）

図版番号	名称	地区	グリッド	層位	出土高度	石材	色調	長さ	最大幅	最大厚さ	重さ	特徴
第31図 116	剝片・砕片	B地区	M－18	Ⅱ層	55.623m	チャート	灰白色	4.6cm	3.2cm	1.6cm	28.32g	不定形剝片。分厚い。
第31図 117	剝片・砕片	B地区	M－18	Ⅲ層	55.688	チャート	灰色	2.7	1.5	0.6	1.52	不定形剝片。打面は不整形。両側縁は鋭い。
第31図 118	剝片・砕片	B地区	M－17	Ⅲ層	55.678	チャート	黒色	3.5	1.3	0.88	4.60	不定形剝片、打面は平坦。ひずんでいる。
第31図 119	剝片・砕片	B地区	M－20	Ⅲ層	55.493	頁岩	淡黄色	2.5	2.3	0.8	2.51	不定形剝片。打面は平坦。縁辺の一部は鋭い。
第31図 120	剝片・砕片	B地区	L－17	Ⅲ層	55.713	黒曜石	黒色	2.9	1.3	0.6	2.20	縦長剝片。打面は不整形。断面は三角形。
第31図 121	剝片・砕片	B地区	M－18	Ⅲ層	55.593	統紋岩	淡黄色	2.6	2.1	0.7	3.29	不定形剝片。打面は平坦。一部原礫面が残る。
第32図 122	剝片・砕片	B地区	M－18	Ⅲ層	55.588	チャート	黒色	3.8	2.4	0.8	6.40	不定形剝片、打面は平坦。
第32図 123	剝片・砕片	B地区	M－18	Ⅲ層	55.618	頁岩	灰白色	3.7	3.0	0.6	3.45	不定形剝片。打面は平坦。
第32図 124	剝片・砕片	B地区	L－19	Ⅲ層	55.588	チャート	黒色	3.0	1.9	0.6	1.92	不定形剝片。打面は平坦。原礫面が一部残る。縁辺は鋭い。
第32図 125	剝片・砕片	B地区	M－18	Ⅲ層	55.598	頁岩	灰白色	2.4	2.0	0.8	2.72	不定形剝片。打面は平坦。原礫面が残る。
第32図 126	剝片・砕片	B地区	N－19	Ⅲ層	55.533	チャート	灰オリーブ色	3.2	2.0	0.6	2.60	不定形剝片。打面は平坦。側縁は鋭い。
第32図 127	剝片・砕片	B地区	M－19	Ⅳa層	55.488	チャート	黒色	2.6	1.7	0.4	1.90	縦長剝片。打面は平坦。二条の稜線あり。縁辺は鋭く使用痕。
第32図 128	剝片・砕片	B地区	M－19	Ⅳa層	55.468	チャート	暗緑灰色	2.7	2.4	0.6	4.20	不定形剝片。原礫面が一部残る。
第32図 129	剝片・砕片	B地区	M－19	Ⅳa層	55.488	統紋岩	灰白色	6.3	5.1	0.8	44.22	不定形剝片。原礫面が残る。
第32図 130	剝片・砕片	B地区	M－18	Ⅳa層	55.488	サヌカイト	オリーブ灰色	2.6	1.3	0.3	1.00	縦長剝片。打面は平坦。A面に稜線あり。
第32図 131	剝片・砕片	B地区	M－19	Ⅳb層	55.278	黄緑凝灰岩	灰白色	6.6	3.1	2.2	26.65	縦長剝片。打面は平坦。断面は三角形。
第32図 132	剝片・砕石	C地区	E－30	Ⅱ層	54.608	チャート	暗赤褐色	1.9	1.9	0.2	1.12	不定形剝片。打面は平坦。両側縁は鋭い。
第32図 133	剝片・砕石	C地区		表土層		サヌカイト	灰オリーブ色	4.6	2.6	0.9	10.40	縦長の不定形剝片。打面は平坦。片方の側縁は鋭い。
第32図 134	剝片・砕石	C地区	G－26	Ⅱ層	54.923	サヌカイト	灰色	3.3	2.9	0.9	6.45	不定形剝片。打面は平坦。縁辺は鋭い。
第32図 135	剝片・砕石	C地区	D－32	Ⅱ層	54.328	チャート	灰白色	2.1	0.6	0.55	0.61	不定形剝片。
第32図 136	剝片・砕石	C地区	E－31	Ⅱ層	54.308	チャート	暗青灰色	3.3	1.3	0.4	1.90	横長の不定形剝片。打面は平坦。縁辺は鋭い。
第32図 137	剝片・砕石	C地区	C－33	Ⅱ層	54.268	黒曜石	黒色	1.3	1.1	0.5	1.42	不定形剝片。
第32図 138	剝片・砕石	C地区	E－27	Ⅱ層	54.798	チャート	黒色	2.6	1.2	1.1	4.00	不定形剝片。鋭い縁辺を使用した可能性あり。

第8表　出土遺物一覧表（116～138）

図版番号	名称	地区	グリッド	層位	出土高度	石材	色調	長さ	最大幅	最大厚さ	重さ	特徴
第32図 139	剝片・砕石	C地区	B－30	Ⅲ層	54.503 m	チャート	暗緑灰色	2.5cm	2.0cm	0.5cm	2.18g	不定形剝片。打面は平坦。縁辺の一部は鋭い。
第33図 140	剝片・砕片	C地区	F－31	Ⅲ層	54.403	チャート	暗青灰色	7.4	4.4	1.8	46.50	横長剝片。打面は平坦。B面に稜線。側縁に刃こぼれらしきものがある。
第33図 141	剝片・砕片	C地区	F－27	Ⅲ層	54.673	チャート	暗緑灰色	3.0	2.5	0.4	2.62	縦長剝片。打面は平坦。縁辺は鋭い。
第33図 142	剝片・砕片	C地区	E－30	Ⅳb層	54.213	チャート	暗灰色	2.9	2.0	0.6	3.18	横長剝片。打面は平坦。縁辺の一部は鋭い。
第33図 143	剝片・砕片	C地区	B－28	Ⅳa層	54.473	チャート	緑灰色	2.0	1.2	0.6	1.10	横剝ぎ。打面は調整打面。
第33図 144	石鏃	B地区		表土層		黒曜石	黒色	1.9	1.6	0.4	0.92	不整形で、未製品と思われる。
第33図 145	石鏃	B地区		表土層		チャート	灰白色	1.6	1.4	0.4	0.82	二等辺三角形で端正な形状を示す。脚の抉りは浅い。先端を欠失している。
第33図 146	石鏃	B地区		表土層		チャート	明オリーブ灰色	2.1	1.0	0.5	0.80	先端はよく尖り端正である。片脚鏃の可能性が強い。
第33図 147	石鏃	B地区		表土層		チャート	暗灰色	2.0	1.5	0.3	0.68	片方の側縁の剝離が不充分である。脚の抉りは浅い。
第33図 148	石鏃	B地区		表土層		黒曜石	黒色	1.8	1.1	0.2	0.40	脚を欠失するが片脚鏃の可能性が強い。先端の尖りは鋭い。
第33図 149	石鏃	C地区		表土層		安山岩	にぶい橙色	2.1	1.9	0.7	1.60	ほぼ正三角形の形状を示す。少し脚の抉りがある。表面は風化が著しい。
第33図 150	石鏃	C地区		表土層		チャート	灰色	2.1	1.7	0.4	0.78	二等辺三角形の形状を示し、脚の抉りも深い。端正である。
第33図 151	石鏃	C地区		表土層		サヌカイト	黄褐色	2.7	2.4	0.6	4.90	脚の抉りはなく薄い。身は厚く、先端は欠失。
第33図 152	石鏃	C地区		表土層		黒曜石	黒色	1.2	1.2	0.3	0.78	非常に小型の石鏃。脚の抉りも認められる。
第33図 153	石鏃	C地区	D－32	Ⅱ層	54.318	チャート	暗青灰色	3.3	1.5	0.4	1.90	身が非常に長く短脚である。先端と脚の一部を欠失。
第33図 154	石鏃	C地区	E－27	Ⅱ層	54.788	黒曜石	黒色	3.3	2.2	0.5	2.05	よく整った石鏃である。脚、身とも長く、先端の尖りは鋭い。
第33図 155	石鏃	C地区	E－29	Ⅱ層	54.708	黒曜石	黒色	1.4	1.1	0.3	0.50	脚、銅部の一部
第33図 156	石鏃	C地区	E－31	Ⅱ層	54.338	黒曜石	黒色	1.3	1.0	0.5	0.60	非常に小型の石鏃。身が厚い。一部磨製した可能性がある。
第33図 157	石鏃	C地区	D－31	Ⅱ層	54.408	安山岩	灰オリーブ色	1.8	1.5	0.3	0.42	薄手の石鏃、端正な形状を示す。表面は風化が激しい。
第33図 158	石鏃	C地区	D－26	Ⅱ層	54.808	黒曜石	黒色	4.0	2.8	0.6	3.48	大型の石鏃である。脚の抉りも大きい。先端の調整剝離は失敗している。いびつな形状を示す。
第33図 159	石鏃	C地区	D－31	Ⅱ層	54.508	チャート	緑灰色	1.7	1.5	0.3	0.62	小型の石鏃、体部に比べて脚の抉りが大きい。
第33図 160	石鏃	C地区	D－31	Ⅱ層	54.458	黒曜石	黒色	1.4	1.0	0.2	0.24	二等辺三角形で、脚の抉りはない。
第33図 161	石鏃	C地区	E－30	Ⅲ層	54.523	チャート	青灰色	3.9	2.1	0.6	5.40	脚部は少し抉りがある。基部は薄くなっている。調整剝離にはステップフレーキングが一部見られる。

第9表　出土遺物一覧表（139～161）

図版番号	名称	地区	グリッド	層位	出土高度	石材	色調	長さ	最大幅	最大厚さ	重さ	特徴
第33図 162	石鏃	C地区	C－30	Ⅳa層	54.333 m	黒曜石	黒色	1.3cm	1.3cm	0.3cm	0.31g	体部に比べて脚の抉りが大きく、脚の先端は尖がっている。
第33図 163	石鏃	C地区	D－30	Ⅳa層	54.353	チャート	暗赤褐色	1.2	1.2	0.2	0.40	脚の抉りは少い。薄くよく整っている。磨製の可能性がある。先端を欠失。
第36図 164	石核	C地区	D－28	Ⅳa層	54.473	チャート	緑灰色	5.2	4.3	3.1	72.88	不定形石核。平坦面から不規則的な剥離。原礫面が残る。
第36図 165	石核	C地区	E－28	Ⅱ層	54.708	黄緑凝灰岩	淡黄色	5.5	4.0	3.2	72.35	上下の自然平坦面から縦長の剥片を剥取。原礫面が残る。
第36図 166	石核	C地区	E－32	Ⅱ層	54.308	チャート	暗赤褐色	2.8	2.0	1.2	6.82	小円礫から小剥片を剥取。打面は平坦。原礫面が多く残る。
第36図 167	石核	C地区	E－27	Ⅱ層	54.798	チャート	暗赤褐色	2.6	1.2	1.1	4.00	小型の石核。円礫に平坦面をつくり、剥取。縦と横からの剥離。
第36図 168	石核	C地区	C－28	Ⅲ層	54.613	チャート	暗赤褐色	2.8	2.0	1.0	2.70	剥片から小剥片を剥取。原礫面が残る。
第36図 169	石核	C地区	D－29	Ⅳa層	54.423	チャート	灰色	4.7	3.4	0.2	32.80	不定形石核。平坦打面を形成。上・下・横から不規則に不定形の剥片を剥取。
第36図 170	石核	C地区	D－32	Ⅳa層	54.193	チャート	灰白色	4.1	2.2	1.9	11.78	小型の石核。平坦面から不定形剥片を剥取。
第36図 171	石核	D地区	D1トレ	表土層		チャート	暗赤褐色	4.6	2.4	1.5	35.90	残核。平坦面から剥取。剥取した平坦面からさらに剥片をとりだしている。
第37図 172	石核	B地区		表採		サヌカイト	黄褐色	8.2	4.9	2.0	101.92	偏平な不定形石核。主に両端から不定形剥片を剥取。
第37図 173	石核	B地区	N－17	Ⅱ層	55.698	チャート	黒褐色	9.4	5.5	5.0	175.12	上面の平坦面からと下方から剥離している。石質はよくない。
第37図 174	石核	B地区	K－19	Ⅱ層	55.533	チャート	暗青灰色	11.3	8.3	6.0	557.70	円礫の平坦面から不定形の剥片を数多く剥取している。他方向から不規則に打剥している。
第37図 175	石核	B地区	M－19	Ⅲ層	55.548	チャート	黒色	5.9	4.2	2.9	58.32	不定形石核、剥離方向は一定していない。横・下方からの剥離がある。
第38図 176	石核	B地区	N－19	Ⅲ層	55.478	頁岩	灰白色	8.2	5.6	2.7	97.10	不定形石核。自然平坦面から剥離。縦長の剥片を剥取。
第38図 177	石核	B地区	N－18	Ⅲ層	55.588	頁岩	暗緑灰色	6.0	4.5	4.2	138.79	平坦打面を作出した後縦長の剥片を剥取。原礫面が残る。
第38図 178	石核	C地区	F－31	Ⅳa層	54.253	頁岩	灰白色	7.2	5.0	3.7	122.30	不定形石核。平坦面から剥離。剥離でできた平坦面からさらに剥離。原礫面が一部残る。
第38図 179	磨石	A地区		表採		安山岩	灰黄色	9.6	8.7	4.6	234.00	片面は平たくなっている。敲打状の細かな割れがあり敲打器の可能性もある。
第38図 180	磨石	A地区		表採		安山岩	灰白色	7.8	7.1	3.9	543.45	凝灰岩質で表面は非常にもろい。気泡が多くはいっている。
第38図 181	磨石	C地区	D－30	Ⅳa層	54.353	安山岩	灰黄色	11.8	7.8	0.4	587.42	凝灰岩質で表面はザラザラしている。表面・裏面とも平たくなっている。擦痕がある。
第39図 182	石核	B地区		表土層		砂岩	灰白色	12.7	8.6	7.9	1249.92	平坦打面を作出したあと、上下から縦長の剥片を剥離。一部磨製を受けており、台石であった可能性大。
第39図 183	石核	B地区		表土層		砂岩	灰白色	20.0	15.1	5.9	1039.92	大型の不定形石核。幅広の剥片を剥取。打剥の方向の規則性はない。

註：色調については「新版標準土色帖」農林省農林水産技術会議事務局監修を参考とした。

第10表　出土遺物一覧表（162～183）

11. 使用痕のある剝片（084～109）

使用痕のある剝片として26点をとりあげた。A地区からの出土はなく、B地区11点、C地区14点、D地区1点である。

B地区（084～094）

B地区の11点は表土層から3点、Ⅲ層から2点、Ⅳ層から6点で、石材にはチャート、黒曜石、頁岩が使われている。ほとんどが縦長の剝片が素材で縁辺の鋭い部位を刃部としており、いずれにしても細かな使用痕が認められる。

C地区（095～108）

C地区の14点はⅡ層から8点、Ⅲ層から3点、Ⅳ層から3点で、石材にはチャート、黒曜石、安山岩が使われている。縦長の剝片が多い。

D地区（109）

表土層から1点出土したもので、不定形の剝片の縁辺に使用痕が認められる。石材はチャートである。

12. 剝片、砕片（110～143）

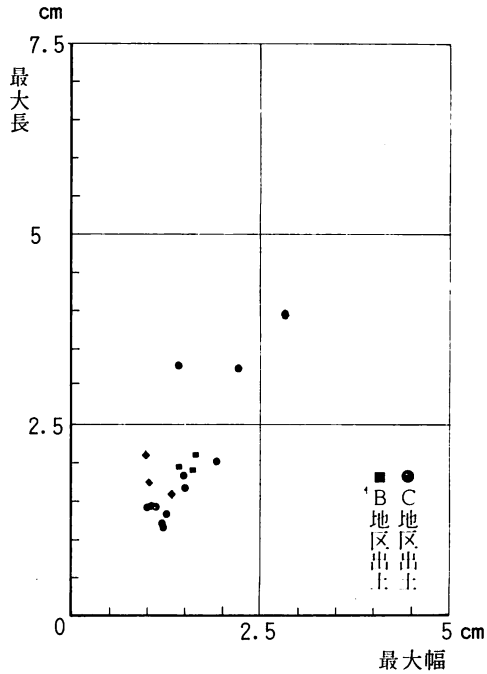
剝片、砕片として34点をとり上げた。B地区22点、C地区12点である。

B地区（110～131）

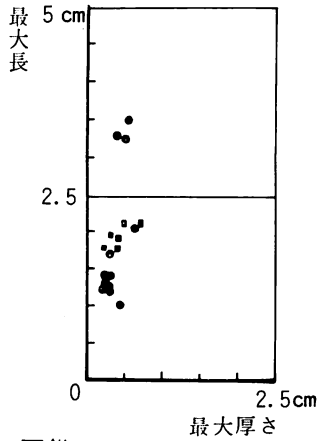
B地区の22点は表採および表土層から5点、Ⅱ層2点、Ⅲ層10点、Ⅳ層5点で、石材にはチャート、頁岩、統紋岩、黒曜石、サヌカイト、安山岩、黄緑凝灰岩がある。表採、表土層から出土したものの中には（110)のようなサヌカイトの大型の縦長剝片も見られる。Ⅲ層では(120)は小型の縦長剝片で細石刃よりいく分大きめである。Ⅳ層では（131)が最も整った形を呈している。石材は黄緑凝灰岩で表面の風化が非常に進んでおり、平坦打面から剝取された縦長剝片であり、横断面は三角形を呈する。Ⅳb層から出土しており先土器時代の遺物であろう。

C地区（132～143）

C地区の11点は、表土層から1点、Ⅱ層から



第38図　石鏃の最大長さと幅



第39図　石鏃の最大長さと厚さ

6点、Ⅲ層から3点、Ⅳ層から2点で、石材には、チャート、サヌカイト、黒曜石がある。ほとんどが不定形の剝片である。(140)は大型の剝片で縁辺は鋭く、側縁に使用痕らしきものがみられる。Ⅳ層から2点（142・143）出土しているが小剝片で使用痕は見られない。

13. 石　　鏃（144～163）

石鏃として20点をとりあげた。B地区は表土層だけから5点、C地区は表土層4点、Ⅱ層8点、Ⅲ層1点、Ⅳ層3点で、石材にはチャート、黒曜石、安山岩、サヌカイトが用いられている。形状は二等辺三角形に近く脚の抉りが顕著でないもの 144·147·148·149·151·160·163)、二等辺三角形を基調として脚の抉りがあるもの（145·146·150·154·155·157·158·159)、胴部が非常に長いもの（153)、小型で正方形を基調とするもの（152·156·162)、五角形に近いもの(161)などに大きく分けることができよう。

14 石　　核（164～178、182・183）

石核として14点をとり上げた。B地区から8点、C地区から8点、D地区から1点が出土しており、石材にはチャート、頁岩、砂岩、黄緑凝灰岩、サヌカイトが用いられている。

B地区の8点は、表採および表土層から3点、Ⅱ層2点、Ⅲ層3点、Ⅳ層1点である。C地区の8点はⅡ層3点、Ⅲ層1点、Ⅳ層4点である。

D地区の1点はD－1トレンチの表土層からの出土である。

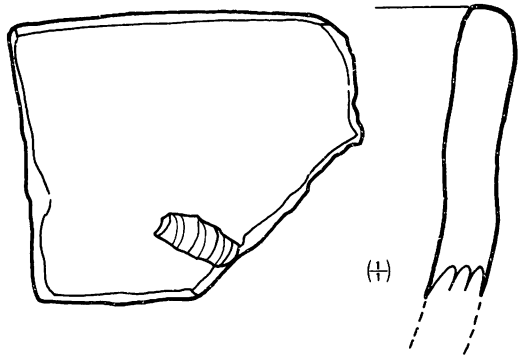
17点の石核は自然礫の平坦面を打面として剝片を剝離した（164·170)、自然礫を半割し平坦打面を作り出したあと、剝片を剝離したもの（173·175·183)、自然平坦面や自然礫を半割し作り出した平坦面から剝片を剝離し、さらに打面転位を行ったり、新たに平坦面を作り出しながら剝離を行ったもの（165·174·176·177·178）、厚手の剝片から小剝片を剝離したもの（166・167·168·169·171）などに分けることができる。(174)は礫器としての可能性もある。(182·183)は非常に大型のもので、台石を転用したものと思われる。

15 磨　　石（179～181）

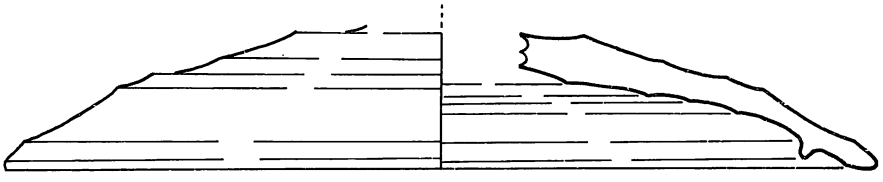
3点の磨石はA地区から2点、C地区から1点出土しており、石材はいずれも安山岩である。形状は円形（179·180）と小判形（181）を呈する。表面は非常にもろくざらざらとしている。

16. 土　　器

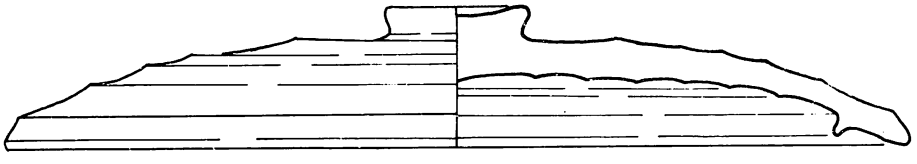
A～D地区に出土した土器には縄文時代、奈良時代と中世のものとが見られ、縄文時代の土器には早期の押型文土器がある。いずれも細片で、表面の磨滅が進んでいるため、復原や実測・拓本に耐えないが、出土時に山形の押型文様を確認している。縄文時代のこのほかの



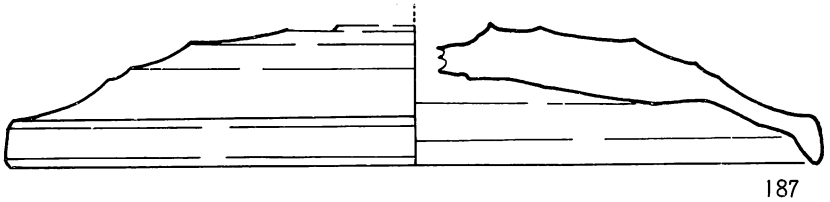
184



185



186

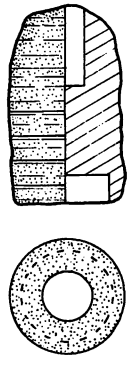


187

第40図　土器実測図

表11　各地区別土器出土数一欄表

地区	層位	押型	須恵	土師質土器	土師	青磁	磁器	瓦質土器
A地区	表採		1					
	表土層		1					
	Ⅱ							
	Ⅲ							
	計		2					
B地区	表採	1	2		1		1	
	表土層	4	4		2	1	2	1
	Ⅱ	4	2					
	Ⅲ		1					
	Ⅳ	5						
	計	14	9		3	1	3	1
C地区	表土層		11		6	1	9	1
	Ⅱ	13	46		7	6	3	3
	Ⅲ	7	9		4		1	
	Ⅳ	8	2	1	1		1	
	計	28	68	1	18	7	14	4
総計		42	79	1	21	8	17	5



(1/1)

第41図　その他の遺物実測図

時期の土器は出土していない。なお、第40図 184に示す土器は、表面が磨滅しており、文様の確認はできないが、口縁部片で色調は黄褐色を呈し、砂粒混じりの胎土などから押型文土器とみることができる。胎土中に細石刃を含んだ珍しい資料である。細石刃は黒曜石で長さ11mm×幅5mm厚さ1mmを計る。

なお、遺物の水平・垂直分布図や土器出土数一覧表に押型としている土器は文様の確認ができていない小破片がほとんどであるが、一応すべて押型文土器とした。

弥生～古墳時代の遺物はなく奈良時代の須恵器の蓋3点が出土している。これ以降では中世の糸切底や青磁の細片が出土している。

17　その他の遺物

B地区の表土層から2点の弾が出土している。左図に示すものは鉛製で、高さ2.6cm、胴部1.5cm重さ28g である。頭部と底部に空洞がある。他の一点はいびつに変形している。

明治10年の西南戦争の時、氷川を挟み戦いがあったと伝えられ、その際に官軍が放った弾と思われる。

第Ⅵ章　考　　察

1　先土器時代・縄文時代遺物の分離

〔Ａ地区〕

遺物はⅠ・Ⅱ層から出土しているが、Ⅲ層以下には見られなかった。土器は縄文時代押型文相当土器の細片と奈良時代の須恵器の蓋とがある。Ａ地区を含め、今回の調査地で出土した縄文時代の土器は、押型文土器、もしくはこの時期に相当するものに限定でき、縄文時代に関しては、一時期と考えてよく、出土した２点の石器もこれらの土器に共伴するものと考えることができよう。以上の結果、遺物から見る限りＡ地区については縄文早期と奈良時代の二時期に大きく分かつことができよう。

〔Ｂ地区〕

各層から多くの遺物が出土しているが、その中でⅠ～Ⅲ層は各時代の遺物が混在している。ナイフ型石器については、土器との共伴例はなく先土器時代の遺物とすることができよう。細石核、細石刃については土器と共伴する例も知られているが、押型文土器に伴う例はなく、先土器時代の遺物としての可能性が強いといえよう。[註1] このほかでは、掻・削器や二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、それに石核などに先土器時代の石器としての可能性を強く秘めたものが見られるが、石器の典型的な形態や製作技術、それに層位的な裏づけに乏しく、断定をなすまでに至らない。逆に縄文時代の遺物としては、押型文土器片や石鏃があげられよう。彫器は縄文時代前期、塞ノ神武土器に伴って出土した例もあり、石材がチャートで、不定形の剥片を用いていることなどの共通点もあり、縄文時代の可能性が強い。[註2]

Ⅳ層から出土した石器は、掻・削器、使用痕のある剥片、剥片、石核がある。石核は一部に自然面を残した良質の頁岩で、平坦面を打面として、縦長および横長の剥片を剥離し、剥離してできた平坦な剥離面はさらに打面として、次の剥離を行っている。打面とする適当な平坦面がない場合には打面調整のための剥離を施し、数多くの剥片をとりだしており、剥離を終えた形状は三角錐状を呈している。以上のような特徴は先土器時代の遺物として捉えることに充分である。

このように見てくるとⅢ層は基本的には縄文時代早期の包含層で、先土器時代や後世の遺物が混入したものと捉えることができよう。Ⅳ層は先土器時代遺物の包含層で、上からの混じり込みがあるものといえよう。

〔Ｃ地区〕

Ⅰ・Ⅱ層から出土した遺物の中では尖頭器５点や石鏃12点などが注目される。Ⅲ層から出土した尖頭器（007）は基部を欠失しているが、両面から粗い剥離を施し先端を尖らしたものでⅣ層から出土した（013）も同じ特徴を有している。いずれも先土器時代の尖頭器に見られるよう

な端正な形態、製作技術を有しておらず、縄文時代の尖頭器と見るのが妥当であろう。掻器・削器についても、不定形の剝片の縁辺に刃部加工を施したものがほとんどであり、各石器ごとに時代的分離をすることは困難である。

Ⅳ層では細石刃として２点（005・006）をとり上げたが、双方とも幅が広く、(006) は石質が安山岩で断面が三角形を呈すること、また細石核の出土がないことなどから、細石刃として最終的に認定することには抵抗が多い状態である。一方、石核は良質の頁岩で、平坦打面から縦長および横長の剝片を剝離し、剝離してできた平坦画をさらに打面として剝離を行っており、剝離を終えた形状はほぼ直方体状にあり、Ｂ地区Ⅲ・Ⅳ層出土の石核に非常に類似している。先土器時代の石核と考えて充分であろう。

以上のことからＢ地区と同じく基本的にはⅢ層は縄文早期、Ⅳ層は先土器時代の包含層といえよう。

註１　鈴　木　重　治　「宮崎県岩土原遺跡の調査」石器時代No.10　1973
　　池　水　寛　治　「鹿児島県出水市上場遺跡」考古学集刊３－４　1967
　　鎌木義昌・芹沢長介「長崎県福井岩陰」考古学集刊３－１　1965
註２　江本　直「第一調査区発見の石器」『櫛島遺跡』熊本県文化財調査報告第18集　1975

表12　器種別出土一覧表

遺跡名	所在地	石器器種													備考	文献
		礫器	尖頭器	石鏃	剝片石器	掻器	石匙	石錐	石核	磨石	石皿	台石	凹石	石斧		
柿迫	阿蘇郡高森町芹口			○	○											①
下城	阿蘇郡小国町下城			○	○	○			○							②
谷頭	阿蘇郡西原村河原	○													轟B式	③
牟田原	菊池郡大津町矢護川			○	○											④
中後迫	菊池郡大津町古城	○	○	○	○	○?				○	○	○	○	○		⑤
カブト山	熊本市黒髪町宇留毛			○						○				○		⑥
沈目	下益城郡城南町沈目	○				○			○							⑦
沈目立山	下益城郡城南町沈目	○													撚糸・塞ノ神	⑧
塚原	下益城郡城南町塚原					○			○						円筒・塞ノ神	⑨
尾窪	下益城郡城南町尾窪				○	○									円筒	⑩
古俣山	下益城郡松橋町古保山		○	○			○									⑪
平原瓦窯址	八代郡宮原町平原			○	○	○										
立神ドトク	八代郡宮原町立神		○	○	○	○		○	○	○	○?					
五ツ穴横穴群	八代郡宮原町立神	○	○	○	○	○	○			○	○				撚糸・円筒・轟	⑫

2　先土器時代の遺物

別府大学文学部　橘　昌信

立神ドトク遺跡の先土器時代の遺物として認定し得るものは極端に少なく、僅にC地区Ⅲ層出土のナイフ形石器1点とB地区表土層、ならびにⅡ層から出土している2点の細石核、それにC地区Ⅳ層出土の3点の細石刃と考えられるものくらいである。この他、石核、掻器、削器、あるいは使用痕のある剝片として分類した石器の一部が旧石器時代の所産として想定されよう。これらの石器のうち、ナイフ形石器および細石核・細石刃について若干の考察を試みることにしたい。

ナイフ形石器

1点のみであるが、形態的に極て特徴のあるナイフ形石器である。すなわち極端に小形で、完形品でありながらその最大長は2.2cm、最大幅0.9cmで、厚さは特に薄手で僅ずか0.3cm、重さもやはり軽く0.42g という値が示されている。素材には形の整った薄手の縦長剝片を用い、打面側とその逆の両端を斜めに切断するようなブランティング加工によって整形されている。

九州地方では西北九州一帯をはじめとして数多くのナイフ形石器出土の遺跡が周知されており、しかもそれらの諸遺跡においては、全長が4cmに満たない、いわゆる「小型ナイフ形石器」が卓越している。当遺跡出土のナイフ形石器はそれよりもさらに小型である。九州地方の小型のナイフ形石器が、細石器として、すなわち組み合わせ石器として規定されるためには今後の整理、分析を待たなければならないであろうが、当遺跡出土のナイフ形石器の大きさ、特に極端な薄さおよび軽さのみを問題にすれば、一般的な細石刃のそれと正に符号し、文字どおり細石器と呼ぶのにふさわしい石器である。

立神ドトク遺跡出土の小型のナイフ形石器と同様な出土例は九州地方において必ずしも多くないようであるが、熊本との県境近くに所在する鹿児島県上場遺跡[註1]、佐賀県生石遺跡[註2]のナイフ形石器の中に極似したものを認ることができる。この他、熊本県の石飛遺跡、下城遺跡[註3]、宮崎県船野遺跡第1地点[註4]、大分県今峠遺跡[註5]、福岡県の野黒坂および峠山[註6]の両遺跡、それに佐賀県原遺跡[註7]、長野県堂崎遺跡[註8]などにおいて、比較的類似した大きさを有する小型のナイフ形石器が出土している。

極めて小型のナイフ形石器を出土している上記の諸遺跡の大半では、台形石器ないしは台形様石器を伴なっており、また細石核・細石刃の共伴が示唆されているという共通した要素が抽出できるようである。これらの事から予想されることとして、3cmに満たないような小型のナイフ形石器は何らかの形で細石刃と深く関連することが窺え、しかもその事はそのまま、小型のナイフ形石器の使用法およびその時期についての一つの暗示を与えるものと解釈されよう。

細石核・細石刃

細石核として分類した器種は2点存在し、チャートを石材にしている点では共通するものの、大きさ・形態では著しく異なっている。1点の（002)比較的扁平な角礫状のチャートを素材に、一側面は平坦な節理面を打面に用い、縦方向からの打剝によって側面調整が施され、一方の側面は両端二方向からの大きな剝離面によって調整されている。細石刃の剝離は一端に想定され、そのための準備としての剝離が打面とは逆の方向から行なわれている。本格的な細石刃の剝離作業に入っていない段階の細石核と考えられる。全体的な形状では側面観および正面観はともにほぼ長方形を呈している。他方、(003)の細石核はやや厚味のある剝片を素材に用いており、剝離した主要剝離面を一方の側面としてそのまま利用し、もう一方の側面は上端からの不規則な剝離によって整えられている。なお打面は横方向からの一回の大きな剝離面によって形成されており、細石刃の剝離面は小口にあたる一端に認られる。側面観は逆台形に近く、正面および上面観は細長い三角形を呈している。

この二点が当遺跡出土の細石核であるが、いずれも現在九州においてみられる細石核の典型的なタイプとは言い難く、しかも僅か2点でそれに形態的にも技術的にも異なっており、両者の関連や九州における細石核の中での位置づけについては速断をしかねる資料と言えよう。

現時点で九州地方において細石核を出土している遺跡は既に150ケ所を越えており、西九州を中心に九州全域に広く認められ、極めて普遍的な存在と見なされる。細石核・細石刃によって特徴づけられている九州地方の細石器文化は、共伴する遺物のあり方一つを取上げてみても複雑な様相を呈している。すなわち、一方で土器や石鏃との共存から縄文文化との関連が想起され、片方では先行すると考えられているナイフ形石器や台形石器との密接な関係が示唆されているのである。それに細石核・細石刃のみの単純な石器組成を示す遺跡も存在するという状況である。

さらに、細石器文化の時間的および空間的な把握を行なう上での主要なメルクマールとされる細石核についても、形態・技術・石材などにバリエィションが看取でき、既に幾人かの先学によって分析が試みられており、今後さらに多角的な研究が必要とされるであろう。いずれにしても九州の細石核は九州内[註9]の各地域によって、地方色の濃い様相が予想されるため、立神ドトク遺跡出土の細石核についてもそのような視点に立って資料分析が行われなければならないであろう。

一方、当遺跡においてやや明確さを欠く資料であるが、細石核と考られる石器が3点出土している。石材は黒曜石・サヌカイト・安山岩とそれぞれ異なっており、チャート製の細石核が出土しているにもかかわらず、それを用いたものが出土していないのである。黒曜石製の細石刃は別にしても、サヌカイト・安山岩は細石核の石材としては普遍的なものと考え難いだけに、石材面での検討の余地が残されている。ただ、3点の石器の側辺に沿って使用によると推定される痕跡の存在から細石刃としての可能性も考えられよう。

以上の様にナイフ形石器と細石核・細石刃と認定したものが先土器時代の所産として挙げることができよう。極端に少ない点数で、しかも層位的な出土状況も明確さを欠いており、決して恵まれた好資料とは言えない。しかしながら、当遺跡の先土器時代の遺物は九州における細石器文化の一面、すなわち、細石核・細石刃とナイフ型石器の共伴と、さらに小型のナイフ形石器の一部が細石器として把握さる得る可能性を示唆している点で大きな意味を持っていると言えよう。

註1　池水寛治　「鹿児島県上場遺跡発見の住居址」鹿児島考古第9号　1974
註2　堀川義英　「生石遺跡」佐賀県文化財調査報告書第43集　1978
註3　緒方勉・田中寿夫　「下城遺跡Ⅰ」熊本県文化財調査報告第37集　1979
註4　橘　昌信　「宮崎県船野遺跡における細石器文化」考古学論叢3　1975
註5　橘　昌信　「大野川中流域における旧石器時代研究の基礎調査1—今峠遺跡」　別府大学博物館研究報告　No.2　1978
註6　橘　昌信・他　「峠山遺跡」福岡県文化財調査報告書　第51集　1973
註7　杉原荘介・戸沢充則「佐賀県原遺跡における細石器文化の様相」考古学集刊　第4巻第4号　1971
註8　清水宗昭・他　「堂崎遺跡調査報告書」長崎県文化財調査報告　第10集　1971
註9　麻生　優　「細石器文化」日本の考古学Ⅰ　1965
　　小林達雄　「日本列島に於ける細石刃インタストリー」物質文化　16　1970
　　鈴木忠司　「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化」　古代文化　23—8　1971
　　橘　昌信　「九州における細石器文化」考古学論叢1　1973

3　押型文土器に伴う石器について

熊本県内で発掘調査が実施された中で、押型文土器に伴うと考えられる石器が出土した遺跡をまとめた一覧表は第12表のとおりである。押型文土器は塞ノ神式や円筒形土器と一緒に出土する例が多い。これらの土器が一緒に出土した場合は備考欄に型式名を記した。

礫器は谷頭、中後迫、沈目、沈目立山遺跡などから出土している。この中で谷頭、沈目立山遺跡の場合は、塞ノ神式や轟式土器の出土があり、確実に押型文土器に伴うものであるといいきれないところがある。しかし、中後迫の場合、層的に塞ノ神式土器と押型文土器の出土層とが明確に分離できる状態の中で、下層から押型文土器に伴って出土している。さらに沈目遺跡の場合も第Ⅳ層（黒褐色粘質土層）から単独に押型文土器に伴って出土している。[註1] これらのことは押型文土器に礫器が伴うことを明らかにしているといえよう。石材には頁岩、輝緑凝灰岩、安山岩等が用いられ、原礫面を多く残し、不定形な剥離を施こし刃部を形成したものが多い。

尖頭器はチャートやサヌカイトの厚手の剥片を素材としたもので、三角形を呈した小型のものが多く、先端は尖がらしているが幅広で、最大幅は基部近くにあり、逆刺や舌部をもうけたものは見られない。

石鏃は8ケ所の遺跡から出土している。いわゆる鍬形鏃や三角鏃がほとんどである。本遺跡では、非常に小さな石鏃があり、一部磨製を施したと思われるものも出土している。鍬形鏃の非常に大きなものと、この極端に小さな石鏃とが一緒に出土しており、一つの特色をなしてい

る。

掻器も出土数が多い。不定形の剝片の縁辺に刃部加工を施したものがほとんどで、サイドスクレーパーが最も多い。

石匙は古保山遺跡と五ツ穴横穴群から出土している。中後迫遺跡から出土した石器の中で、スクレーパーとして報告されているものはツマミが施されており、石匙の可能性があろう。

また、五ツ穴横穴群から2点出土しているが、出土したところが古墳の墳丘の封土と周溝[註2]の溝の中からのもので、押型文土器のほか円筒土器や轟式土器の出土もあることから押型文土器に伴うものかどうか[註3]疑わしい。以上のように石匙が押型文土器に確実に伴うものかどうかは今後の資料の増加をまたねばならない。

石錐の出土は本遺跡だけであるが、中後迫の2点にも押型文土器に伴う可能性がもたれる。

このほかでは、石核、磨石、石皿、台石、凹石、石斧などがわずかに出土している。

以上のように県内の場合、押型文土器に伴う石器の器種としては、礫器、尖頭器、石鏃、剝剝片石器、掻器、石錐、石核、磨石、石皿、台石、凹石、石斧をあげることができよう。

礫器[註4]は押型文土器に限らず縄文時代に普遍的に出土する石器である。狩猟具として尖頭器、石鏃とがあるが、尖頭器の場合、先土器時代からひきつがれるような端正な形態を持つものはなく、狩猟具としての主体的位置を石鏃にとってかわられていることが示されよう。石鏃には鍬形鏃と三角鏃とともに小型石鏃が見られる。この小型石鏃は押型文土器よりも古い時期に出土する傾向が指摘されているが、県内の場合、押型文土器よりも古いとされる土器の出土が少なく今後に残された問題である。[註5]

掻器が普遍的に出土することはよく知られていることであるが、石匙が共伴するか否かについては定かにしえない。稲荷山遺跡や二日市洞穴など伴わない例があるが、県内の場合、二遺跡から出土している。二遺跡とも[註6]確実に押型文土器[註7]に伴うということはいえない状況であるが、仮に押型文土器に伴わないとしても、共に出土している土器は、円筒土器、塞ノ神式土器、轟式土器で石匙の出現時期については押型文土器と大きな時期差はないものと思われる。

剝片石器はほとんどの遺跡から出土しており、生活具として最も普遍的に用いられたもので、磨石・石皿・石斧なども今後出土例が増えていくに違いない。　　（江　本）

文　献

①松　本　健　郎　『生産遺跡基本調査報告書Ⅰ』熊本県文化財調査報告第38集　熊本県教育委員会　1979
②緒方勉・田中寿夫　『下城遺跡Ⅰ』熊本県文化財報告第37集　熊本県教育委員会　1979
③松村道博・勢田広行他　『谷頭遺跡』谷頭遺跡調査団　1978
④富　田　紘　一　他　県指定資料
⑤松村道博・勢田広行他　『中後迫遺跡調査報告』中後迫遺跡調査団　1978
⑥東光彦・平岡勝昭他　「カブト山遺跡」『熊本市文化財調査報告書Ⅱ北部地区』　熊本市文化財調査会　1969
⑦江　本　　直　『沈目』　熊本県文化財調査報告第13集　熊本県教育委員会　1974
⑧緒　方　　勉　『沈目立山』熊本県文化財調査報告第26集　熊本県教育委員会　1977

⑨江　本　　直他　『塚原』熊本県文化財調査報告第16集　熊本県教育委員会　1975
⑩高木正文・江本直他　『尾窪』熊本県文化財調査報告第12集　熊本県教育委員会　1973
⑪昭和47年、熊本県教育委員会が発掘調査を実施。
⑫村井真輝・下村悟史・豊崎晃一他『五ツ穴横穴群』熊本県文化財調査報告第34集　熊本県教育委員会　1979
⑬昭和51、52年熊本県教育委員会が発掘調査を実施。昭和54年度報告書刊行予定。

註

註1　文献⑤　勢田広行氏教示。
註2　文献⑤
註3　文献⑫　村井真輝氏教示。
註4　二次加工のある剝片と使用痕のある剝片。
註5　橘　　昌　信　『大分県九重町二日市洞穴の調査』九重町文化財調査報告第2号　九重町教育委員会　1978
註6　賀川光夫・橘昌信他　『稲荷山遺跡緊急発掘調査』　大分県文化財調査報告第20・21合号　大分県教育委員会　1967
註7　註5に同じ

第Ⅶ章　まとめ

立神ドトク遺跡は九州縦貫自動車道の建設に伴い事前に発掘調査を実施したものである。当初、日本道路公団によって「松橋―八代」間のルートが決定されたあと、埋蔵文化財の有無の確認のための調査を行った。調査員が現地を踏査した結果、付近は「ドトク」と呼称されており「道徳」「堂床」に関係するもの、すなわち、寺院址が存在するのではないかと考えられた。事実、表面採集遺物の中に青磁片や土師器片があることから、寺院址としての可能性が強まり、発掘調査が必要であり、遺跡名も立神寺院址とされた。

発掘調査は昭和51年５月から実施したが、表土剝ぎ作業を進めると、出土する遺物は、寺院址に関係するものよりも、縄文時代早期の押型文土器やこの土器に共伴すると見られる石鏃や掻器、それに先土器時代としての可能性が強い剝片などの遺物が出土し、調査は、寺院址よりむしろ、先土器時代と縄文時代を中心として進めていくことになった。結果的に寺院址の存在は確認できず遺跡名も「立神寺院址」から「立神ドトク遺跡」に変更することとした。

八代平野は不知火海に面した広大な沖積平野であるが、東をさえぎる九州山地から砂川・氷川・球磨川が運ぶ多量の土砂によって形成されたものである。本遺跡が所在する丘陵は氷川の右岸にあたり、九州山脈の西端、平野部と境する位置にある。ちなみに、海抜は約55～58.5mで宮原花崗閃緑岩が基盤岩となり、不整合に礫層が覆い、その上位に阿蘇Ⅲ期と考えられる黒色溶結凝灰岩が重なっている。さらに砂礫層をはさみ阿蘇Ⅳ期火砕流堆積物と考えられる軽石凝灰岩があり、上位に褐色粘土火山灰が認められる。

周辺には砂川、氷川、球磨川がもたらす肥沃な水田地を生産基盤として、著名な野津古墳群が所在し、県下最大の古墳群を形成している。古く、明治12年E.S.モースが発掘調査を手がけた大野貝塚（中期南福寺式）があり、西平貝塚（後期西平式）、四ツ江貝塚、有佐貝塚（後期出水式）などの縄文時代の著名な貝塚も周辺に所在している。

本遺跡での押型文土器の確認は、従来、八代地方でよく知られていなかった縄文早期遺跡の存在を明らかにすることができた。また九州縦貫自動車道建設に関する発掘調査によって、近くの五ツ穴横穴群、平原瓦窯址群からも出土しており、丘陵にそって今後さらに発見される可能性を強く示唆している。また、先土器時代の遺物も八代地方では全く知られておらず、県下の主な遺跡を上げると、鹿本郡鹿北町柿原遺跡、菊池郡七城町小野崎遺跡、阿蘇郡西原町土橋遺跡、熊本市柿原遺跡、上益城郡甲佐町大峯遺跡、上益城郡御船町小坂西遺跡、下益城郡豊野村山崎遺跡・水俣市石坂石飛遺跡などが知られ、八代地方はいわば空白地となっていた。しかしながら縄文早期遺跡と同じく、五ツ穴横穴群、平原瓦窯址群から先土器時代の遺物が出土しており、今後この地方において、先土器時代の遺跡が増加する端緒となろう。

本遺跡の層位は、第Ⅰ層表土層（耕作土）、第Ⅱ層淡黄褐色土層、第Ⅲ層明褐色粘質土層、第

Ⅳ層赤褐色粘質土層、第Ⅳ′期黄褐色粘質土層に分けた。県下の広い地域に見られる黒色土Ⅰは認められない。第Ⅱ層は沖積火山灰土でアカホヤに相当すると見ることができよう。同じく第Ⅲ層は、沖積火山灰土で暗褐色粘質土層であることから熊本市周辺沖積火山灰土にいう黒色土Ⅱに比定できよう。第Ⅳ層は赤褐色粘質土層で下位は黄褐色粘質土層となり第Ⅳ′層とした。第Ⅳ・Ⅳ′層は洪積世火山灰阿蘇新期ロームAsoⅣと考えている。

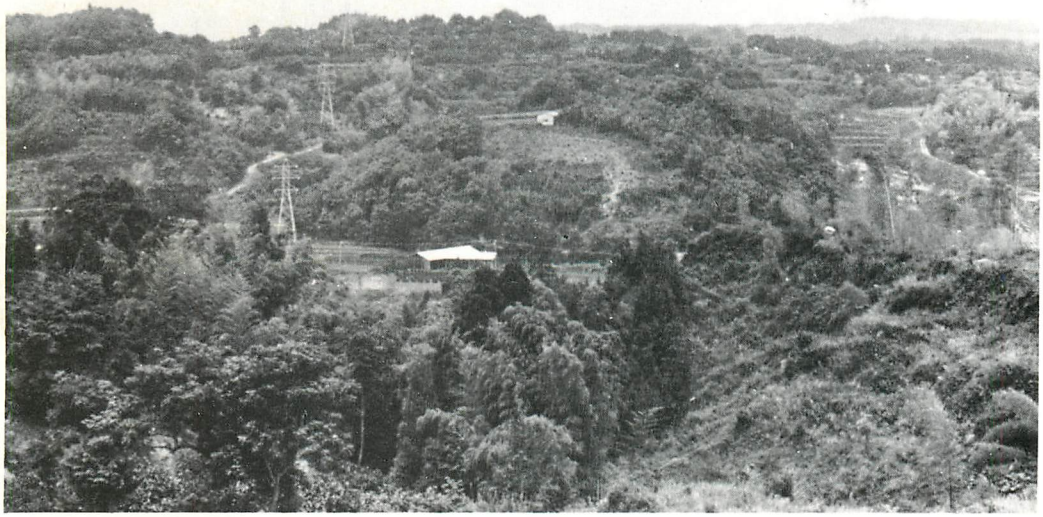
県内の他地域の出土状態から見るとⅡ層は縄文前期から晩期、Ⅲ層は縄文早期から前期でⅣ層以下を先土器時代の遺物の包含層と考えることができる。本遺跡の出土状態を見ると基本的にはこの層序での出土状態を示している。しかし、長い年間に亘る開墾や耕作のため、攪乱や混入が多く生じており、一部Ⅳ層にも土器片が混入しているような状況であった。遺物は必ずしも層位で分けられるようにすんなりとした分離はむずかしい状態であった。

そのような中で、前章の1で、先土器時代と縄文時代の遺物とを出土層を前提として可能なかぎりの分離を行った。先土器時代の遺物としてナイフ形石器、細石核、細石刃、石核などを上げることができようが、量的に極めて少ない。先土器時代の石器としてとり上げなかったものの中にも、先土器時代の石器が必ずや含まれていると思われるが、的確に振り分けることができなかった。このことは、両者の石器に形態・技術的に大きな違いがなかったこと、すなわち、時間的にも近い位置にあることを暗に示しているといえよう。

さて、先土器時代のナイフ形石器は、非常に小さく細石器とされよう。台形石器、細石核、細石刃との共伴関係の追求など今回の調査では明確になし得ない問題を含んでいる。

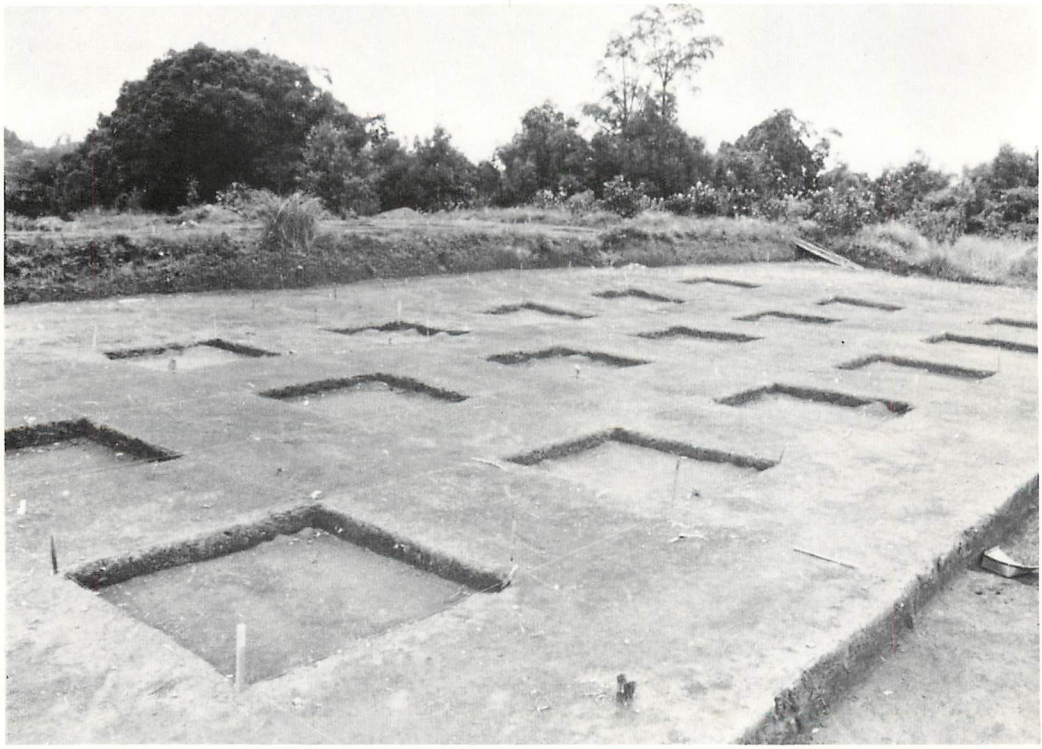
縄文時代の土器は押型文土器と文様のはっきりしない無文土器があり、胎土や焼成からみて、無文土器も押型文土器に相当するものと判断できた。このほかの時期の縄文土器は認められないことから、出土した石器は先土器時代のものを除き、押型文土器に伴うものと思われる。石器の器種には礫器、尖頭器、石鏃、剝片石器、掻器、錐器、石核、磨石、石皿があり、彫器が伴うことも予察としておきたい。

図　　版



上：調査地遠景

下：調査風景（B地区表土剝ぎ作業）

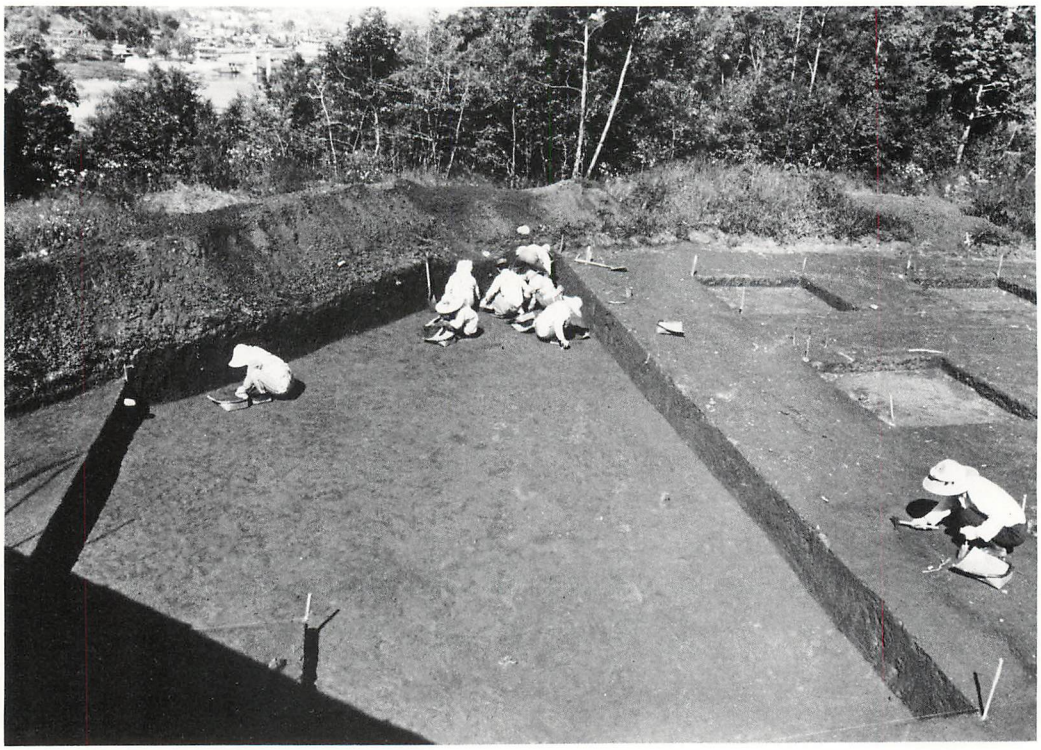


上：調査風景（B地区表土剝ぎ作業）　　下：B地区（西側から）

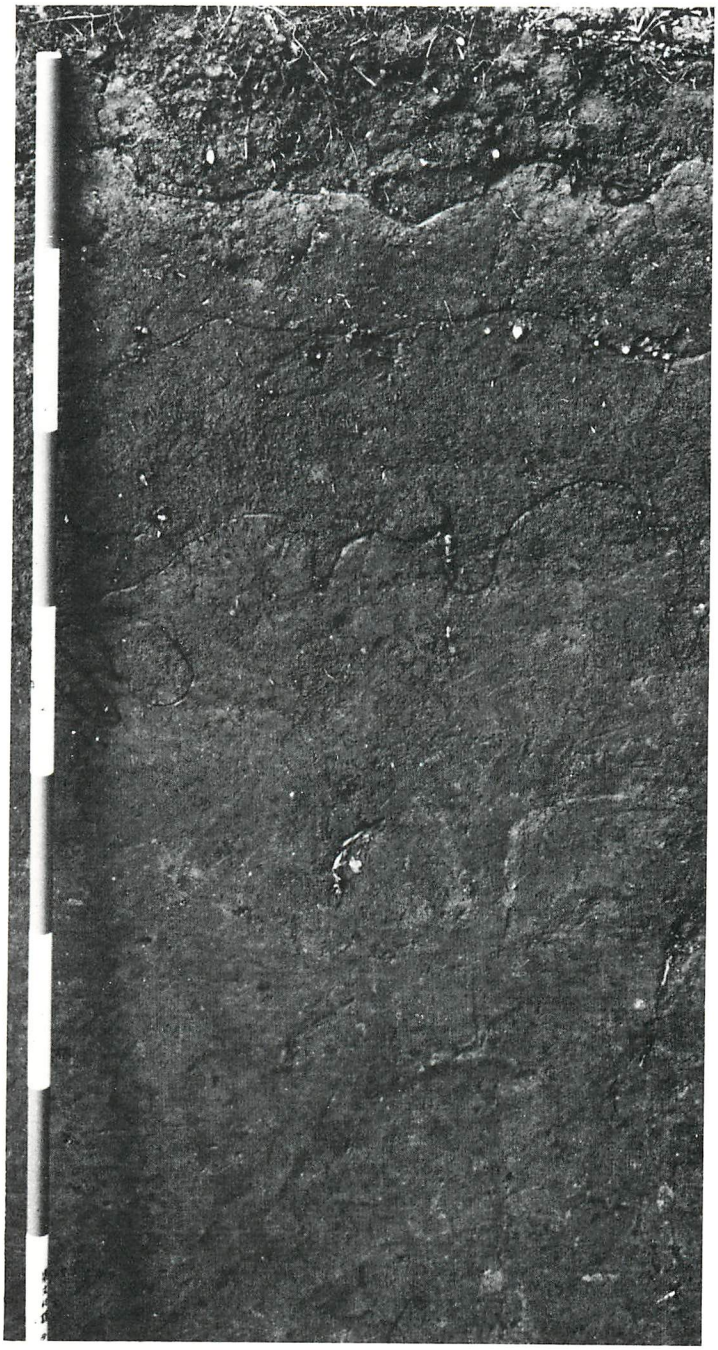
図版 3

上：調査風景（C地区表土剝ぎ作業）　　下：調査風景（Ⅳ層の掘り込み）

図版 4

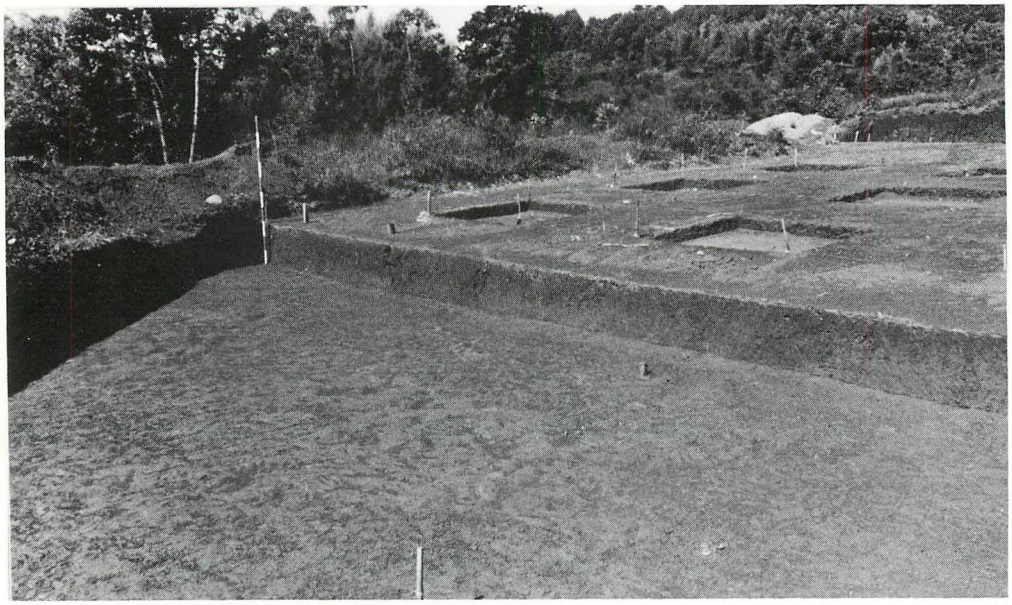


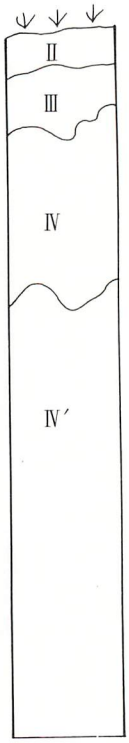
上：調査風景（B地区Ⅳ層）　　下：グリッド状況（上方A地区・下方B地区）



土　層（B－1トレンチ北側壁面）

図版 6

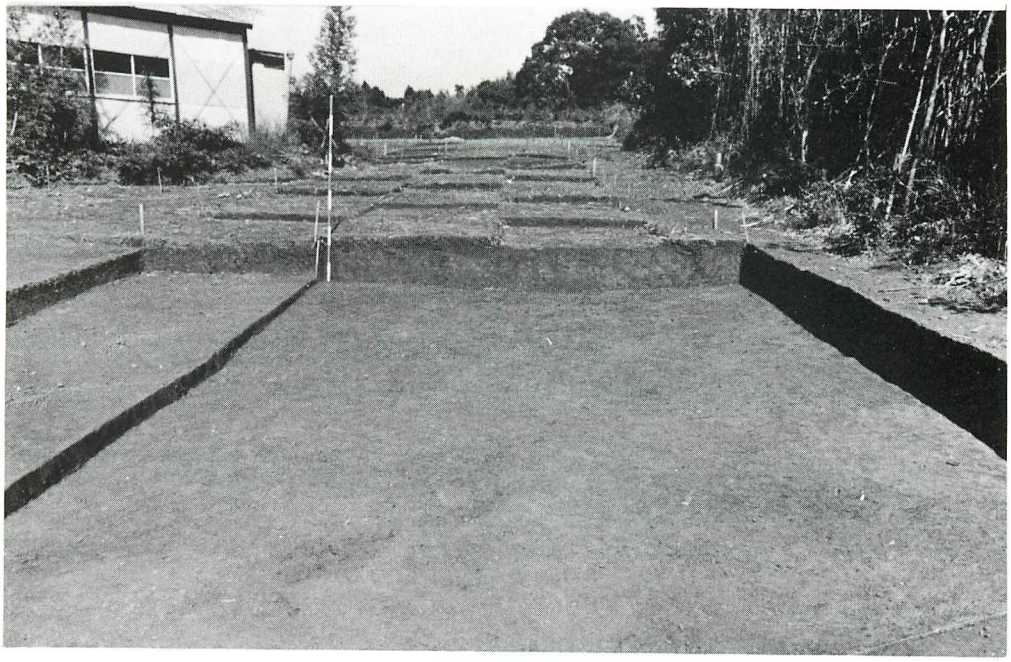


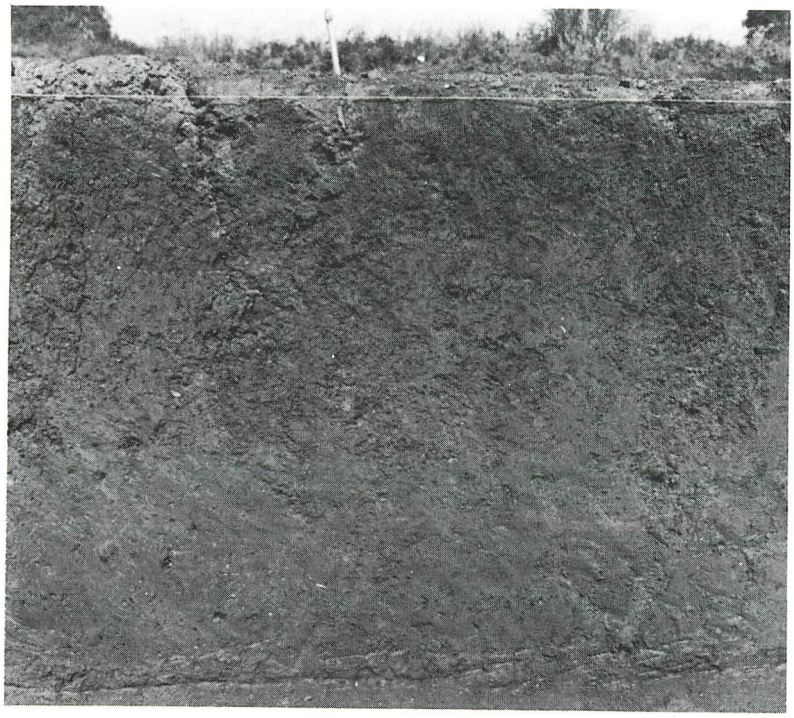


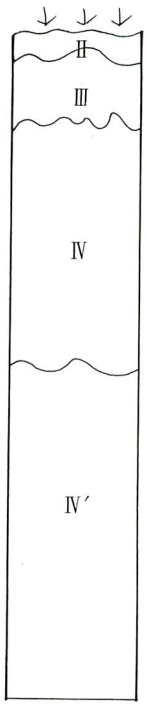
上：B地区調査終了状況

下：土層（B地区北側壁面）

図版 7



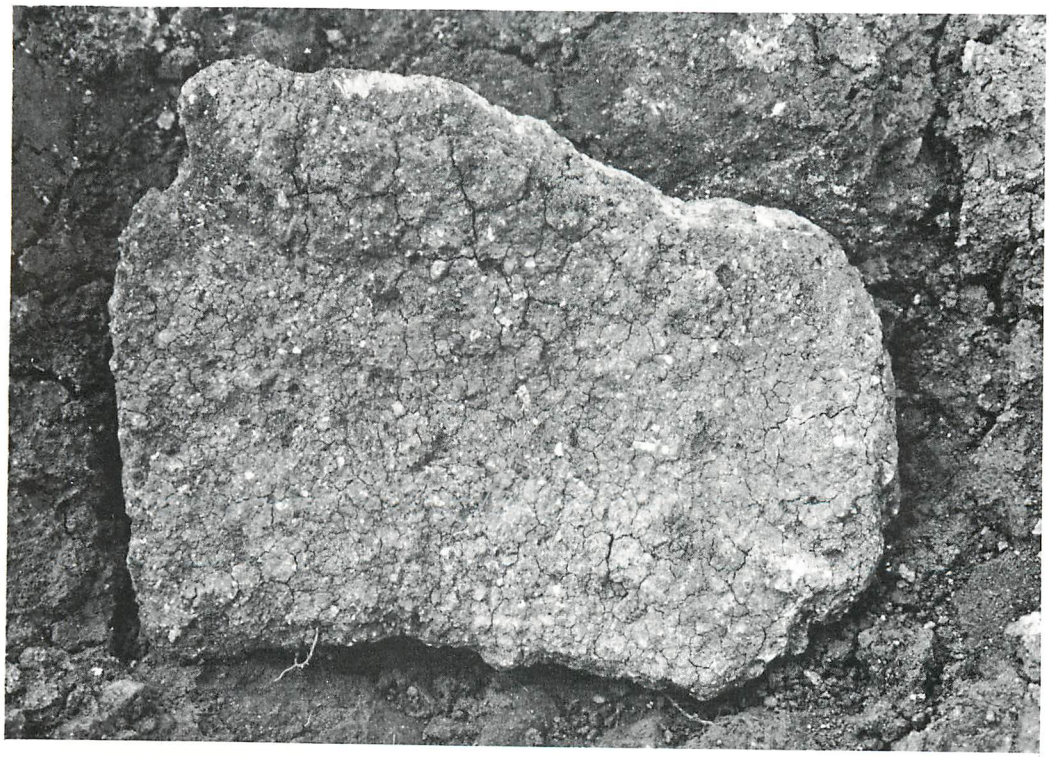




上：C地区調査終了状況

下：土層（C地区北側壁面）

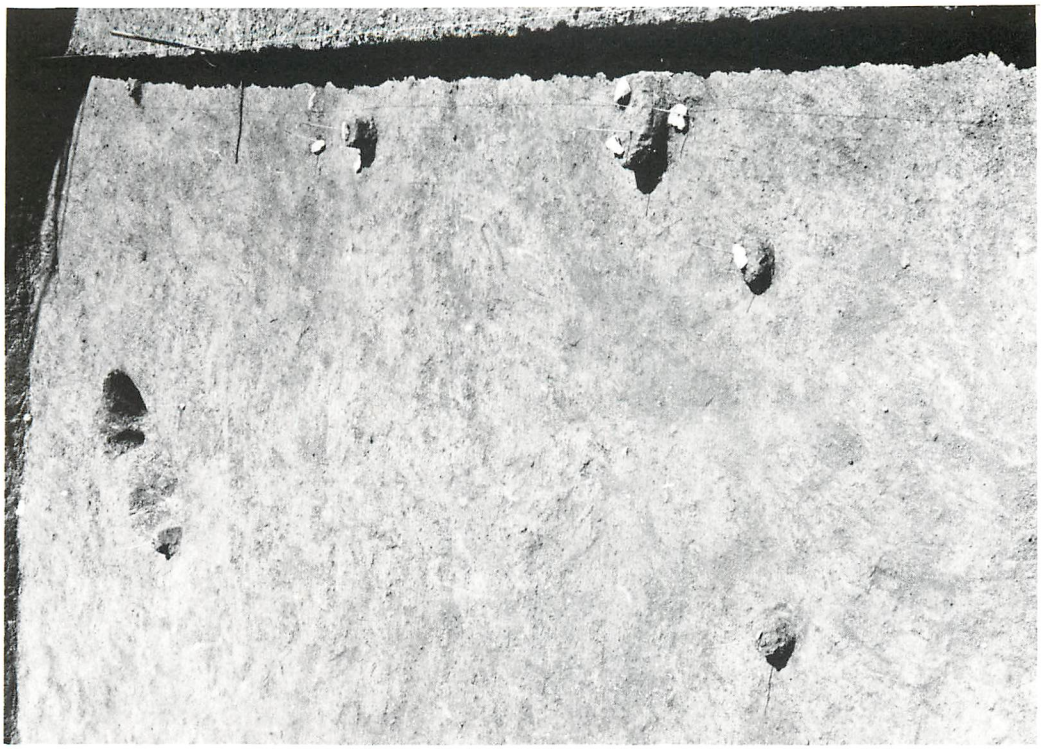
上：A地区須恵器出土状況　　下：B地区Ⅱ層縄文土器出土状況



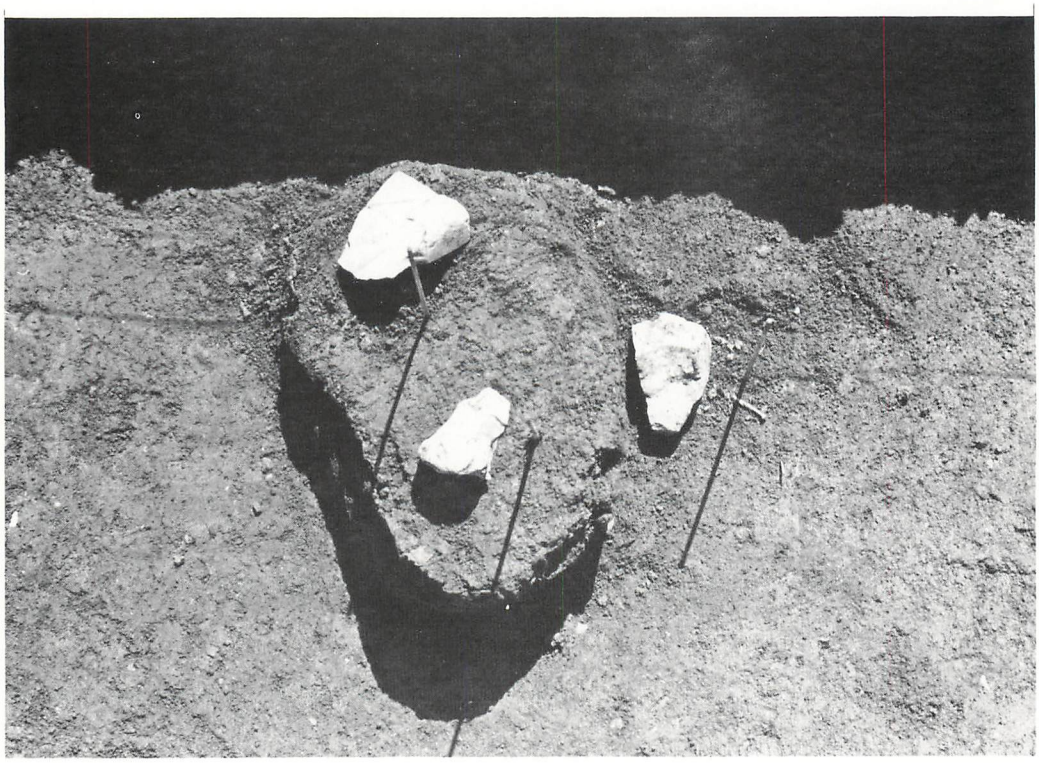
上：B地区Ⅱ層石器出土状況

下：B地区Ⅱ層縄文土器出土状況

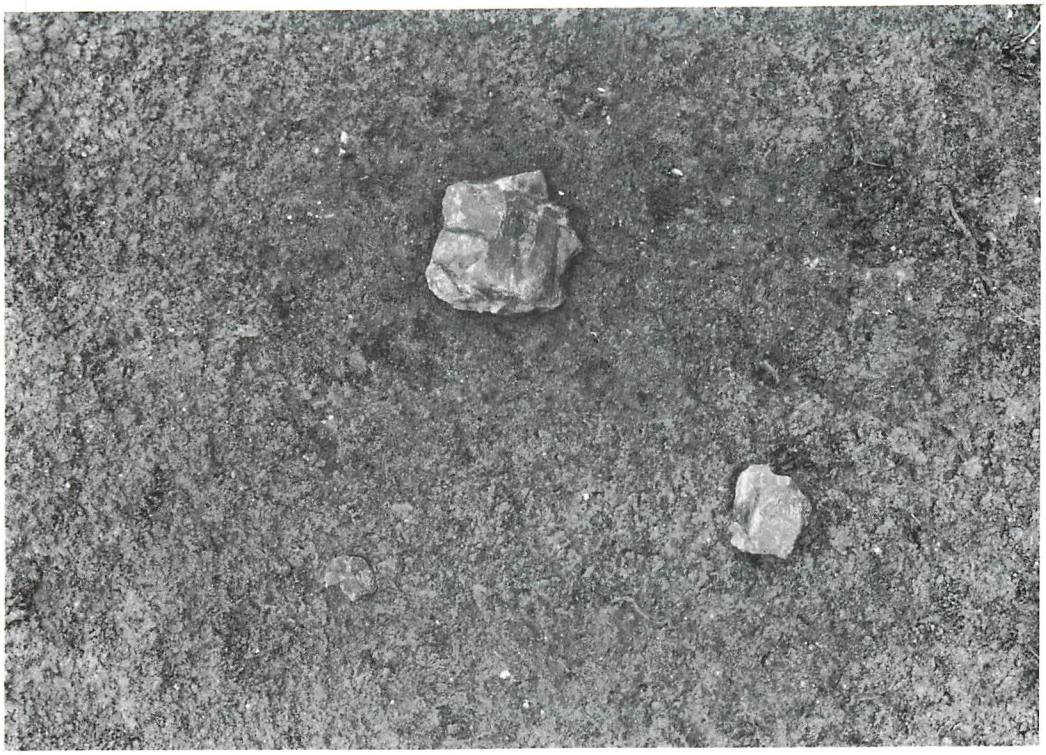
上：B地区Ⅲ層ナイフ形石器出土状況　　下：B地区Ⅲ層石核出土状況



上：B地区Ⅳ層遺物出土状況　　下：B地区Ⅳ層遺物出土状況



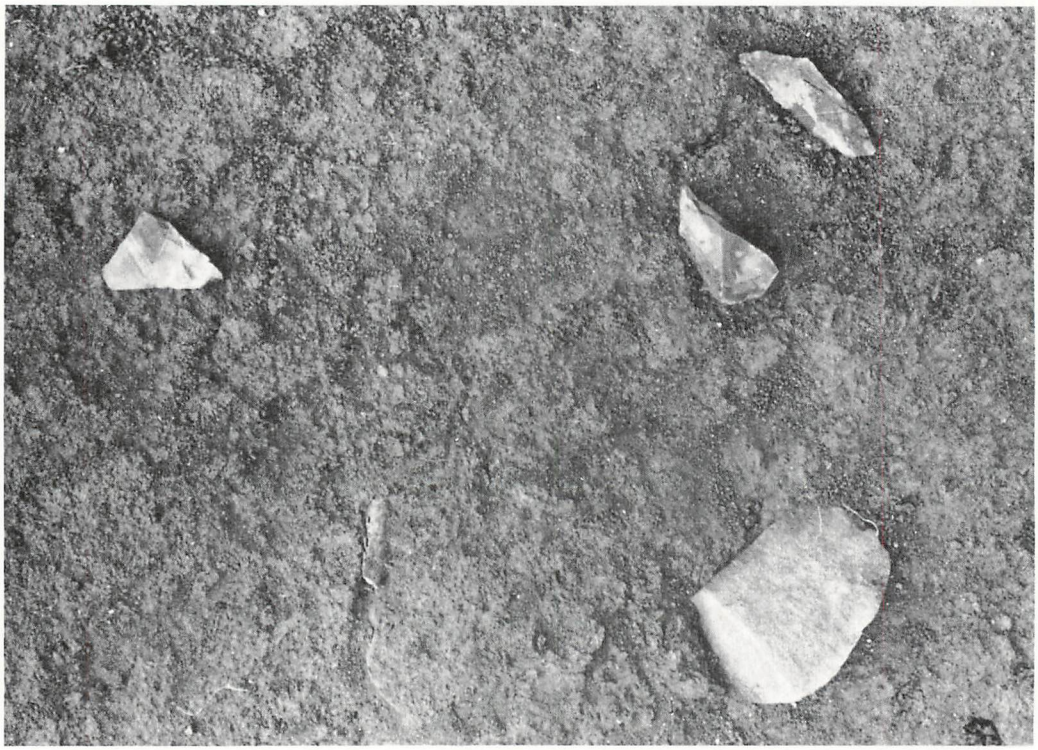
上：B地区Ⅳ層遺物出土状況　　下：B地区Ⅳ層遺物出土状況

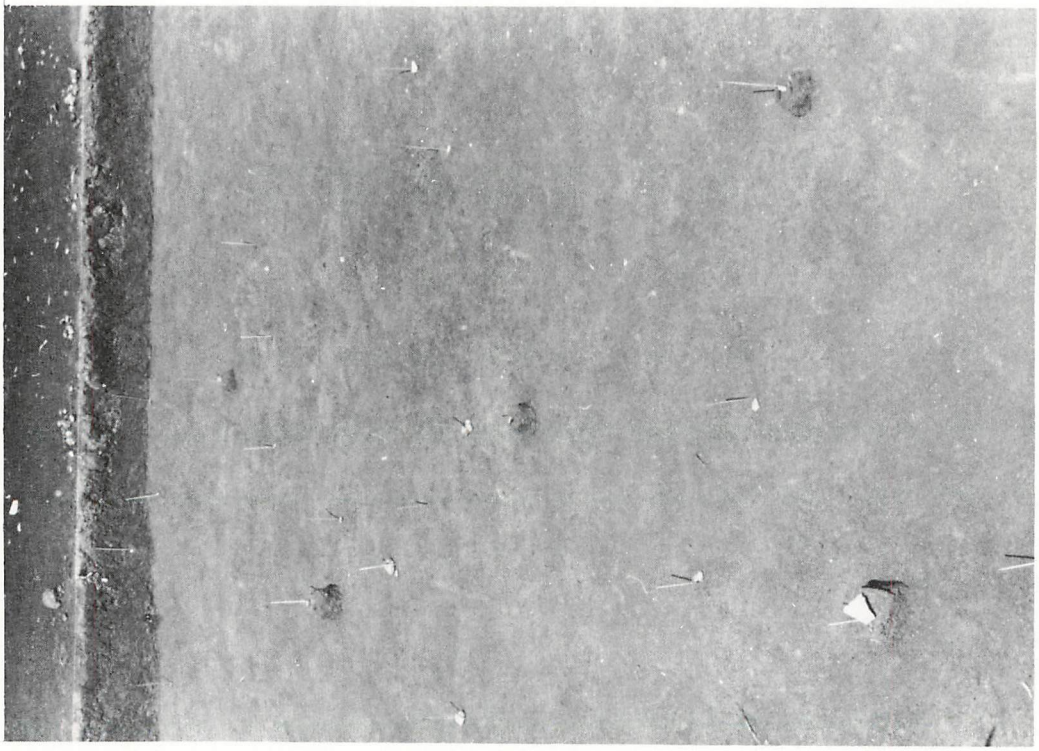


上：C地区Ⅱ層遺物出土状況　　下：C地区Ⅱ層遺物出土状況

上：C地区Ⅱ層石鏃出土状況　　下：C地区Ⅱ層遺物出土状況

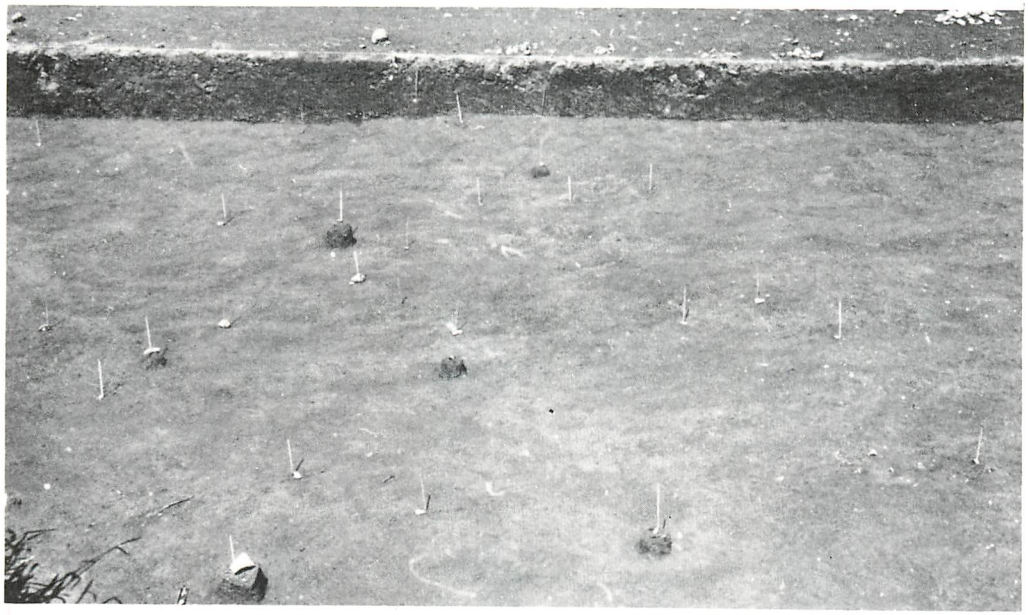
上：C地区Ⅱ層石鏃出土状況　　下：C地区Ⅱ層石鏃出土状況





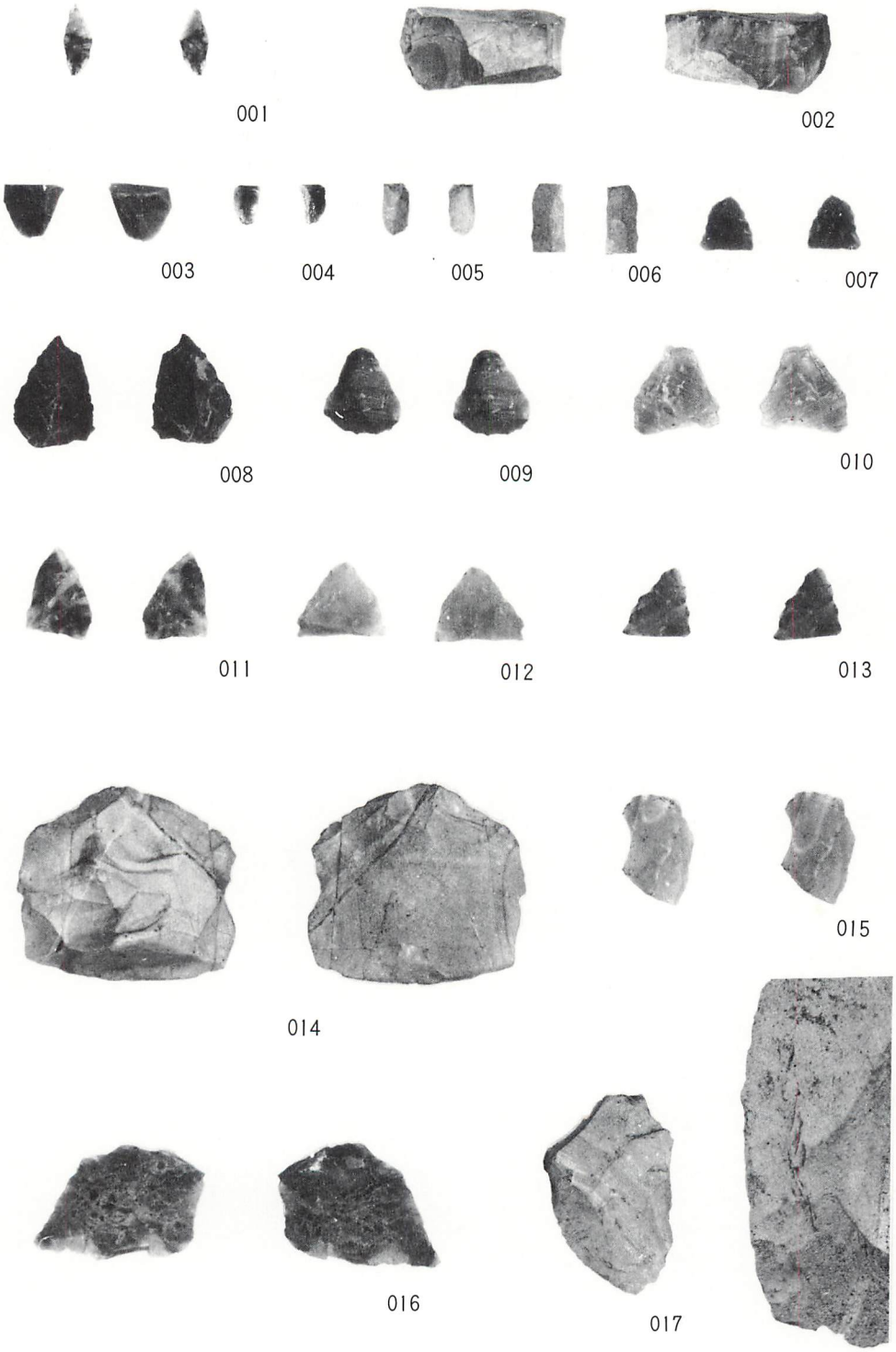
上：C地区Ⅱ層遺物出土状況　　下：C地区Ⅲ層遺物出土状況

図版17



上：C地区Ⅲ層遺物出土状況

下C地区Ⅳ層遺物出土状況



出土遺物（001～017　第20図）

001

017

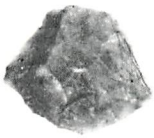
018

019

020

021

022



023

024

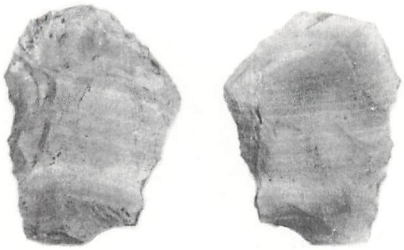
026

027

026

028

出土遺物（001、017～028　第21図）



029

030

031

033

032

036

034

035

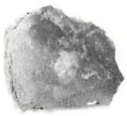
037

038

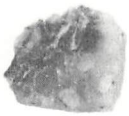
039

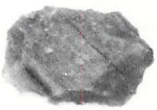
040

041



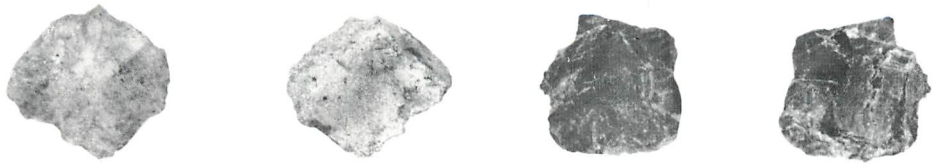
042



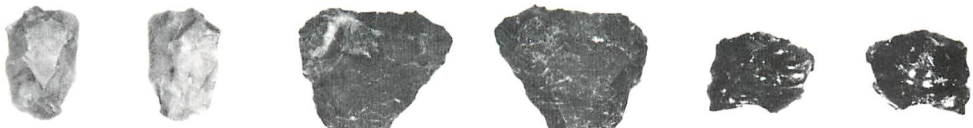


043

出土遺物（029～043 第23図）



044　045



046　047　048

049　050

051　052

053　054　055

出土遺物（044～055 第24図）

056

057

058

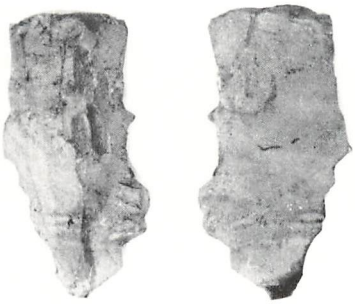
060

059

061

062

063



064

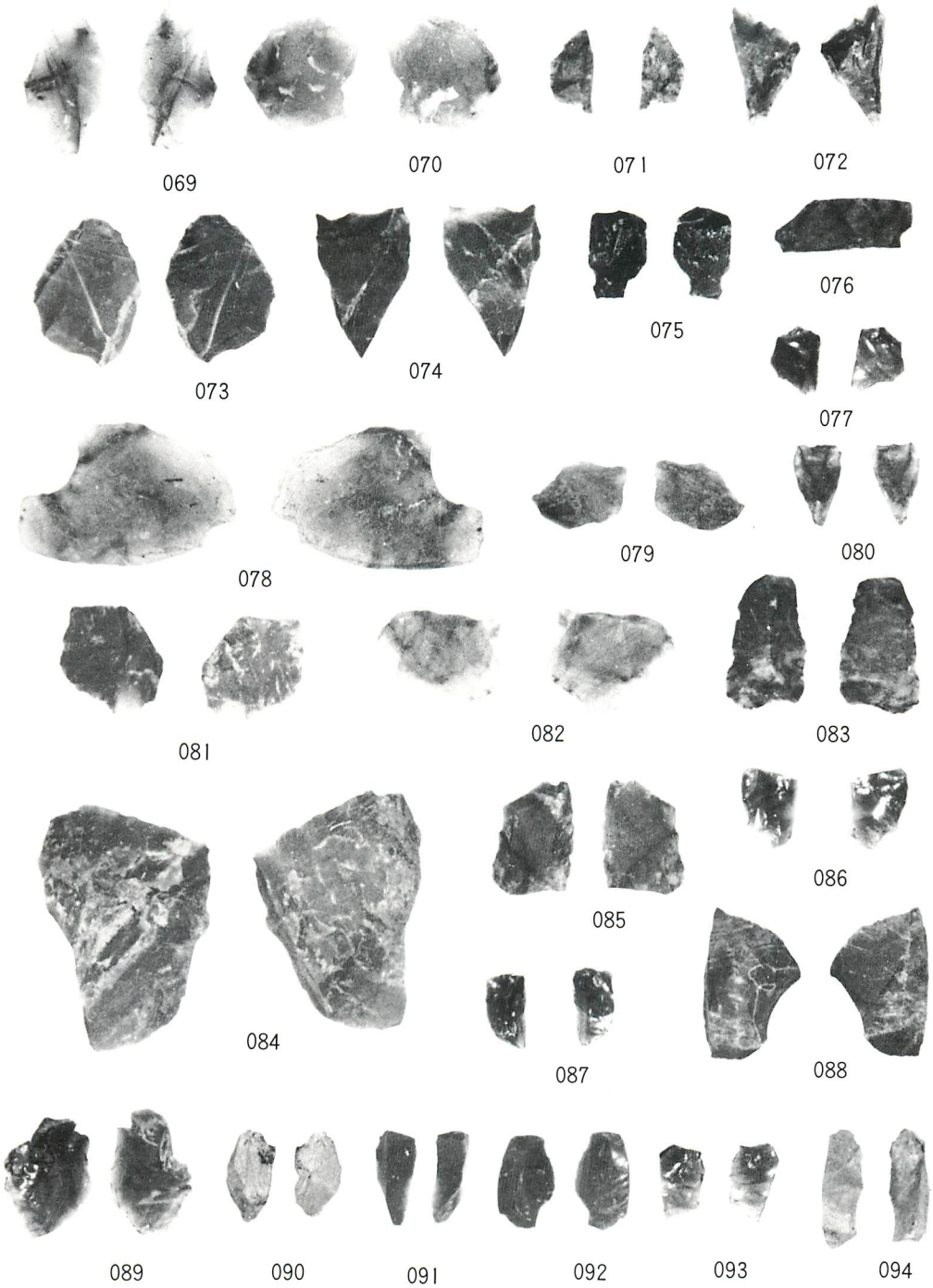
065

066

067

068

出土遺物（056～068 第25図）



出土遺物（069～094 第27図）

062

095

096

097

098

099

100

101

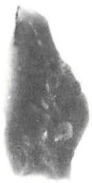
102

103

104

105

106



107

108

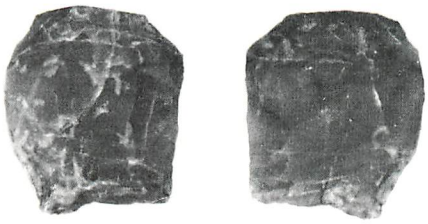
109

出土遺物（095～109 第30図）

110

114

115



111

116

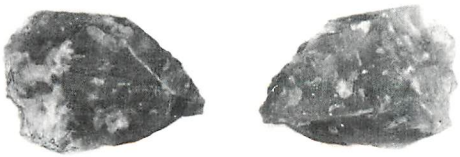
112

117

118

119

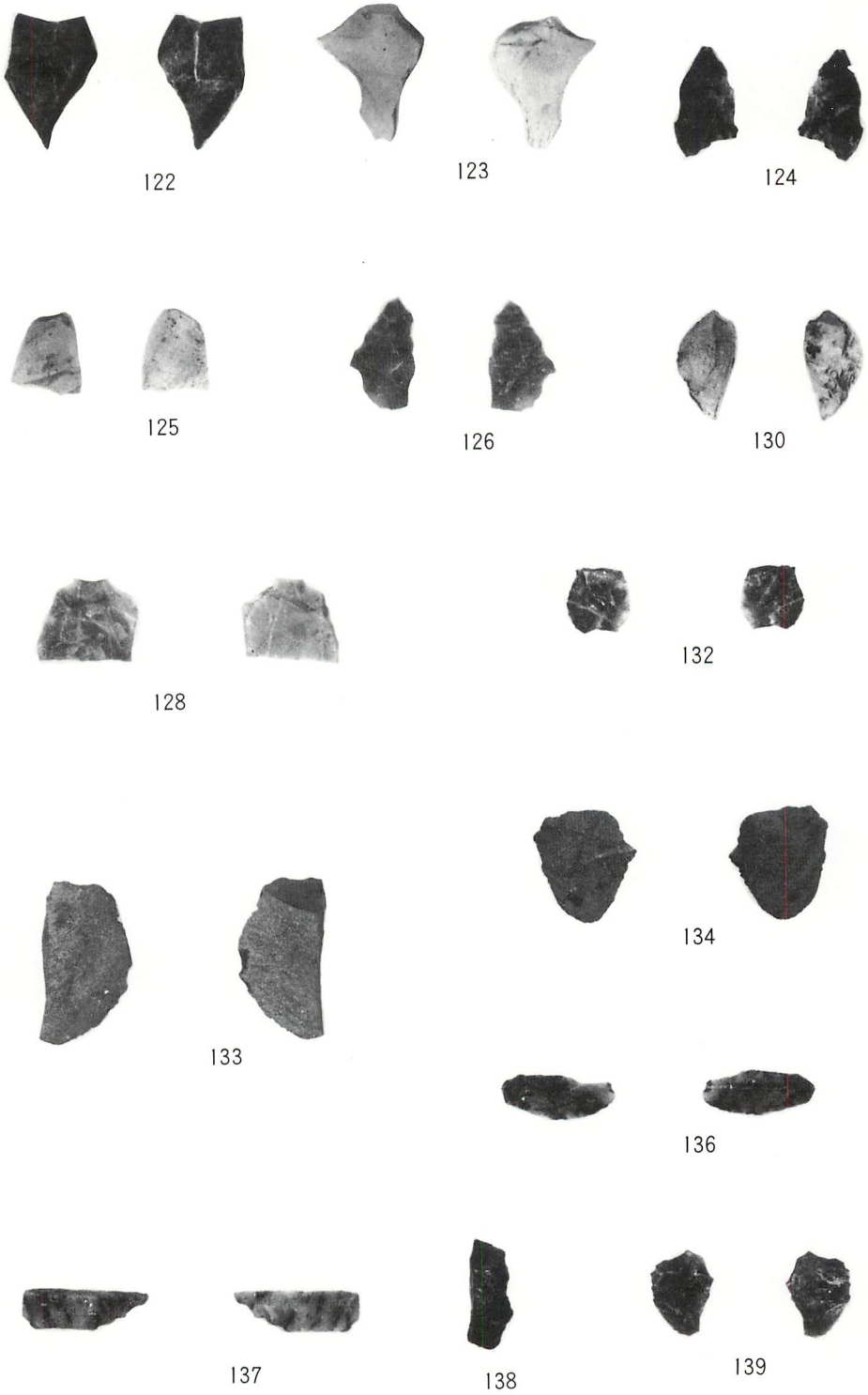
120



113

121

出土遺物（110～121 第31図）



出土遺物（122～139 第32図）

127

130

131

129

出土遺物（127、129～131 第32図）

140

141

142

143

144

145

146

147

148

149

150

151

152

153

154

155

156

158

159

160

161

162

163

出土遺物（140～163 第33図）

164

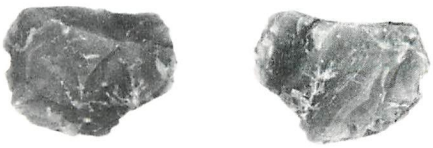
165

166

171

167

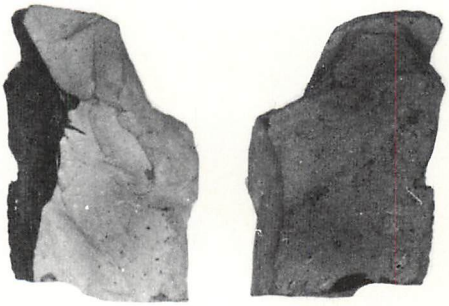
168



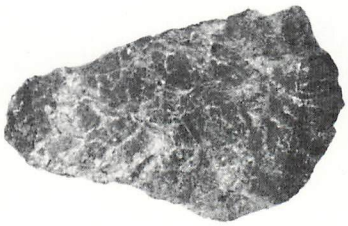
169

170

出土遺物（164～170 第36図）



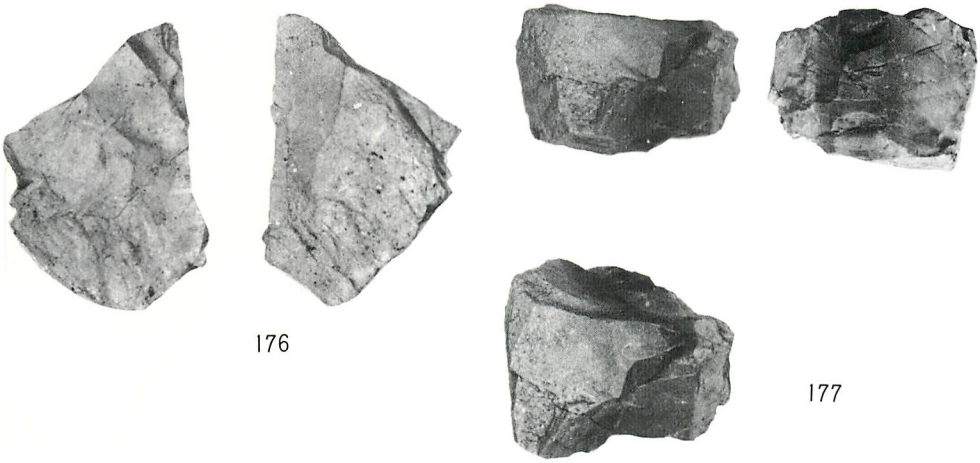
172



173

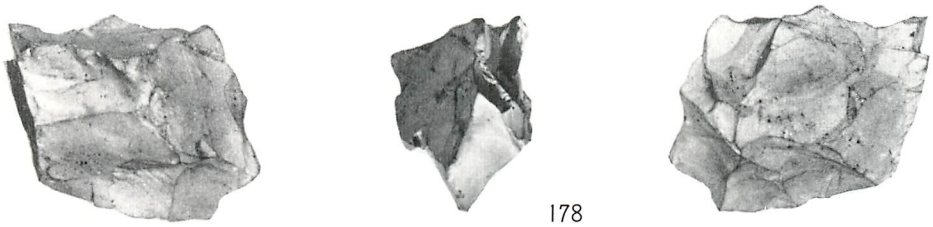
174

出土遺物（172～175 第37図）

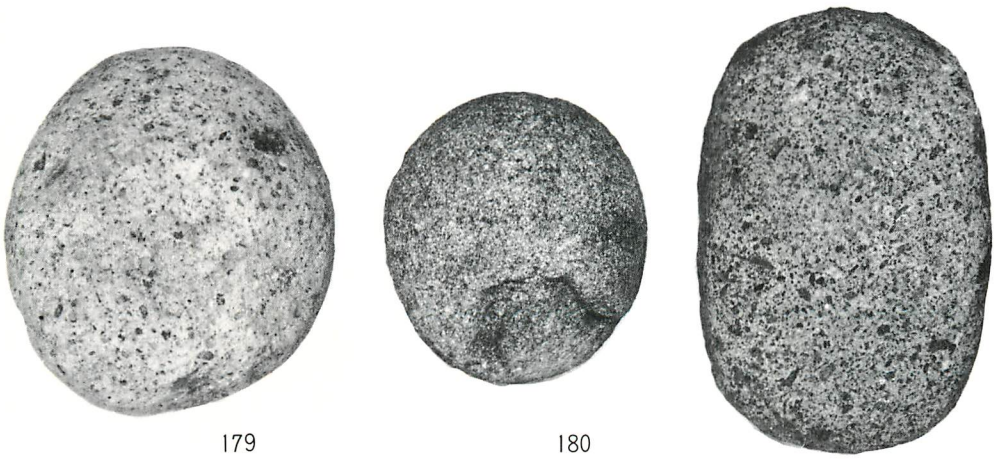


176

177



178

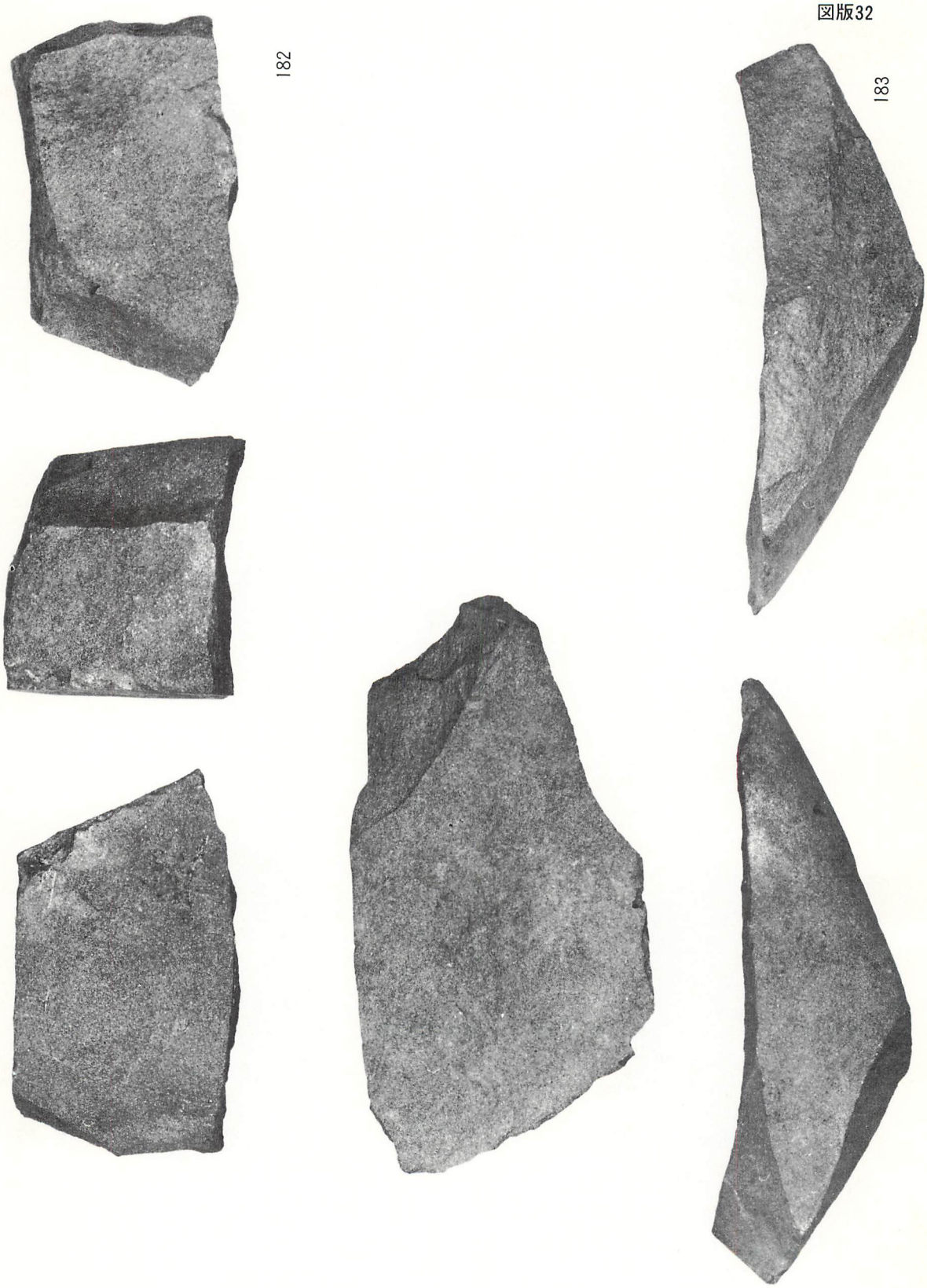


179

180

181

出土遺物（176～181 第38図）



出土遺物（182、183 第39図）

熊本県文化財調査報告　第35集

立神ドトク遺跡

昭和54年3月31日

編集　熊本県教育委員会
発行　〒861　熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷　(株)城野印刷所
〒860　熊本市琴平1丁目4番1号

熊本県文化財調査報告　第35集

「立神ドトク遺跡」　正　誤　表

頁	行	誤	正
8	21	前熊本県	元熊本県
8	22	同	熊本県文化課
8	26	同　前	元熊本県文化課
8	28	同	熊本県文化課
14	5	石製、蓋	石製衣蓋
20	20	風火火山灰	風化火山灰
24	9	神第Ⅳ層	立神第Ⅳ層
26	17	機　種	器　種
32	10	機　種	器　種
32	13	平坦地傾向は	平坦地は
39	2．3	機　種	器　種
39	7	石　錐	錐　器
40	24	統紋岩	流紋岩
41	18	尖　している	尖らしている
44	24．32	厚礫面	原礫面
61	8	統紋岩	流紋岩
64	7．15	統紋岩	流紋岩
67	22	統紋岩	流紋岩
72	7	平坦画	平坦面
74	28	細石核	細石刃
75	5	把握さる得る	把握され得る
75	17	インタストリー	イングストリー
75	31	施こし	施　し
75	33	尖がらし	尖らし
75	35	8ケ所	9ケ所
76	12	剝	トル

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 35 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：立神ドトク遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日